

( )

『雨月物語』研究  
——漢字表記の使い分けの意義——

九五〇一九  
渡部 千絵

( )

第二章		第一章		第三章		第二章		第一章		序
第二節	「怨み」と「怨ず」の関連性	第一節	「雨月物語」の「怨み」と「恨み」	第三節	「うらみ」の表記の実態と意味	第二節	「菊花の約」を中心とした「われ」の表記	第一節	「こゝろ」「かへる」「あやし」の表記	「雨月物語」における訓の使い分けの実態と意味
179	147	115	97	51	30	7	1			

( )

参 結  
考 び  
文 第三  
献 節  
目  
録  
「浅茅が宿」の「恨み」について

24 / 235 203

## 序

『雨月物語』は明和五年（一七六八）三月、上田秋成  
 によつて書かれた読本である。形式は読本である。五卷  
 九編となつており、先行作品である『古今奇談英草紙』  
 一作者、都賀庭鐘。寛延二年、一七四九年刊の影響を  
 強く受けている。形式のみならず、作品の多くを中国白  
 話小説の翻案で構成している点、語彙や文章表現にいた  
 るまで『英草紙』『雨月物語』『古今奇談繁野話』『都賀庭鐘  
 三年』は『雨月物語』に影響を与えている。  
 主として考察するものであるが、『雨月物語』の使い分けを  
 で、一つの漢字に対して二通りの訓が付けられているこ  
 とに気づく。秋成が意識的にその訓を使い分けたのか、  
 もしそうならばどのような基準が置かれていたのか、



いて個々の用例に當つて考えた。漢字と訓との關係について「英草紙」「繁野話」が漢字表記の左右に二通りの仮名を付していること、さらに秋成が「雨月物語」を書くに際して、かなり意識して漢字を施していることなどから、秋成自身、意識的に漢字に訓を付していると考えられる。

「西山物語」に關しては、秋成は「雨月物語」をこの物語に對抗して書いたのではないかと云われている。この物の根拠は、明和五年二月に「西山物語」が刊行されて、そのだが、秋成は明和三年に「諸道聴耳世間猿」を、四年に「世間妾形氣」という浮世草子を出版しており、廻船便「西行はなし歌枕染風呂敷」を予告していたのに、その予定を変更して「雨月物語」を発表して、しかも實際の出版年と異なる明和五年を序文に記している。

とが挙げられる。〔なお実際に『雨月物語』が刊行され  
 たのは明和五年の八年後、安永五年であつた〕  
 なり。語言、何を以て異るや。蓋し世に汚隆有りて、人  
 は雅俗を分つなり。是を以て学ぶ者の古語に通ずるや、  
 憂々たる乎、難しき哉。〕とあり、言葉の用い方もわざ  
 わざ原拠を示す方法をとっている。『西山物語』が雅語  
 〔伊勢物語、竹取物語など〕に用いられた言語と、当時  
 の言語を併用し、雅語本来の意味を示したように、『雨  
 月物語』は中国文学の翻案であるから漢語に和語の訓が  
 付されている。『雨月物語』は秋成の付した訓を明確に  
 知ることが可能であり、また影印本で直接確認すること  
 も出来る。ここではテキストに国会図書館蔵の刊記「安  
 永五歳丙申孟夏吉旦」の『雨月物語』を用いて、訓と漢  
 字を引用するものとする。一つの漢字に異なる訓を付け  
 取りあげ、語としては、一つの漢字に異なる訓を付け

たものの中から「約」と「鬼」を、一つの訓に複数の漢  
 字を使い分け、ける、あやし「を、さらに「うらむ」を  
 した。第一章では、二通りの訓を持つ「約」と「鬼」の語に  
 ついて、それぞれの訓の厳密な意味を考察する。その際  
 あくまでも『雨月物語』全編を通しての統一した基準を  
 求める為に、この二語を取りあげて確認しうる程度の用例  
 を有していた。一つの訓に対して複数の漢字の使い分け  
 をなしている語を取り扱うのだが、訓は一つで漢字の使  
 い分けによつて細かい状況を表現するといふことは、な  
 にも『雨月物語』に限定したものでない。そこで、そ  
 のような使い分けの細かい基準を明らかにすることでは、  
 秋成の表現に対する配慮を語ることとし、『雨月物語』  
 独自の表現を見いだせないかといふことも考えたい。

影 印 本 を 用 い 、 翻 刻 も 渡 部 が 行 っ た 。  
 い 。  
 ど う い っ た 性 質 の も の な の か に つ い て も 言 及 し て い き た  
 ま た 作 品 を 「 浅 茅 が 宿 」 に 限 定 し て 、 そ の 「 恨 み 」 が  
 言 葉 の 嚴 密 な 意 味 を 明 ら か に し て い き た い 。  
 基 準 に 従 っ て 、 個 々 の 用 例 を 確 認 し 、 「 う ら み 」 と い う  
 通 じ て 矛 盾 が 生 じ る 例 が あ る 。 こ こ で は 基 本 的 に は そ の  
 そ れ だ け で は 使 い 分 け の 基 準 と し て 『 雨 月 物 語 』 全 体 を  
 い っ た 大 ま か な 意 味 の 違 い を 指 摘 さ れ て い る 。 し か し 、  
 讐 の 念 、 「 恨 」 は 自 己 に 向 け ら れ る 悔 恨 の 意 味 を 表 す と 復  
 藁 科 勝 之 氏 な ど が 、 「 怨 」 は 他 人 に 向 け ら れ る 怒 り 、 復  
 し た い 。 こ の 「 う ら み 」 は 「 怨 む 」 と 「 恨 む 」 が あ り 、  
 二 つ の 漢 字 が 使 わ れ て い る 「 う ら み 」 の 語 を 研 究 対 象 と  
 さ ら に 第 三 章 で は 、 第 二 章 の よ う に 一 つ の 訓 に 対 し て

( 6 )

## 第一章 『雨月物語』における訓の使い分けの実態と

## 意味

訓は一つの漢字に一種類が当てられているが、そのこのことが顕著に感じられるのが、「菊花の約」の「約」の漢字である。「約」の訓について「菊花の約」と「浅茅が宿」に「約」二種類があることは、浅野三平氏の『上田秋成研究』などにも取り上げられており、浅野氏はこのことを「約束」は「誓い」ほどの重さがあり、必ず守られるべきものであるために「ちかひ」の訓が付けられているのだと述べられてい。この「約」の訓について、秋成が用いたであろう訓の使い分けの意味では「菊花の約」と「浅茅が宿」に「約」

の漢字が使われている。  
 「浅茅が宿」は「ちかひ」として一例しか用例が認められ  
 ない。使い分けという面では、「菊花の約」が用例も  
 多く、基準を求めることが可能かと思われる。  
 その「約」の字であるが、「ちかひ」「ちぎり」「や  
 く」の三種類の訓が付されて「ちかひ」に表題に用いられ  
 ている。「ちぎり」と本文に用いられる。「ちかひ」は、一  
 見同じ約束を示しているにも関わらず訓が異なっており、  
 考察の必要があると思われる。  
 そこで『雨月物語』の中で用いられている「ちかひ」  
 「ちぎり」に関連の語を挙げておきたい。

一、菊花の約「  
 一、表題「菊花の約」  
 二、実やかに約つつも  
 三、終ひに兄弟の盟をなす。  
 四、左門云。秋はいつの日を定めて待べきや。ねがふ

一 浅 茅 が 宿 一  
 十 四 、 伯 氏 菊 花 の 約 重 ん じ 。 命 を 捨 て 百 里 を 来  
 十 三 、 伯 氏 宗 右 衛 門 一 旦 の 約 を お も ん じ 。  
 十 二 、 し か じ か の や う に 約 に 背 く が ゆ ゑ に 。  
 十 一 、 兄 長 今 夜 菊 花 の 約 に 恃 来 。  
 十 、 な ら ば 。 伯 氏 赤 穴 が 約 に た が ふ を 怨 る と  
 九 、 今 夜 陰 風 に 乗 て は る 来 り 菊 花 の 約 に 赴 。  
 八 、 此 約 に た が ふ も の な ら ば 。 賢 弟 吾 を 何 も の と か  
 七 、 賢 弟 が 菊 花 の 約 あ る こ と を か た り て 去 ん と す れ  
 六 、 盟 た が は 来 り 給 ふ こ と の う れ し さ よ 。  
 五 、 左 門 云 。 赤 穴 は 信 あ る 武 士 な れ ば 必 約 を 誤 ら じ 。  
 は 約 し 玉 へ 。



只<sup>ただ</sup>烈<sup>りつ</sup>婦<sup>め</sup>の<sup>み</sup>主<sup>めし</sup>が<sup>あ</sup>秋<sup>あき</sup>を<sup>ち</sup>約<sup>やく</sup>ひ<sup>ふ</sup>玉<sup>たま</sup>ふ<sup>を</sup>守<sup>まも</sup>り<sup>て</sup>。家<sup>いへ</sup>を<sup>だ</sup>出<sup>で</sup>玉<sup>たま</sup>は  
 ず。<sup>。</sup>「吉<sup>きち</sup>備<sup>び</sup>津<sup>つ</sup>の<sup>か</sup>釜<sup>か</sup>」  
 強<sup>あはれ</sup>に<sup>す</sup>ゝ<sup>む</sup>れ<sup>ば</sup>。<sup>。</sup>盟<sup>ちがひ</sup>約<sup>やく</sup>す<sup>で</sup>に<sup>な</sup>り<sup>て</sup>井<sup>い</sup>沢<sup>ざ</sup>に<sup>か</sup>へ<sup>り</sup>こ  
 と<sup>す</sup>。<sup>。</sup>「蛇<sup>へび</sup>性<sup>せい</sup>の<sup>こ</sup>姪<sup>めい</sup>」  
 一<sup>。</sup>、此<sup>こ</sup>一<sup>ひと</sup>杯<sup>はい</sup>に<sup>ち</sup>と<sup>せ</sup>の<sup>ちがひ</sup>契<sup>ちがひ</sup>を<sup>は</sup>じ<sup>め</sup>な<sup>ん</sup>と<sup>い</sup>ふ。<sup>。</sup>  
 二<sup>。</sup>、も<sup>と</sup>よ<sup>り</sup>容<sup>め</sup>姿<sup>さ</sup>の<sup>よ</sup>ろ<sup>し</sup>き<sup>を</sup>愛<sup>め</sup>よ<sup>ろ</sup>こ<sup>び</sup>。<sup>。</sup>千<sup>ち</sup>と<sup>せ</sup>  
 を<sup>か</sup>け<sup>て</sup>契<sup>ちがひ</sup>る<sup>に</sup>は<sup>。</sup>  
 三<sup>。</sup>、富<sup>とみ</sup>子<sup>こ</sup>即<sup>すなは</sup>面<sup>おもて</sup>を<sup>あ</sup>げ<sup>て</sup>。<sup>。</sup>古<sup>ふる</sup>き<sup>ちがひ</sup>契<sup>ちがひ</sup>を<sup>わす</sup>れ<sup>玉</sup>ひ<sup>て</sup>。<sup>。</sup>  
 四<sup>。</sup>、吾<sup>われ</sup>君<sup>きみ</sup>な<sup>あや</sup>怪<sup>あや</sup>し<sup>み</sup>玉<sup>たま</sup>ひ<sup>そ</sup>。<sup>。</sup>海<sup>うみ</sup>に<sup>ちがひ</sup>誓<sup>ちか</sup>ひ<sup>山</sup>に<sup>ちがひ</sup>盟<sup>ちがひ</sup>ひ<sup>し</sup>事<sup>こと</sup>を  
 速<sup>はや</sup>く<sup>わ</sup>す<sup>れ</sup>玉<sup>たま</sup>ふ<sup>と</sup>も<sup>。</sup>  
 五<sup>。</sup>、か<sup>う</sup>め<sup>で</sup>た<sup>き</sup>御<sup>ご</sup>契<sup>ちがひ</sup>な<sup>る</sup>は<sup>と</sup>て<sup>出</sup>る<sup>は</sup>ま<sup>ろ</sup>や<sup>な</sup>り。<sup>。</sup>  
 以上<sup>。</sup>「雨<sup>あめ</sup>月<sup>つき</sup>物<sup>もの</sup>語<sup>ご</sup>」の<sup>ちがひ</sup>全<sup>ぜん</sup>用<sup>よう</sup>例<sup>れい</sup>で<sup>あ</sup>る<sup>が</sup>、こ<sup>こ</sup>に<sup>み</sup>え<sup>ら</sup>れ  
 一<sup>。</sup>に<sup>し</sup>集<sup>し</sup>中<sup>ちゆう</sup>し<sup>て</sup>お<sup>り</sup>、重<sup>じゆう</sup>要<sup>やう</sup>な<sup>も</sup>ち<sup>。</sup>一<sup>。</sup>フ<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>か<sup>ら</sup>こ<sup>そ</sup>

↑	丹治
<p>七、菊花の約<small>ちかう</small> ↑</p> <p>《 赤 穴 出 六、盟<small>ちひ</small>》</p> <p>三、兄弟の盟<small>ちひ</small> ↑</p> <p>二、実やかに約<small>ちひ</small>りつつも</p> <p>約<small>ちかう</small> 四、約<small>ちひ</small>し玉へ</p>	<p>宗右衛門</p> <p>左門</p>
↓	母

「約」の訓の差異は、意味の厳密な差異である事は容易に推測される。では「菊花の約」の作品を中心に「約」の意義を明らかにしたい。この作品を整理図化するに当たって、まず発語方向の面から何らかの基準が存在していないかを考えた。い。

玉へ「以外」の「約」は、動詞である。「約りつつ」と、「約し  
 ひ「母や丹治に對しては「ちぎり」という表記である  
 が、赤穴宗右衛門の死後、もしくは再会の成就の前は、  
 全て「ちかひ」で統一されて、盟を結んで、いる事から、二  
 ここの左門と赤穴は兄弟の盟を結んで、いる事から、二

↑ ↑

八、此約ちかひ  
 九、菊花の約ちかひ  
 ≪ 赤穴の約ちかひ —  
 消える ↓ ↓

十一、菊花の約ちかひ  
 十二、約ちかひ  
 十三、旦ちかひの約ちかひ  
 十四、菊花の約ちかひ

↑

十、  
 が約ちかひ赤穴

者を一体として考えると、六、八、九の三例は「ちかひ」で  
 も構わない。だがもしもその様な基準である「ちぎり」  
 についての例は二例とも赤穴が生じており、再会の約束が  
 果たされるか否かが未定の時に用いられてゐる。そして  
 約束が果たされた後は既に「約」と思われる。つまり「約」  
 の語の発せられる方向と、「約」の成就の前後によつて  
 訓が変化すると、この基準で考えると、  
 左門と赤穴に「約」といふ確信が  
 あり、既に結ばれた兄弟の盟と同様に「約」を用いたと  
 も考えられる。この場合、左門の母や赤穴丹治に「約」  
 約束とは、あくまでも未定であり、その成就に關しては  
 甚だ懷疑的である。約束の当事者でない彼らにとつて、  
 未だ果たされたい。約束を、必ず果たされるものと捉  
 えることは難しい。だが、一旦約束が果たされた後は、

それを信じることは容易い。そこで成就後は「ちかひ」  
 で統一されるという基準で使い分けがなされている、と  
 はいえないであろうか。  
 だが、この基準で用例を確認すると、例外が一例生じ  
 ている。十の左門の母の語る「ちかひ」である。この時  
 点では母は、約束が成就されたかどうか知らされていな  
 い。それどころか母は赤穴が約束に間に合わなかったと  
 考えているのである。従って、約束の成就の前後で訓が  
 変えられるというとの基準は成立しない。あるのかを考  
 えて、「約束」の表現するものが何であるのかを考えて、  
 訓の差異の基準を明らかにしたい。  
 ここではまず「約束」の行為の主体が誰なのか、又何を  
 意味しているのかを論証する事で、「約束」の訓の差異が  
 指示内容によつて生じることを確認したい。  
 基本に戻つて、「約束」「盟」「ちかひ」「ちぎり」の  
 意味を押さえておきたい。

## 『大漢和辞典』

約 一、むすぶ。イ、たねる。つかねる。しばる。

口、あはす。結合する。二、したがる。三、ちかふ。

約束する。四、ちかひ。約束。條約。五、わりふ。

證券。

「約信」言葉で固くやくそくする。固い口約束をする。

「約誓」ちかひ。ちかふ。盟約。誓約。

「約束」一、つかねる。しばる。たばねる。束縛。

二、ちかひ。いひ交はす。ちぎる。後事に就いて

互に取きめる。又、其のこと。軍令。契約。

盟 一、ちかふ。ちかひ。おたがひが取りかはした約

束のことばを神に告げ、犠牲を殺して血をすすり、

そのいはりなきを誓約する。又、そのこと。

「周禮、秋官、序官」司盟。「注」盟、以ニ約辭一

告レ神、殺レ牲、敵レ血、明ニ著其信一也。

二、約束。三、約束を結んだ仲間。趣味、嗜好を同

じくする者の集まり。

「盟友」親交をちかつた睦じい友。

「盟弟」義兄弟

「盟約」誓約する。ちかひ。契約。盟誓。

『時代別国語大辞典』

ちかひ「誓」①神仏など絶対者に対して、違背した

場合の制裁を条件に、ある事の実行を約束すること。

②特に仏が一切の衆生を救おうとたてた誓願をいう。

ちぎり「契」①交わした約束を決して破らないと誓

つて、当事者間で特別の関係を結ぶこと。また、そ

の結びつき。特に男女関係のそれについていう。

「契・盟、二字義同。盟者二人、<sup>スツテ</sup>敵<sup>レ</sup>血以約諾、其

不変之義明白也、故盟字双<sup>レ</sup>朋從<sup>レ</sup>血也。」「(下学)

『角川古語大辞典』

ちかひ「誓」①約束。誓約。特に、神仏にかけての

約束。その際に、約束に背いたならば罰をこうむる

## 次

この ように 行為の 主体が 夫々 異なっていることは、  
 赤 穴 宗 右 衛 門 と 左 門 二、三、五、七  
 左 門 なし  
 宗 右 衛 門 六、八、九、十、十一、十二、十三、十四  
 「ちかひ」と「ちぎり」の 行為の 主体  
 に その 行為の 主体が 誰なのかを 挙げて おきたい。  
 以上が「ちかひ」「ちぎり」の 語句の 意味であるが、  
 定められた 運命。前世からの 因縁。宿縁。  
 ⑤ 縁を 結ぶ こと。ちなみを 持つ こと。⑥ 前生からの  
 主 従 などの 関係 を いつまでも 維持 しよう という 盟約。  
 共 寝 を する こと。夫婦 になる こと。④ 師弟、友人、  
 ③ ② から 転じて、男女 の 交わり。深い 仲 になる こと。  
 愛 の 誓い。心 変り せず に 愛 し つづ ける という 誓約。  
 ち ぎ り 「契」① 固い 約束。誓約。② 特に、男女間の  
 ② 仏が 衆生を 救おう と 立て た 誓願。  
 べし と 誓紙を 書き、ある いは 誓言を 唱える など する。



「約」の内容の微妙な差異と関連していると考えられる。  
 先程「約」に關わる「ちかひ」と「ちぎり」の訓から  
 想起する意味をあげたが、  
 も単数でもかまわないが、  
 立しえないといふ大きな差異が存在している。この事を  
 踏まえて、順に「約」「盟」「ちぎり」で考察を加えたい。  
 意外にも「菊花の約」と表現されている箇所は三例ある。  
 その中で「ちぎり」と訓がなされていゝのは一例のみで  
 赤穴宗右衛門が丹治に語る七の用例である。ここでは、  
 丹治という他者に「約」の存在と、加古の驛への回帰の  
 必然性を語っているのだが、ではそもそも「菊花の約」  
 とは何を意味しているのか。約束を取り結ぶ本  
 文を引用したい。  
 左門いふ。さあらは兄長いつの時にか帰り玉ふべき。  
 赤穴いふ。月日は逝やすすし。おそくとも此秋は過ぎ





陽 昼・男・大・動・富・表・奇数・春・夏・東・南  
 また「菊花の約」の中に「死んだ赤穴宗右衛門が「吾  
 は陽世の人にあらず」と語っていることも、陽が生を意  
 味していることを示している。  
 また「この節句に菊酒が欠かせないものであったこと  
 は、『太平記』にも記述があり、菊花にはこの節句を想  
 起させるイメーヂがあつたと思われ。  
 この「菊花の約」が何を意味しているのかについては  
 赤穴と左門の九月九日の再会、具体的には赤穴の山陰か  
 らの回帰と、左門の「節句と再会を祝う準備であつた。  
 「菊花の約」の表題は、この作品が約束を重要なモチ  
 フとしていること、この約束がいかに成じられるの  
 か、それによつて赤穴と左門の信義が明らかにされるこ  
 とを示している。  
 従つて表題には、両者の信義を根本に置いた交わりと、  
 その信義を明らかにする為に交わされた約束を指示する、

ため「ちぎり」の訓が付けられたのであり、同様の事  
 が第七例の「菊花の約」にも表現されているといえよう。  
 第二例を検証しよう。ここでは「約」は動詞として用  
 いられており、左門と赤穴の交流を示している。つまり  
 二者が動作主体なのであるから「ちぎり」が用いられた  
 のである。第四例は「約し玉へ」と唯一「やく」の訓が与えられ  
 ている。これは左門が赤穴に対して約束を求めている場  
 面に使われている。この性質について確認しておきたいが、  
 これは主體的になされるべき事象であって、自らの行為、  
 は自らが決定するべきであらう。左門は赤穴に約束を求  
 めたが、赤穴にとつてこの約束は自らの行為のみを「誓  
 う」ことであつた。そしてこの「赤穴の「重陽の佳節」を  
 もて帰来の日とすべし」という約束を受けて、左門が今  
 度は自らの行為、「一枝の菊花に薄酒を備へて待たてま

つらん「を約すのである。  
 を決まり、左門は行為の主体者ではない。為に赤穴の行為  
 を決する。ことは出来ない。で、「ちかひ玉へ」とは語  
 れず、また自分の行為までも赤穴に決定させるのではないこと  
 為に「ちぎり」という訓を使うのも適切ではないこと  
 からこの「やく」という音訓が用いられたのである。  
 その動作主体によつて区別されてゐる。第五例の訓は、  
 よう。ここで語られてゐることは、赤穴はその信義によ  
 つて必ず約束を守るといふことである。この場合の約束  
 は、赤穴の帰り来る行為と左門の信じて待つ「再会の準  
 備も含む」行為を示す。より単純にいうならば「再会その  
 ものを指示してゐるのである。したがつて訓は「ちぎり」  
 がとられてゐる。である。  
 第七例は表題の所でも述べたが、やはり両者の行為が  
 語られており、訓の「ちぎり」に表現されてゐる。

第八例から、第十四例までの七例は、いずれも赤穴の行為を対象に語っていることから、訓が「ちかひ」とされていると言えるのである。従つて「菊花の約」の「約」の訓の使い分けは、動作主体が誰か、赤穴一人なのか、左門も含めるのかによつてなされているといふ結論になる。と、菊の「約」の用例を挙げた中に「盟」の漢字を含めていたが、これもその漢字の使用基準について考察しておきたい。第三例の「兄弟の盟」は、漢字「盟」の意味にあったように、義兄弟という関係を結ぶことであり、通常の約束とは性質を異にしている。約束が単なる行為を示すのとは違つて、「盟」は永続的な行為、関係を字義に含んでいのである。では第六例で再会の「約束」を語っているかのような「ちかひ」に「盟」の漢字が当てられていゝる事はどのような

うに考えたらいのだからうか。  
 この「盟むすたがはで来り給ふこと  
 約束が成就された瞬間に左門の言葉として語られてい  
 る。ここでの約束の成就が持つ意義を明らかにしてお  
 きたい。赤穴と左門の出会いの場面を取りあげよう。  
 門が看病したことが、二人の出会いであつた。左門の知  
 りあい赤穴をはじめ、世話していた主人は、赤穴の病氣  
 は感染の恐れがあるからと、左門を止めようとしたが、  
 左門は耳をかさず看病に取りかかるのである。この行為  
 は赤穴をして、  
 死すとも御心に報むくひたまつらん  
 吾半世の命を必報むくひたてまつらん  
 と左門に語らせるのであつた。この言葉は、後に  
 明らかになる赤穴の死をもつての信義の全う、後には  
 約束の成就の伏線ともなつてゐるのだが、赤穴にとつて



左門との約束が、命を引き替えにしても守るべきものと  
 なることを示している。――盟、其信を明らかに  
 にす、という意味をも有している。赤穴が約束を成就し  
 たその時、赤穴の死は伏せられ、ただその信が約束の成  
 就によつて明らかになるのである。――左門の信は、身を尽く  
 して兄弟の盟がなされた時点では、明らかにされていた。  
 だが、赤穴の信は行為として表出されていかなかったの  
 であり、その面では不完全な「盟」であつたと言えよう。  
 これを補完するものが赤穴の行為、つまり約束の成就  
 なのである。約束の成就は、兄弟の盟の成就でもあつた。  
 従つて約束が果たされた瞬間、「約」は「盟」と同等  
 の意義を持つのである。「菊花の約」という約束には、  
 赤穴と左門の信義の表象をも意味していたのである。――  
 以上で「菊花の約」の訓の使い分けの基準と

「盟」の漢字表記が「約」の代わり「盟」に用いられた意味に  
ついての考察を終えた。結果として「約」の訓の区別  
は、動作主体の明確化を目的としてなされていたとい  
ことが言えるのではないだろうか。  
次に「浅茅が宿」の「約ひ」であるけれども、こ  
動作主体は勝四郎にあり、その為「ちかふ」が用いら  
たと考えられるのである。  
「吉備津の釜」の「盟約」については一説には「盟  
は儀式を伴った誓約であり、「約」は言葉による誓約で  
あるとの論があるが、ここでは「盟約」と「結納」の意  
他の誓約と区別するため「盟約」としたか、あるいは  
「盟」自体を約束するといふ意味で「盟約」としたと考  
えた。  
「蛇性の姪」の「契」について男女の関係をいう通  
常多く用いられる漢字表記であるので問題は無いであ  
ろう。だが第四例の「海に誓ひ山に盟ひし事」は、どのよ

うに考へるべきであらうか。  
 『雨月物語評釈』によれば、  
 二人の契りは、海の深さよりも高く、いつまでも変るまいと堅く約束したこ  
 と、の意。『剪燈新話』卷三の「翠翠伝」に「誓海  
 盟山心已許」海に誓ひ山に盟つて心すでに許す  
 とあるのに拠つたのであるうが、（略）ここでは、  
 それにヒントを得て、真女児と豊雄が紀州の海で契  
 り、大和の山で契つたことに言いかけている。  
 とされておりの説に従つて、原拠からの影響によ  
 っ て用いられたと考へたい。  
 但し、「盟」は儀式を伴つた誓約であつて、「誓」に  
 は兄弟の許しがなく、公に結婚したのでは無いとい  
 う。異があり、その為に使分けがなされたという説も  
 うるが、やはりの前は説をとりた。考察を終え、次の  
 以上をもつて「約」の訓について、の考察を終え、次の

？  
 必要  
 ？

い 第二節では、「鬼」の訓について同じく考察していき  
た。



「いので、まずは『雨月物語』の中での用例を挙げておき  
たい。」

「白峯」

定て海畔の鬼とならんずらん。

「浅茅が宿」

しからば古郷とても鬼のすむ所なりとて。

「吉備津の釜」

此鬼世をさりぬるは七日前なれば。  
或は屋の棟に叫びて。

かの鬼も夜ごとに家を繞り或は屋の棟に叫びて。

「蛇性の姪」

かの鬼こゝに逐来る。

「青頭巾」

まことに鬼の住べき宿に一人居るを。

「山の鬼こそ来りたれ。」

鬼来りしとおそれしも

①

②

院主<sup>いっ</sup>こそ鬼になり給ひつれと。<sup>③</sup>  
 實<sup>じつ</sup>に鬼といふものは<sup>④</sup>  
 或は鬼となり<sup>⑤</sup>  
 鬼<sup>かに</sup>に化けするもあり<sup>⑥</sup>  
 鬼<sup>かに</sup>に化けしたる女を捉へて<sup>⑦</sup>  
 鬼になりつること<sup>⑧</sup>  
 鬼と化したるも<sup>⑨</sup>  
 もしこの鬼を教<sup>きやう</sup>化<sup>け</sup>して<sup>⑩</sup>  
 鬼ふたゝび山をくだらねば<sup>⑪</sup>  
 こでいう「鬼」の漢字の意味を押さえておかねばな  
 いので「大漢和辞典」の記述を引用しておく。  
 鬼一おに。イ死人のたましひ。人が死ねば心思を  
 つかさどる魂は天にのぼつて神となり、形体は地に  
 帰り、形体の主宰である魄は鬼となる。口ひとがみ。  
 人鬼。祭られた死人の幽魂。天神地祇の対。ホ人を  
 賊害する陰気、又は現体。もの天神地のけ。ばけもの。

「鬼化」測り知れない変化

『古語大辞典』

おに「鬼」①死者の靈魂。魂。怨霊。②神秘な力を

持った存在。超自然の存在。③想像上の怪物。羅刹

や夜叉などに似た姿や、美女などの姿となつて現れ

る。

『角川古語大辞典』

おに「鬼」①死人の靈魂。シナの鬼（キ）に当る。

②想像上の生物。鬼人。①の鬼ともつながら、目に

見えないものとしての鬼が考えられていたが、やが

て、シナの民間信仰における鬼と、仏教でいう邪鬼

や冥途の鬼が習合されて、いわゆる鬼の形相が形成

されてくる。

上代には、仮名書きの例はなく、「もの」と読んだ

例から、「もの」と混同して考えられていたともい

えるが、法隆寺金堂増長天の邪鬼が残ることからも、



る  
 の 〃  
 ④ ③ 鬼 一  
 特 に 魑 一  
 節 魅 一  
 分 一 対  
 に お する  
 追 い 概  
 け を 念  
 の 知 ら  
 鬼 ぬ ん  
 人 だ  
 間 を い  
 を た いた  
 と え こと  
 柄 が 思  
 見 ら れ  
 る 。  
 〃  
 和 訓 葉 〃  
 〇 お に 齊 明 紀 倭 名 鈔 に 鬼 を よ め り 隠 の 音 を も て 訓  
 と せ り と い へ り さ れ と 古 へ ハ お に て ふ 言 な し 皆 も の  
 と よ め り 神 代 記 の お に も の と よ む へ し 鬼 ハ 形 な し  
 さ る を 和 漢 と も に 角 あ る 頭 に 虎 の 皮 を ま き た る 体 を  
 書 ハ 丑 寅 の 維 を 鬼 門 と す る よ り 牛 と 虎 と を と り 合 せ  
 た る 也 と い へ り 一 略 一 死 す る に 鬼 と い ふ 唐 山 の 俗 の  
 鬼 と い ふ ハ 平 話 の 幽 霊 也 倭 俗 に お に と い ふ は 惡 鬼 を  
 い ふ 梵 書 の 夜 叉 神 羅 刹 鬼 是 也 一 略 一 〇 伊 勢 物 語 に か  
 り に も お に の す た く 成 け り と よ み 拾 遺 集 お に こ も れ  
 り と い ふ ハ ま こ と か と よ め る ハ 戲 言 に 女 を 罵 て い ふ

也よて真名伊勢物語に醜女を填たり神代記の故事に  
 よれる也同書に鬼はや一口に喰てけりと見えしハ今  
 いふばけものなと見るへし  
 注おに漢名鬼、和名抄、鬼和名於爾、或説云、  
 隠、字音、於爾訛也、異物隠而不レ欲レ顯レ形、故  
 俗呼日レ隠也、人死魂神也  
 漢語では「鬼」は死者という意味合いが強く、日本で  
 言うところの鬼とは少々異なっている点に気がつくので  
 あるが、「雨月物語」の用例を考えると、「白峯」では  
 そのまま「死霊」という訳が付されており漢語の本来の  
 意味で用いられているようである。  
 「浅茅」の例は重友氏が「鬼の住む所同然、なつかし  
 い所でもない」とされ、中村氏は「勝四郎の出郷の理由  
 を考えると、不人情な鬼のような人ばかりの意」と解釈  
 されてゐる。従つてここでは死霊、死人の意味は薄く、  
 かといつて想像上の怪物とも言い難い。解釈の上では鬼

そのものが問題なのではなく、勝四郎と故郷との意識の  
 つながりのなさ、訴えていようである。ただ、後に論  
 じる「鬼」もの「一」とは明らかに意味は違っている。つ  
 まり「ものけ」といった意味は無く、勝四郎とは相容  
 れない、理解しあえない者、決して援助者とはなりえず  
 かわって害をなすもの、捉えるのが妥当であろうかと思  
 われる。「吉備津の釜」の用例に移ると、両例共磯良を示して  
 いることは明らかで、しかも記述にあるように「死者」  
 としての磯良なのであるから、「白峯」と同じ死霊と捉  
 えるべきであろう。ここには人間らしい感情は無く、ひ  
 たすら正太郎を取り殺そうとする一個の「怨霊」が表現  
 されて、いるのである。ではここでいう「怨霊」とは、後  
 げろが「鬼化のやうに狂はしげ」の「鬼化」とは一致  
 するのかわかろうか。  
 はしないだらうか。



7.

を引用する、「ほんとに妖怪でも住むにうってつけな家、  
 の意」とあり、真女児の怪異性を示している。かとい  
 うでは真女児を指しての表現は「鬼」だけなのかとい  
 うと決してそうではない。その部分を挙げると、  
 助も大宮司も妖怪のなせる事をさとりて。  
 猶此妖災の身褌し給へとつゝしみて願ふ。  
 かつは妖怪の執ねきを恐れける。にて。  
 疫病妖災蝗などをよく祈るよしにて。  
 四例がある。ここでいう「妖怪」は『大漢和辞典』  
 以下の様になつていう。「妖怪」は「大漢和辞典」  
 以下の一、なまめく。あてやか。しなを作る。二、女  
 子の笑ふさま。三、あらしい。わらい。まがごと。  
 もののけ。妖魅。妖精。妖鬼。  
 「妖怪」ばけもの。もののけ。妖魅。妖精。妖鬼。  
 妖恠。妖霊。妖魔。  
 「妖災」わざはひ。



意味している。明らかに人間ではありながらも、その行為の異様さ、死体を食すという食人鬼の振るまいと、村人の恐怖が「鬼」という表現となつて表れたと考えられる。ここには「祟る」とか「取り殺す」という意味はなく、「ものけ」という表現とは一致しないことも押さえておきたい。

では他の用例であるが、④は「鬼」と言われるものが昔物がたりに語られていることを言っているのだが、院主がその鬼になつてしまわれたのを村人が見た、という部分であり、多分『伊勢物語』の「鬼一口」などを想起させての表現であろう。⑤の「鬼」「<sup>ハツ</sup>蟒（大蛇）」は、『雨月物語』の作品でいうと「吉備津の釜」の磯良と「蛇性の姪」の真女兒を指しているようにであるが、ここでわざわざ「鬼」としたのは、人に崇りをなすという点からと、院主の鬼との違いを説いているためである。⑥⑦のことは高田氏が既に指摘されている通りである。

の例も類例を挙げている中の一つであつて意味的には⑤  
 と同様であらう。  
 「青頭巾」でいう「鬼」は、人の形であつたものが、  
 愛欲邪念などによつて異形のものに変化したり、人に害  
 をなしたりするものと捉えられる。ともかく「かたち」  
 としては存在しており、怨霊生き霊のように実体から意  
 識が離れて人に祟るものとは区別がなされていると考  
 られるのである。  
 では一方で「もの」と訓を付された例を考えたい。ま  
 ず用例を挙げ、その後字義を引用する。  
 「浅茅が宿」  
 「怪しき鬼の化けしてありし形を見せつるにてぞ  
 一旦樹神などいふおそろしき鬼の栖所となりたりし  
 一」  
 「吉備津の釜」  
 「鬼化のやうに狂はしげなれば。  
 「青頭巾」



『

さる浅ましき鬼<sup>もの</sup>にも化するなり。

『

古語大辞典』

①人や事物の存在を一般化して表す。②生起

する事象を一般化された対象として表す。③一特殊

化されて一飲食物。食膳。④言語。言葉。⑤目的地

たる場所を漠然と指し示す。⑥取り立てるに足るも

の。⑦超自然的たる神・精霊・妖怪などの類。⑧運

命

『和訓栞』

○もの物をよめり百名の義なるへし西土にも物事

也と見ゆものおもふなといへる是也○古今集なとに

物へまかり源氏にもものよりおハすれハ貫之集による

ハ物へもゆかずにあまらしなといふハ方角をさして

いふ辞也今物まうでといふも同し物詣を音にもいへ

り一中略一○鬼をものといふも同ハ万葉集に見えたり神

代紀に邪鬼をあしきもの推古紀に含霊をよみつもの

とれる人ある「れるるてりでこの  
 用る。ではない。鬼「。点いるつくある例では  
 い。但し「青頭巾「の「は「個巳に物のと  
 られ「の「頭巾「の「は「別し義也めり  
 る「の「頭巾「の「は「に見て真名  
 では「の「頭巾「の「は「いき伊勢  
 なく「の「頭巾「の「は「いた物語  
 、用例に「の「頭巾「の「は「いた語  
 主体は「の「頭巾「の「は「いたに  
 「「「「「「「「「「「「「「「「「  
 慳「「「「「「「「「「「「「「「「  
 し「「「「「「「「「「「「「「「「  
 い「「「「「「「「「「「「「「「「  
 性「「「「「「「「「「「「「「「「  
 「「「「「「「「「「「「「「「「  
 の「「「「「「「「「「「「「「「「  
 女「「「「「「「「「「「「「「「「  
 であ「「「「「「「「「「「「「「「

り、<sup>「</sup>ものがけ<sup>」</sup>に化けることを表現していると考えた  
 方がよいと思われ<sup>。</sup>  
 明らかに生き霊を示しており、同様の意味で「青頭巾」  
 でも「さる浅ましき鬼にも化するなり」と「鬼」が使わ  
 れている。これは直前の「凡女の性の慳しきには」が、  
 「吉備津の釜」の導入部の「凡女の性の慳しき性を募らしめ  
 只かりそめなる徒<sup>あへ</sup>こと<sup>。</sup>に。女の慳<sup>けな</sup>しき性を募らしめ  
 て。其身の憂<sup>うれ</sup>をもとむるにぞありける。  
 を想起させることから言いえよう。  
 個々の解釈を挙げてみたが、全体を通しては以下のこと  
 が考えられる。  
 「もの」は生き霊、精霊といった人間でないものを表現  
 している。  
 「ものけ」は『源氏物語』の六条御息所に代表される

生靈や、生靈のためには苦しむことを表現して、生靈  
 になつてしまふことは「ものに化する」で表されてい  
 る。主體が人間である場合、生靈に限定されるものが「もの」  
 であると考えられるのである。で「おに」は、基本的には人に害をなすもの、死靈であつて  
 やはり元來、人間であつたものである。業障にひかれてとい  
 人が鬼に變化するのは、愛欲邪念の業障にひかれてとい  
 う例が、「青頭巾」の院主であらう。「白峯」の新院は  
 そのまま死靈であることは明らかである。に愛欲邪念の  
 「浅茅が宿」は人に害するといふ意味で用いられている。  
 「吉備津の釜」の鬼は、死靈であるとともに愛欲邪念の  
 執念に取りつかれて、磯良を表している。に愛欲邪念の  
 「蛇性の姪」の鬼は、豊雄に害をなす存在、人間ではない  
 のではないかという危惧から表現されていゝこの段階  
 では、本性が人なのか何なのかは明らかでない  
 為、「鬼」が用いられたのではないだらうか。

「妖怪」と「妖災」は逆に元來が人でないもので、人に災いをなすものを示す。この訓に「ものけ」を当てたことは、「祟るもの」としての性質と、正体の怪しげなるものという、二重の意味を表現するためではないだろうか。

以上で「おに」と「もの」に関する訓の差異の考察を終えたいが、「おに」は広範囲の意味を有しており、漢語としての鬼と日本古來の意味での鬼について、明確な字義を付したわけではなく、あくまでも『雨月物語』においての使い分けの基準を求めようとした。

第一章では漢字の訓の差異について考察したのだが、訓の差異には、もともとの漢語としての意味に、さらに訓によつて、もう一つの意味を重ねあわせるという効果もあるのではないだろうか。第二章では、漢字表記の細かい違いを取り上げることによつて、秋成の文章表現における細やかな配慮をさらに考察していくものとした。

( 47 )

注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注  
20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

勉 ㄣ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 誠 雨

社 月

文 物

庫 語

ㄣ の

144 118 124 94 60 39 38 36 36 35 35 35 34 31 29 28 27 25 雨 研

頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 月 究

6 4 9 10 11 4 2 4 3 12 4 1 10 3 3 6 2 6 物 〴

行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 語 〴

〴 淺

野

三

平

著

22 頁

6 行



[illegible]





## 第二章 第二節 『雨月物語』における漢字表記の実態と意味

## 第一章 『雨月物語』を讀むと、秋成の表現に対する細かい配

慮がなされてゐるのではないかと考えられる例が見受け

られる。此のこゝとを顯著に感じることが、一編の中におい

て一つの訓に対して複数の漢字を当ててゐるといふ事

ある。この節ではその中でも、秋成が意識的に漢字の使い分

けをなしてゐると思われ、ものについて、考察を加えた

いと思う。一つの訓に対して複数の漢字を当ててゐる例が

まず、一つの訓に対して複数の漢字を当ててゐる例が

『雨月物語』の中で、何例見受けられるのか『雨月物語

総索引』から数えてみると、約一二一語に対して、各々

漢字が二語以上当てられていた。頻出の回数が多い語を

此の中でも、『雨月物語』での頻出の回数が多い語を

二語以上当てられていた。頻出の回数が多い語を

二語以上当てられていた。頻出の回数が多い語を

二語以上当てられていた。頻出の回数が多い語を

挙げると、文末表現の「たまふ」が三六六回であつた。  
 但し、ここには使われた漢字は、「給ふ」か「玉ふ」であつ  
 て、特に意識的になんかの基準の許に使い分けがなさ  
 れているとは、到底考え難い。しかしながら、全ての例  
 が、意味も無く漢字を尙種類も使用しているのではなく  
 その中には漢字の厳密な意味が、表現の多様性の為に用  
 いられていると考えられるのである。  
 では具体的にそのような語を挙げて、夫々の使用基準  
 を考察していく事としよう。  
 まず取りあげたいのが「こころ」の語であり、この語  
 に関して、高田衛氏が『日本古典文学全集』の注釈部  
 で「白峯」の「情」の注に以下のよう述べられている。  
 秋成は、漢字にその本来の意や訓をはなれた和語を  
 書き添えて、言葉の意味を多義化することが多い。  
 この「情」も「こころ」と読ませることによつて、  
 切々たる心情を表す表現となつた。  
 (おし)

慮 <sup>こころ</sup>	心 <sup>こころ</sup> 神 <sup>かみ</sup>	情 <sup>こころ</sup>	意 <sup>い</sup>	心	
		1		11	白
				14	菊
				17	浅
				4	夢
			3	4	仏
				9	吉
			1	22	蛇
	2		2	4	青
1			2	5	貧
1	2	1	8	90	計

の 所  
 ま 使 使  
 ず 用 用  
 「 状 状  
 こ 況 況  
 こ を 調  
 ろ べ  
 」 の  
 の 個  
 使 々  
 用 の  
 状 意  
 況 味  
 を を  
 表 明  
 に ら  
 し か  
 て に  
 お し  
 き て  
 たい い  
 。 き  
 たい  
 。 全  
 編

ある「意」「心神」「情」「慮」の四語について、秋成  
 の意図した漢字の意義をみて、「心」との微妙な意味の  
 ずれを考えた。い。  
 まず、用例の少ない「情」から考察していくものとす  
 る。「情」は「白峯」に一例のみ表出するのであるが、  
 その文をあげてみよう。「情」に一例のみ表出するのであるが、  
 ひたふるに隔生即忘して。佛果円満の位に昇らせ玉  
 へと。情をつくして諫奉る。佛果円満の位に昇らせ玉  
 尚この「情」は「菊花の約」では「まこと」と訓が付  
 されている。この「情」の意味を明らかにしたい。

こ こ ろ	
1	白
	菊
	浅
1	夢
	仏
	吉
	蛇
1	青
2	貧
5	計

情 『大漢和辞典』

一、このころイ、感じ。外物にひかれて起る苦楽好

悪の感性。ロ、欲望。意欲。ハ、のぞみ、志望。

ニ、このころもち。心意。ホ、うまれつき。本性。

へ、心のはたらき。性を心の體とするに對する。

宗儒が多く用ひた。性を心の體とするに對する。

二、まことイ、まごころ。ロ、じつさい。事實。

事柄。

三、ことわり。眞理

四、おもむきイ、ありさま。やうす。ロ、あぢわ

ひ。

五、なさけイ、あはれみ。憐哀の情。ロ、男女間

六、の愛情

六、まことに

この「心」と「情」の關係については、『和訓栞』に

次のような記述がある。



所のみなで、その細かな使い分けの基準を示すまでに  
 は至っていないのである。  
 しかし、「菊花の約」に一例  
 情をつくして「情」を「まこと」と訓ませている箇所  
 があり、この「情」に「まこと」の意味を重ねているこ  
 とも考慮すると、この場合は「情」と「心」が重ねられ  
 て西行が新院に成仏を勧めていると考へてよいであらう。  
 かつてのまだ帝であるからせられた時を思い出での随縁の  
 勧めである。通常の「心」では言い尽くせぬ気持ちを、  
 随縁を切に願う気持ちを、「情」を用いることで表現さ  
 せているのである。  
 この「白峯」と「菊花の約」という秋成独自の表現があ



り、この「ところ」や「なさけ」といった二次的な意味の付加がなされていて、「心」を用いないのかという  
 と、そうではない。吉備津の釜に「心を尽くして」の用  
 例が以下のように見られる。事からもわかる。  
 夫<sup>とと</sup>が性<sup>いか</sup>をはかりて。心を尽<sup>つく</sup>して仕へければ<sup>へはらし</sup>  
 この例の様に、「心」に「情」の意味を付加しない場  
 合は、当然そのまゝ「心」の漢字が用いられるのである。  
 つまり、この「情」に「心」の訓を付けた意図は、  
 漢字の有する意味と、訓から読み取れる意味を重ねるこ  
 とによつて、より細やかな表現を可能にすることにあつ  
 たと思われ、この場合は使い分け自体に意味を求めるので  
 はなく、言葉の意味の複雑さ、重層性を、この表現方法  
 から見いだせるといふことを述べるに留めておくものと  
 したい。

次に「意」の「ころ」の使用基準を考えた。まず

八例全てを挙げてみよう。

「仏法僧」

一、哥の意も。かばかり名に負河の此山にあるを。

二、強に佛をたふとむ人の。歌の意に細妙からぬは。

三、足下は歌よむ人にもおはせで。此歌の意異し。

給ふは用意ある事こそと篤く感にける。

「蛇性の姪」

四、人かならず虎を害する心なけれども。虎返りて

人を傷る意ありとや。

「青頭巾」

五、汝こゝを去らずして徐に此句の意をもとむべし。

六、意鮮ぬる則はおのづから本来の佛心に会ふなる

はと。

「貧福論」

七、かの句を案ずるに。百姓家に帰すの句粗其意を

八、<sup>たふと</sup>得て。ふかくこゝに<sup>しん</sup>信を<sup>かこ</sup>発す。<sup>(注)</sup>  
 これらを見てまず気がつくのは、和歌ないし俳諧にお  
 いて、句の意味内容を語る時には「意」が一般的に用い  
 られているといふことではない事である。これは何も『雨月物語』  
 に限ったことではない事は容易に察せられよう。  
 それ以外の二例は、意志の「意」からきていると思わ  
 れる。ここで『大漢和辞典』をpushえておく。こころば  
 意一、せ。こころ。おもひ。イ、こころざし。こころば  
 二、意義。義理。三、おもむき。理趣。風情。  
 四、私意。五、おもふ。二、思慮選擇、及び  
 「意志」一、こころ。おもひ。二、思慮選擇、及び  
 決行をあらはす心的作用。おもひ。二、思慮選擇、及び  
 「意思」一、おもひ。こころ。こころざし。こころざ

味での「蛇性の姪」と「貧福論」の用例はこの意志に近い意  
 の使用基準は、和歌、俳句の意味である。「こころ」と、  
 「意志」を表現すること、にあるのである。「こころ」と、  
 では、「心神」はどの様に解釈すればよいのだろうか。  
 「青頭巾」の用例を挙げておく。終ふに心こ神かみみだれ(註14)  
 手てに手てをとくみて日ひを經へ玉たまふが。忽たち鬼おに畜ちくに墮だ罪ざいし  
 汝なんぢ一ひと旦たんの愛あい欲よくに心こ神かみみだれしより。忽たち鬼おに畜ちくに墮だ罪ざいし  
 たるは(註13)この「心神」は「青頭巾」にしか用例がな  
 く、このようにこの「心神」は「青頭巾」にしか用例がな  
 く、いずれも精神もしくは氣と訳している。  
 「大漢和辞典」の「心神」の項目には  
 「心神」の精神状態を指示しているようである。  
 とあり、精神状態を指示しているようである。  
 このようによつて、心は心でも「精神状態」と意味を限定す  
 ることによつて、解釈を容易にしていると考えられるの

である。従つてこの「心神」の使用基準は、「精神状態」を表  
 現する時に用いると考へられるのである。『大漢和辞典』  
 慮一、おもんばかり。イ、かんがへ。おもひめぐらし。  
 二、おくはだて。ハ、はからひ。  
 この辞書の意味から考へると、この語を「ところ」と  
 は到底訓みづらい。しかし、この語を「ところ」と  
 えているのは、それなりの意図があるのである。この  
 場合はこの用例が「貧福論」に見られることから、その  
 基準を推察することが出来よう。  
 「貧福論」神にあらず。もと非情<sup>けじやう</sup>の物なれば人と異<sup>こと</sup>

なる慮<sup>しる</sup>あり<sup>(注18)</sup>。  
 つまり、此の様にこの「ころ」は「貧福論」の黄金  
 の精霊の「ころ」を示しているのであるから通常人の  
 心に用いる漢字ではない「慮」に「ころ」の訓を付し  
 たのである。  
 この基準は、心の主体の「非人間性」にあると判断で  
 きるのである。  
 最後に、仮名表記の「ころ」であるが、五例挙げて  
 みたい。  
 「白峯」  
 魔道の浅ましきありさまを見て涙しのぶに堪<sup>た</sup>す。  
 び一首の哥に随<sup>ず</sup>縁<sup>えん</sup>のころをすゝめたてまつる<sup>(注19)</sup>。  
 「夢応の鯉魚」  
 こゝにて又魚の遊びをうらやむこゝろおこりぬ<sup>(注18)</sup>。  
 「青頭巾」  
 強<sup>ひ</sup>てとどめがたし。強<sup>ひ</sup>てゆけとにもあらず。僧の

こゝろにまかせよとて復ふたび物もいはず（注19）  
 「貧福論」おのれ（注20）その報むとひの来るを待は直たきこゝろにもあらず  
 かし（注20）これ金かねに靈たまあれども人とこゝろの異よなる所なり（注21）  
 この五例の中でのうしても仮名表記を使わねばならな  
 いと判断出来るのは、五例目の「人とこゝろの異なる」  
 の例だけである。ここは黄金の精靈が「人と異なる慮あ  
 り」と述べた後に出てきた表現であるが、黄金の精靈の  
 「こゝろ」は当然人の「心」とは異質なものであると言えよう。  
 この場合、仮名表記とするのが妥当であると言えよう。  
 だが、表現としての用例に關しては、必かならずしも仮名でなけ  
 れば、この仮名表記に關しては、現段階では基準までは  
 ない。この仮名表記に關しては、現段階では基準までは  
 見いだせなかつた。こゝろについて、の用例を調べたが、  
 以上のようになつた。こゝろについて、の用例を調べたが、

戸	宅	荘	家	
			2	白
	/		4	菊
			17	浅
			/	夢
				仏
			19	吉
			24	蛇
/		2	4	青
			8	貧
/	/	2	79	合計

このように秋成が表現に細かい配慮をしているのはこの例だけではない。そこで次に「いへ」と「あるじ」の關係を捉えながら、先程の「こゝろ」のように『雨月物語』の表現について考えていきたい。『雨月物語』の使用状況を表にしておく。



用すらはここで特筆すべきは「青頭巾」のみ「莊」と「莊主」である。但し、注意  
 すべきは「青頭巾」の中に他の漢字（主、家）も同時に  
 用いられている点である。  
 「あるじ」については「青頭巾」に焦点を絞って「いへ」と  
 まず「青頭巾」での記述を列挙しておくこととする。

あるじ	莊主	主	
			白
6		2	菊
		4	浅
		/	夢
			仏
/		/	吉
3		2	蛇
9	4	2	青
			貧
19	4	12	計

ついで、鵜月氏の評釈の注を挙げておく。  
 一、大きな家の内にも騒ぎたち<sup>(注22)</sup>  
 二、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>をとりて走り出て<sup>(注24)</sup>  
 三、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 四、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 五、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 六、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 七、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 八、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 九、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 十、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 十一、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 十二、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 十三、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 十四、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>  
 十五、あるじ、山楞<sup>(注23)</sup>を捨てて手を拍<sup>(注25)</sup>て笑ひ<sup>(注25)</sup>

十六、あるじの僧いふ。(注37)  
 十七、あるじの僧いふ。(注38)  
 十八、あるじの僧いふ。(注39)  
 十九、かの一宿のあるじが莊に立よりて。(注40)  
 二十、莊主よろこび迎へて。(注41)  
 五、莊主「莊」は田舎の義で、この場合は、田舎の地主、豪家の主人の意味で、「あるじ」にこの字を用いたのである。この用字は、「水滸伝」(訓訳本)にもあつて「しゆじん」の振り仮名がふられている。(注42)  
 十九、あのかつて一夜の宿をしてくれた主人の家に立寄つて、の意。「あるじ」は、饗応の意とも、又「一宿の主人」と解することもできるが、ここは、次に連体修飾語を作る「が」があり、更に後文に「莊主」として「あるじ」と振り仮名をつけているところから、主人の意に解した方がよい。(注43)

ここでは説明するまでもなく、「莊」の主人が「莊主」であつて、平仮名表記を外せば地の文において「莊」の主人は「莊主」という表記があてられ、会話文においては「主」が用いられている。またでは何故仮名表記がなされているのかを考えた。まず三の用例であるが、ここではこの「あるじ」の身分が明らかでないといふことが言えるが、すぐ次の用例が「莊主」である点を考えると、この例の仮名表記の必然性はあまりないといえよう。

だが、十二から十八の例は全て院主を示しており、その面からは、仮名による統一がなされている。

また、十九の例は、「莊主」と「莊」が重なる事を避けて仮名が用いられたと考えられる。

そして、七の例で例外的に、「戸」を「いへ」と訓を付していることについて、里にその院主が下つてきては人々を驚かしたり、死体の肉を食べたりするので、ど

の家も嚴重に戸を閉め切つて閉じこもる、という意味が  
 ある。従つて「戸」の字に「いへ」と訓を付ける事によつて、  
 簡潔な表現で、大きな莊から小さな家に至るまで、夕暮  
 れには戸を閉てしまふかう状況が表されてゐるので  
 ある。これらのは事は秋成がかなり漢字表記に神經を使つ  
 ていた一例になろうかと思われる。  
 ここでは「青頭巾」の「莊」と「莊主」を考えたが、  
 「菊花の約」の「宅」について述べておきたい。「菊  
 花の約」の他の例は「家」となつており、「宅」とされ  
 ているのは「赤穴丹治が宅」だけである。  
 『大漢和辞典』  
 家一、いへ。うち。すまひ。すみか。二、やうち。へ  
 や。三、門内。四、夫。五、妻。六、家庭。家族。  
 七、家すぢ。八、やから。一族。  
 宅一、すまひ。二、しき地。やしき。三、はか。

抛、この意味を見るだけでは、「家」を変えた根  
 こが、基準は定かではないが、丹治が主を持つ武士である  
 だが「貧福論」の「家」も武士である岡左内の「いへ」  
 を示しているので、この事が即基準であるとは言い難い。  
 が、「菊花の約」の赤穴宗右衛門と丹治を比較する上で  
 以前の主君をさっさと見限つて、すぐに尼子経久に仕え  
 ていた丹治が尼子経久から屋敷を拝領した、と考えるの  
 は穿ち過ぎだろうか。いづれにしてもこの「宅」の表記  
 には、多少の違和感が感じられる。仮名表記は認められなかつ  
 た。なお、「いへ」に関して、仮名表記は認められなかつ  
 以上のことから、秋成が「いへ」と「あるじ」の様な  
 密接な関連のある語は、それに即した表記をしていると  
 いふことが出来るよう。その語を取りあげてみたい。  
 次に「かへる」という語を取りあげてみたい。

やはり、作品中の用例数を示しておく。

かへる	還る	帰る	
1	1	1	白
	1	5	菊
		8	浅
1			夢
1			仏
3			吉
1		8	蛇
4			青
			貧
//	2	22	計

ではこの中の「還る」の漢字表記の使用基準がなにかについて考えてみたい。その前にこの二字の意味の差異をおさえておきたい。

『和訓栞』

○かへる 反回帰還をよむハ換易と義同じ他にいふハかへす也

これは差異は認めにくいので漢字の意味を見てみたい。

大漢和辞典』  
 婦 一、とつぐ。二、ゆく。三、かへる。イ、もと

へもどる。ロ、さる。もと来た方へ去る。ハ、

妻・夫人が離縁になつて出て行く。ニ、位にも

どる。復位。四、かへす。イ、もとの所へもど

す。ロ、返却する。五、おもむくところ

六、よる。身を寄せる。

「去」かへりさる。イ、たちかへる。もどる。復歸す。

還 一、かへる。イ、たちかへる。もどる。復歸す。

ロ、ふりかへる。みかへる。ハ、しりぞく。し

ざる。ニ、歸路につく。ふるすにかへる。

二、かへす。イ、もとへもどす。ロ、しかへす。

「還御」天子が行幸から宮居にかへられること。

「還元」一、もとへもどす。又、もとにもどる。根

元に復歸する。



では、『雨月物語』の夫々の例を見てみよう。ここでは

「白峯」

「菊花の約」

「菊花の約」

己が身ひとつを竊みて国に還る路に(注45)

この場合の「かへる」所は、「白峯」の新院、「菊花

の約」の赤穴にとつて、「一体どういう場所であつたらう

か。」「白峯」で「帰る」の漢字表記は一例しか認められ

ない。西行が「山をくだりて庵に帰り」(注46)のみである。新

院にとつて都は本来自分のいるべき場所であつて、配流

の身となつてしまひ、實際都に帰る望みはないのだが、

かつて帝位にあつた新院にとつて、いるべき所こそ都で

あつた。であるから、当然帰つてしかるべき、むしろ回

帰すべき場所にかへる「時」に、この「還」が用いられ

たのではないだろうか。

来 出 さ  
 ど 雲 れ そ  
 う の た う  
 国 に 還 あ  
 一 か も な  
 へ る ば  
 一 赤  
 穴 が 菊  
 本 花  
 来 の 約  
 の 自 己  
 表 現  
 を 対  
 し 使  
 用  
 赤 穴 は 本

故 内 久 て も ひ と 近 の 者 故 出 雲 の 人 物 松 江 の 郷 兵 書 の 長 旨 を 察 し 宗 右 衛 門 と 富 田  
 還 け な 怯 亡 塩 死 大 三 十 日 の 氏 綱 密 吾 師 と し て 物 幸 び 玉 ひ し 館 田  
 る き た ぼ 治 あり 十 日 の 氏 綱 密 吾 師 と し て 物 幸 び 玉 ひ し 館 田  
 路 所 に 愚 將 玉 守 護 代 不 慮 主 尼 子 經 久 山 中 党 を か の 館 田  
 。 永 く な へ 護 代 不 慮 主 尼 子 經 久 山 中 党 を か の 館 田  
 此 疾 居 ら ば 果 々 ね ば と 城 子 經 久 山 中 党 を か の 館 田  
 に か じ と ず 己 身 一 氏 刀 屋 を 助 け 持 国 經 殿 館 田  
 一 氏 刀 屋 を 助 け 持 国 經 殿 館 田  
 と 吾 外 勇 に 逗 国 館 田  
 つ を 国 に 逗 国 館 田  
 を 竊 みに 逗 国 館 田  
 国 館 田

赤<sup>あか</sup>穴<sup>あな</sup>母<sup>はは</sup>子<sup>こ</sup>にむかひて。吾<sup>わが</sup>近<sup>き</sup>江<sup>え</sup>を遁<sup>のが</sup>れ来<sup>き</sup>りしも。雲州<sup>（注49）</sup>の  
 動<sup>うご</sup>静<sup>しず</sup>を見んためなれば。其<sup>その</sup>の為<sup>ため</sup>赤<sup>あか</sup>穴<sup>あな</sup>宗<sup>そう</sup>右<sup>う</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>は丈<sup>さか</sup>部<sup>ぶ</sup>左<sup>さ</sup>門<sup>もん</sup>  
 と。兄弟<sup>けいだい</sup>の盟<sup>めい</sup>を結<sup>むす</sup>んだ後<sup>のち</sup>も。雲州<sup>（注49）</sup>に下<sup>くだ</sup>つて行<sup>い</sup>かねばならな  
 かつたのである。彼<sup>かれ</sup>にとつて主<sup>しゅ</sup>君<sup>くん</sup>は塩<sup>しほ</sup>治<sup>ぢ</sup>掃<sup>そう</sup>部<sup>ぶ</sup>介<sup>け</sup>ただ一人  
 であつて、武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>として、の信義<sup>しんぎ</sup>をかけて塩<sup>しほ</sup>治<sup>ぢ</sup>掃<sup>そう</sup>部<sup>ぶ</sup>介<sup>け</sup>の為<sup>ため</sup>に  
 出<sup>で</sup>雲<sup>うん</sup>へ戻<sup>もど</sup>ろうとしていたのであつた。ではその赤<sup>あか</sup>穴<sup>あな</sup>が出<sup>で</sup>  
 雲<sup>うん</sup>に出<sup>で</sup>立<sup>た</sup>した時に、互<sup>たがひ</sup>に情<sup>なさけ</sup>をつくして赤<sup>あか</sup>穴<sup>あな</sup>は西<sup>せい</sup>に帰<sup>かへ</sup>りけり<sup>（注49）</sup>  
 と、互<sup>たがひ</sup>に情<sup>なさけ</sup>をつくして赤<sup>あか</sup>穴<sup>あな</sup>は西<sup>せい</sup>に帰<sup>かへ</sup>りけり<sup>（注49）</sup>  
 が生<sup>なま</sup>じようが、この事は次の様に説明がつく。この疑<sup>ぎ</sup>問<sup>もん</sup>  
 果<sup>は</sup>たさねばならないが、武士<sup>ぶし</sup>として、の君主<sup>きんしゅ</sup>に對<sup>たい</sup>する義<sup>ぎ</sup>は  
 を「約<sup>やく</sup>」した今は、再<sup>また</sup>度<sup>たび</sup>加<sup>か</sup>古<sup>こ</sup>の駅<sup>えき</sup>に歸<sup>かへ</sup>つてきて、左<sup>さ</sup>門<sup>もん</sup>に  
 對<sup>たい</sup>して「自<sup>みづか</sup>らの信義<sup>しんぎ</sup>」を立<sup>た</sup>証<sup>しやう</sup>せねばならなかつたのであ  
 る。従<sup>したが</sup>つて、同<sup>どう</sup>じ様に雲州<sup>（注49）</sup>に「かへる」とはいつても、

赤穴が果たすべき「信義」が変化してしまっている以上、本来の自分であるべき地に「還」を用いることが出来なかつたのであらう。そうであるが故に、ここでは「帰る」が用いられているのである。この回帰性をも示唆して、「菊花の約」において赤穴の二重とす。この赤穴の回帰性について、別節で考察を加えるものと、そして用例のほとんどを占める「帰る」の中に、この「還」の意味で用いられている用例がないか確認した所、特に「還」でなければ意味が通らないという例は見受けられなかつた。では仮名表記の「かへる」であるが、十一例の内、一白峯」と「青頭巾」の用例は宗教的な意味で用いられ、一白峯」仮名にされて、いると判断出来た。

況を 〆 雨 月 物 語 〆 に 漢 字 で は 五 種 類 が 、 ま ず は そ れ ら の 使 用 状  
 況 を 表 に し て お く 。  
 〆 雨 月 物 語 〆 に 漢 字 で は 五 種 類 が 使 用 さ れ て い る 。 仮 名  
 に 〆 あ や し 〆 の 表 記 に つ い て 考 察 を 終 え た い 。 で は 次  
 意 味 と し て は 問 題 は な い と 思 わ れ る の で あ る 。  
 い だ せ な か っ た 。 ほ と ん ど の 場 合 、 〆 帰 る 〆 で あ っ て も  
 だ が 、 こ れ 以 外 の 用 例 は 、 特 に 仮 名 で あ る 必 要 性 は 見  
 考 え ら れ る 。  
 的 に 一 致 し に 〆 帰 る 〆 や 〆 還 る 〆 の 漢 字 を 当 て る の は 意 味  
 こ れ ら に 〆 帰 る 〆 や 〆 還 る 〆 の 漢 字 を 当 て る の は 意 味  
 恃<sup>ち</sup>来<sup>く</sup>り て 教<sup>け</sup>化<sup>り</sup>し 本<sup>も</sup>源<sup>と</sup>の 心 に か へ ら し め ん と な る を<sup>(注52)</sup>  
 ば<sup>(注51)</sup> 。  
 〆 青 頭 巾 〆  
 老<sup>らう</sup> 衲<sup>のう</sup> も し こ の 鬼 を 教<sup>きやう</sup>化<sup>げ</sup>し て 本<sup>も</sup>源<sup>と</sup>の 心 に か へ ら し め な  
 〆 浄<sup>じやう</sup>土<sup>ど</sup> に か へ ら せ 玉 は ん こ そ 願<sup>ねが</sup>ま ほ し き 叡<sup>みこころ</sup>慮<sup>ろ</sup> な れ と<sup>(注50)</sup>

( 29 )

たい。まず『大漢和辞典』で漢字の意味を明らかにしておき

異①ことなる。ことなり。イチがふ。同じくない。

卑 <sup>あや</sup> し	賤 <sup>あや</sup> し	怪 <sup>あや</sup> し	奇 <sup>あや</sup> し	異 <sup>あや</sup> し	
		1			浅
			1	3	夢
				2	仏
				1	吉
	3	3	3		蛇
1				2	青
1	3	4	4	8	計

ロ ま ち が ひ ハ ほ か 。 よ そ 。 こ と な っ た 外 の 事 。 ニ め  
 づ ら し い 。 ホ す ぐ れ る 。 非 凡 。 又 、 其 の 人 。 ヘ ふ し  
 ぎ 。 あ や し い 。 又 、 其 の 事 。 ② こ と に す る 。  
 「 異 奇 」 不 思 議 な 形 。 異 様 な 姿 。 ② 形 を 異 に す る 。  
 「 異 形 」 ① 異 様 な 形 。 異 様 な 姿 。 ② 形 を 異 に す る 。  
 「 注 」 異 、 猶 怪 也  
 奇 ① こ と な る 。 か は っ て る 。 め づ ら し い 。 ま た 、  
 ひ と つ 。 ② あ や し い 。 不 思 議 。 ③ す ぐ れ る 。 め き で  
 る 。 ④ ひ そ か 。 「 説 文 」 奇 、 異 也 。  
 「 奇 奇 」 甚 だ 不 思 議 な こ と 。  
 「 奇 怪 」 ① 尋 常 な ら ず あ や し い 。 又 、 其 の 物 。 奇 怪 。  
 不 思 議 。  
 「 奇 形 」 め づ ら し い か た ち 。 異 様 な か た ち 。 奇 状 。  
 怪 ① あ や し む 。 い ぶ か る 。 ま ど ふ 。 「 説 文 」 怪 、 異  
 也 。 ② あ や し い 。 イ 行 が 常 で な い 。 ロ 心 が 常 で な い 。  
 ニ ふ し ぎ 。 あ き ら か で な い 。 ホ 不 屈 に 思 ふ ③ つ ね な

らぬこと。かはったこと。常に反したこと。④ばけ  
 もの。常とかはった物。かはりごと。不思議。奇異。  
 「怪異」普通でない。奇怪。奇異。  
 「怪奇」①あやしめづらしい。奇怪。怪異。  
 「怪崇」あやしいものたり。  
 さらに『角川古語大辞典』の記述を挙げておく。  
 あやし「怪・異・奇」感動詞「あや」を語幹とし  
 て成立した語。常識で判断しうることの範囲外にあ  
 る対象に触れて、それに對する不審の氣持を中心的  
 に表すが、ある場合にはその対象への畏敬の念を表  
 し、また、ある場合は不都合なものとする意を表す  
 というように、相反する方向の価値意識を伴う。  
 ①不可解であるさま。変だと感じさせるようなさま。  
 ②靈妙であるさま。神秘的なさま。「くすし」が人  
 為を越えた現象の、その原動力に對する感嘆を表す



「時

のに對して、現象面の不思議さを表す。③異常に優  
 れてゐるさま。④不都合であるさま。けしからぬさ  
 ま。⑤身分が卑しいさま。平安時代の貴族には、一般庶民に關す  
 らないさま。動作などが「あやし」と把握された。  
 事物・言語・動  
 代別国語大辞典』  
 あやし①普通のこととして理解できない事物に接  
 して、奇異な感じをいだくさまである。ア人間の知  
 恵では理解できないような不思議な感じである。イ  
 世間に普通にある物とは形体や様子などが違つてい  
 て、変だと感じられるさまである。②事態が普通と  
 は違つていて、人に疑問をいだかせ、不安な感じを  
 与える状態である。また、それを不審に思ひ、不安  
 に感じる心情である。ア普通とは違つた行動の意図  
 や原因などがわからなくて、人に疑念や不審をいだ  
 かせるさまである。イ普通でない事態が、良くない

「蛇性を姪」  
「を奇しとす」  
「守なりと居めぐりて酒を酌めたる。師が詞のたがはぬ」  
「ひ見るに主の助をはじめ。令弟の十郎の家子掃」  
「使異しみにがら彼館に往て其由をいひ入れてうか」  
「夢応の鯉魚」  
「奇し」  
「を」  
「見」  
「以上」  
「る」  
「であるとかして、そのまは是認しかねる気持である」  
「アその事物が確かに存立するか疑わしく思われる」  
「く思われて、そのまは肯定しかねる状態である」  
「れる」  
「結果を招くのである。③そのもの存在や成立が疑わし」  
「結果を招くのである。③そのものという不安な気持に人を陥」

分 出 こ の し  
 高 来 の こ ー ま  
 田 ー る 漢 と 思 ず  
 衛 な の 字 が 起 こ れ  
 氏 い だ が 用 い っ た の ー  
 の と い 何 ら れ て 理 由 が わ か ら ない と い う 場 合 に  
 説 は 一 不 審 感 を 表 現 し て いる よ う で あ る 。  
 一 び っ く り す る 、 不 思 議 に 思 う と い う  
 と 漸<sup>や</sup>絶<sup>て</sup>ふ 門 し 高 門 の ひ 外<sup>と</sup>  
 し て 人 の 住 こ と な き を 。 此 男 漆<sup>ぬ</sup>師<sup>し</sup>の 老<sup>も</sup>が ま う さ れ し  
 と い ふ に <sup>(註 56)</sup> 夢 の 裏<sup>うら</sup>に 見 し と 露 違<sup>たが</sup>は ぬ を 奇<sup>あや</sup>し と 思 ふ 思  
 門 し 高 く 造<sup>く</sup>り な し 。 家 も 大 き な り 。 蔀<sup>しとみ</sup>お ろ し 簾<sup>すだれ</sup>た れ こ  
 の 。 顔<sup>かほ</sup>容<sup>かたち</sup>髪<sup>かみ</sup>の か 、 り い と 艶<sup>えん</sup>ひ や か に 年<sup>とし</sup>は 廿<sup>はたら</sup>に た ら ぬ 女  
 ひ つ 、 入 来 る を 。 奇<sup>あや</sup>し と 見 る に 。 年<sup>とし</sup>は 廿<sup>はたら</sup>に た ら ぬ 女  
 外<sup>と</sup>の 方<sup>うへ</sup>に 麗<sup>うつく</sup>し き 声<sup>こゑ</sup>し て 。 此 軒<sup>けん</sup>し ば し 恵<sup>めぐ</sup>ま せ 玉<sup>たま</sup>へ と い

感嘆が託されてゐる。――「異し」である。  
 これは見た物に対して、――「異し」である。  
 見た広い事象に対して抱く不審感であると思われ、こ  
 ちが異常を感じさせる状況であり、正体が何なのか見極  
 めがつかない不安な感情を表している。その  
 用例を挙げておこう。  
 夢応の鯉魚――  
 君今酒を酌鮮き鱠をつ稀うらしめ玉ふ。しばらく宴を  
 罷て寺に詣させ玉へ。稀有物のがたり聞えまいらせ  
 んとて。彼人々のある形を見よ。我詞に露たがはじ  
 といふ。使異し。みながら彼館に往て其由をいひ入れ  
 てうかゞひ見るに。主の助をはじめ。令弟の十郎。  
 家の子掃守なと居め。ぐりの酒を酌めたる。師が詞の  
 たがはぬを奇とす。助の館の人人々此事を聞て大に異  
 し。み。

法師がいふ所たがはでぞあるらめといふに。助の人  
 々此事を聞て。或は異し。み。或はこゝち惑ひて。  
 仏法僧。思ひがけずも遠く寺院の方より。前を追ふ声の  
 聞えて。やゝ近づき来たり。何人の夜深て詣玉ふや  
 と。異しくも恐しく。何人の夜深て詣玉ふや  
 足下は歌よむ人にもおはせで。此歌の意異し。み給ふ  
 は用意ある事こそと篤く感にける。  
 吉備津の釜。其わたりには物もなし。いかになりつるやと。  
 ひは異し。み。或は恐る。いかになりつるやと。  
 かしこを見廻るに。  
 青頭巾。おもひきやかく異し。められんとは。  
 おもひきやかく異し。められんとは。  
 夜ふけて羊の鳴こゑの聞えけるが。頃刻して僧のね  
 ふりをうかゞひてしきりに。鶏ものあり。僧異しと見

て(注4)

高田衛氏は「異し」を「いぶかしむ気持ち」とされて  
 いるが、前提には状況判断材料の欠如が考えられしな  
 いだろうか。だが、「奇し」と比較すると、「異し」の  
 方がより広範囲な状況で用いられていることがいえる。  
 つまり、歌の解釈から、自分がおかれた状況、または正  
 体が分らないこと、起因した「あやしみ」であると考  
 えられる。  
 では次の「怪し」に移りたい。まずは用例をあげてそ  
 の基準を考えたいたい。

「

浅茅が宿一

妻は既に死て

今は狐狸の住かはりて。かく野らな

「

る宿となりたれば。怪(あや)しき鬼(おに)の化けしてありし形(かたち)を見

「

せつるにてぞあるべき(注5)

蛇性の姪一

「

蛇性の姪一

近く進みて捕ふとせしに。忽(たちまち)地も裂(さ)るばかりの霹靂(はたらき)

鳴<sup>なり</sup>響<sup>ひび</sup>く<sup>に</sup>。許<sup>あま</sup>多<sup>た</sup>の<sup>人</sup>迹<sup>いづ</sup>る<sup>間</sup>も<sup>なく</sup>て<sup>そこ</sup>に<sup>倒</sup>る<sup>る</sup>。然<sup>しか</sup>て  
 見<sup>み</sup>る<sup>に</sup>。女<sup>を</sup>は<sup>い</sup>づ<sup>ち</sup>行<sup>い</sup>け<sup>ん</sup>見<sup>み</sup>え<sup>ず</sup>な<sup>り</sup>に<sup>け</sup>り。武<sup>ぶ</sup>  
 士<sup>し</sup>ら<sup>これ</sup>を<sup>と</sup>り<sup>も</sup>た<sup>せ</sup>て<sup>怪</sup>し<sup>かり</sup>つ<sup>る</sup>事<sup>ども</sup>を<sup>詳</sup>し<sup>く</sup>  
 に<sup>訴</sup>ふ<sup>。助</sup>も<sup>大</sup>宮<sup>司</sup>も<sup>妖</sup>怪<sup>の</sup>な<sup>せ</sup>る<sup>事</sup>を<sup>さ</sup>と<sup>り</sup>て<sup>。</sup>  
 我<sup>われ</sup>も<sup>し</sup>怪<sup>あや</sup>し<sup>き</sup>物<sup>なら</sup>ば<sup>。此</sup>人<sup>繁</sup>き<sup>わ</sup>た<sup>り</sup>さ<sup>へ</sup>あ<sup>る</sup>に<sup>。</sup>  
 か<sup>う</sup>の<sup>ど</sup>か<sup>なる</sup>昼<sup>を</sup>い<sup>か</sup>に<sup>。</sup>（注67）  
 姿<sup>かたち</sup>こ<sup>そ</sup>か<sup>は</sup>れ<sup>。正</sup>し<sup>く</sup>真<sup>ま</sup>女<sup>に</sup>子<sup>が</sup>声<sup>こゑ</sup>な<sup>り</sup>。聞<sup>きこ</sup>に<sup>あ</sup>さ<sup>ま</sup>  
 し<sup>う</sup>。身<sup>の</sup>毛<sup>け</sup>も<sup>た</sup>ち<sup>て</sup>恐<sup>おそ</sup>し<sup>く</sup>。只<sup>ただ</sup>あ<sup>き</sup>れ<sup>ま</sup>ど<sup>ふ</sup>を<sup>。</sup>  
 女<sup>を</sup>打<sup>う</sup>ゑ<sup>み</sup>て<sup>。吾</sup>君<sup>な</sup>怪<sup>あや</sup>し<sup>み</sup>玉<sup>ひ</sup>そ<sup>。</sup>（注68）  
 こ<sup>の</sup>「怪<sup>あや</sup>し<sup>。</sup>」に<sup>つ</sup>い<sup>て</sup>は<sup>、人</sup>外<sup>の</sup>妖<sup>ま</sup>怪<sup>の</sup>存<sup>在</sup>に<sup>よ</sup>る<sup>怪</sup>  
 異<sup>を</sup>あ<sup>や</sup>し<sup>む</sup>場<sup>合</sup>に<sup>使</sup>わ<sup>れ</sup>て<sup>い</sup>る<sup>。こ</sup>れ<sup>は</sup>、漢<sup>の</sup>字<sup>の</sup>与<sup>え</sup>  
 る<sup>印</sup>象<sup>で</sup>読<sup>者</sup>に<sup>も</sup>容<sup>易</sup>に<sup>察</sup>し<sup>が</sup>つ<sup>く</sup>と<sup>い</sup>え<sup>よう</sup>。ま<sup>た</sup>、  
 「夢<sup>の</sup>鯉<sup>魚</sup>」な<sup>ど</sup>の<sup>本</sup>来<sup>人</sup>間<sup>で</sup>あ<sup>つ</sup>た<sup>も</sup>の<sup>が</sup>、そ<sup>の</sup>執<sup>し</sup>  
 着<sup>や</sup>恨<sup>み</sup>に<sup>よ</sup>つ<sup>て</sup>生<sup>じ</sup>た<sup>怪</sup>異<sup>と</sup>異<sup>なり</sup>、そ<sup>も</sup>そ<sup>も</sup>蛇<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>。  
 つ<sup>た</sup>物<sup>の</sup>引<sup>き</sup>起<sup>こ</sup>す<sup>怪</sup>異<sup>は</sup>、実<sup>際</sup>は<sup>宮</sup>木<sup>の</sup>霊<sup>で</sup>あ<sup>つ</sup>た<sup>が</sup>、こ  
 浅<sup>茅</sup>が<sup>宿</sup>「の<sup>怪</sup>異<sup>は</sup>、実<sup>際</sup>は<sup>宮</sup>木<sup>の</sup>霊<sup>で</sup>あ<sup>つ</sup>た<sup>が</sup>、こ





⑤身分が卑しいさま。平安時代の貴族には、一般庶民に関する事  
 物・言語・動作などが「あやし」と把握された。  
 この一般庶民の事物、具体的には「家」を語る時に  
 「賤し」が用いられて、構わないが、意味的には「賤し」  
 は「いやしい」と訓をして、この「あやし」と「賤し」  
 には「賤し」で「いやしい」と訓を付している語が「貧福」  
 論「に二例見られる。そこでこの「あやし」と「賤し」  
 の訓の差異を考えた。身分に限りに過たる財を得たるは鳴呼の事な  
 り。<sup>(ほろ)</sup> 貴きをたふとみ。賤しきを扶くる意ありなから。<sup>(ほろ)</sup>  
 これがその「貧福論」の意味を挙げ、再び「角川古  
 大辞典」の「いやしい」の意を挙げておく。  
 身分や自己に地位身分の低いさま。②特にみずからの

る。③身分の低い者の属性として考えられるさま。  
 めすばらしい、むさくるしい、などの美的価値も含  
 「貧福論」のこの例は「身分の低い人」そのものを示  
 している。だが「あやし」の場合属性を指示し、かつ  
 「源氏物語」の「夕顔」  
 あやしき垣根になんさき侍り  
 隣の家々、あやしき賤の男の声々  
 など想起する。  
 「蛇性の姪」は物語の書き出しの部分がいづの時代  
 なりけん「で始まり、登場人物の設定と紹介から入って  
 いこうとする方法を用いており、『源氏物語』の「いづ  
 れの御時に」にならったものであることは想像に難  
 くない。<sup>(注4)</sup>それらの理由から「賤し」を「あやし」と訓ま  
 せたものと思われる。適切な用例がある。「卑し」で  
 この基準の存在を語る適切な用例がある。「卑し」で

ある。  
 「青頭巾」  
 又いにしへある僧<sup>あや</sup>卑<sup>あや</sup>しき家に旅<sup>たび</sup>寝<sup>ね</sup>せしに。<sup>(注75)</sup>  
 「菊花の約」  
 士<sup>し</sup>家の風<sup>ふう</sup>ありて卑<sup>いや</sup>しからぬと見しまゝに。<sup>(注76)</sup>  
 この漢字の場合も、属性（家）を示す時は「あやし」  
 での者の身分を示す場合は「いやし」を使うといえよ  
 う。ただし、漢字を「賤し」でなく「卑し」にした理由  
 は不明である。  
 以上で『雨月物語』の「あやし」についての漢字表記  
 の使い分けに関する考察を終えるものとする。この節で  
 は『雨月物語』の漢字表記に関する、作者秋成がいかに  
 細かく使い分けをし、配慮をしていたかを語る事が出来  
 たと思われる。次の節では「菊花の約」の「吾」の多用  
 について考察を加えていきたい。

注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注  
20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	勉誠社文庫	『雨月物語評釈』	勉誠社文庫	『日本古典文学全集
181	167	69	20	181	168	160	179	189	169	169	150	88	88	87	96			『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』
頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	頁	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』
7	2	7	7	11	11	3	1	7	10	10	7	6	4	9	6			47頁	47頁	8頁	11頁
行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	行	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』	『雨月物語評釈』
																		28頁	8頁	11頁	二十八頁

注  
41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21

同 同

170 170 169 168 168 167 167 167 167 165 164 164 161 160 159 158 158 157 157 157 184  
頁  
4 3 4 7 6 9 7 4 1 8 11 1 9 11 4 10 7 11 10 7 11  
行 行

注注注注注注注注注注注注注注注注注注注注注注注注  
61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42

[illegible]

注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注 注  
76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62

同 勉 ㄣ 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
誠 雨  
社 月  
文 物  
庫 語  
23 ㄣ 評 179 173 141 118 116 144 136 133 57 161 158 109  
頁 雨 釈 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁 頁  
9 月 ㄣ 1 12 4 4 6 8 2 8 10 10 5 8  
行 物 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行 行  
語 五  
ㄣ 六  
十  
161 頁  
頁 上  
9 十  
行 一  
行





ることで、原拠の文学を短編に取り込み、なおかつ『雨  
 月物語』独特の世界を創造しているといえよう。  
 は、主として『古今小説第十六卷』であるけれども、この作品  
 接の原拠として構成している。范巨卿『雞黍死生交』を直  
 この事は、両作品を比較してみれば容易に理解出来る。  
 両者の対応関係を表にすると、以下の如である。

「死生交」	范巨卿（范式）	張元伯（張劭） （母と弟有り）
「菊花の約」	赤穴宗右衛門	丈部左門（母、 結婚した妹有り）

九月九日の再会の成就と死の告白、消失	約 束	別 離	「兄弟の盟」を結ぶ	出 会
	九 別 日 れ に た に 日 に ち が の 張 九 を 月 訪 月 問	一 年 後 互 い の 家 に 帰 る		に 隣 科 、 の 挙 張 部 の が 屋 旅 そ で の れ 范 途 を 式 中 看 が 宿 病 病
	九 月 九 日 に 帰 っ て く る	夏 に な っ て 雲 州 の 様 子 を 知 る 為 、 帰 る		同 左 じ 門 く の 赤 知 穴 り が 合 病 い に の 家 。

信義の厚さをたたえられる。	現 地		翌 朝	原 因
	張もその場で自殺	が動かずにいる	范式の家で葬礼が出た	母に別れを乞い、范式の家に向かう
	丹治糾弾し、一刀のもとに斬り捨てる	丹治の家を訪問	母に別れを乞い、出雲へ向かう	当日約束を思い出し間に合わないので自殺

「死生交」と「菊花の約」で表現の一致

「死生交」

書き出し部（結交行）

種樹莫種垂楊枝結交莫結輕薄兒楊枝不耐秋風

吹輕薄易結還易離君不見昨日書來兩相憶今日相

逢不相識不如楊枝猶可久一度春風一回回首

「菊花の約」

青々たる春の柳。家園に種ることなかれ。交りは輕

薄の人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも。

秋の初風の吹に耐めや。輕薄の人は交りやすくて

亦速なり。楊柳いくたび春に染れども。輕薄の人は

絶て訪ふ日なし。

「死生交」

死生有命、安有病能過人之理、吾須視之。

「菊花の約」

死生命あり。何の病か人に伝ふべき。これらは愚俗

「死生交」のことばにて吾們（わがら）はとらずとて（は）

張「大丈夫以義氣為重、功名富貴、乃微末耳。」

「菊花の約」

赤穴宗右衛門

「大丈夫は義を重（おも）しとす。功名富貴（こうめいふうき）はいふに足（たり）す」（注4）

この他にも、「死生交」から「菊花の約」の表現を用

いている部分を挙げる事が可能であるが、ここでは「菊

花の約」の原拠である事を示すことに重きを置きたいの

で省略するものとする。

さて、「菊花の約」の原拠が「死生交」である事をふ

まえて、「われ」の漢字表現について考えを続けたい。

「死生交」の「われ」の表現を列挙しておく。

「吾」

十七

「我」

五

此の様に「死生交」では「吾」と「我」が混在してお  
 り、その基準は明らかではない。  
 「和訓栞」を調べた所

但し、修飾語も含む

計	「吾児」	「吾母」
二十一	三	一
計	「我們」	「我心」
七	一	一

古事記  
 の歌に見ゆ字彙に我自謂己身也とみゆ○他を指  
 て我とも己ともいふ他に代りていふ詞也よて俗に  
 卑き人に對しいふ辭となれり○吾我のわかちハ孟子  
 に我以ニ吾仁一莊子に今吾喪レ我等の如し又予余台

問 題 と の 記 述 が あ っ た 。 こ こ で も 吾 我 の 使 い 分 け の 基 準 が  
 大 漢 和 辞 典 』 に よ る と 、  
 我 一 、 わ れ イ 、 わ た く し 。 お の れ 。 み ず か ら 。  
 ロ 、 わ が か た 。 う ち 。 自 国 。 味 方 。 ハ 、 わ が き  
 み 。 二 、 わ が 。 お の れ の イ 、 自 己 に 屬 す る こ  
 と を あ ら は す 辭 。 お の れ の 親 し む こ と に 冠 す る 詞 。  
 わ が 親 愛 す る 所 の と い ふ 意 。  
 吾 一 、 わ れ 。 わ が 。 二 、 相 手 を 親 愛 し て 呼 ぶ 時 に  
 添 へ る 語 。  
 と 説 明 が な さ れ て い て 、 使 い 分 け に 関 し て は 記 述 が 認  
 め ら れ な か っ た 。  
 っ ま り 、 『 和 訓 栞 』 が 作 成 さ れ た 頃 、 我 吾 の 使 い 分 け  
 は し て い な か っ た か も し れ な い が 、 少 な く と も そ の 二 語

には、「意味、若しくは表現方法の差異」があると考えられていたと、判断できはしないだろうか。そのまゝで今度は「菊花の約」が、翻案の際にどの表現をそのまゝ活かして、どの表現を変えたのかについて、細かく対比させてそこに「我」と「吾」の使用法の基準を見いだしたい。

「菊花の約」と「死生交」の相対表

「菊花の約」

「死生交」

左門

「吾們はとらず」<sup>(注5)</sup>

宿の番頭

「我門尚自不去看他」

「吾、日々に詣てつかへ  
まゐらすべし」<sup>(注6)</sup>

張「吾須視之」  
「吾竭力救之。薬餌粥食  
吾自供奉。」



	赤穴「吾を師として」 <sup>(注7)</sup> 「かへりて吾を国に逗む」 <sup>(注8)</sup> 「吾半生の命をもて」 <sup>(注9)</sup>	「吾父母に離れまゐらせ」 <sup>(注10)</sup> 「賢弟が老母は即吾母なれば」 <sup>(注11)</sup>	左門「我孤独を憂ふ」 <sup>(注12)</sup>	老母「吾子不才にて」 <sup>(注13)</sup>
范式「若君子救得吾病」		「吾幼亡父母」 「汝母即吾母」		張の母 「吾児一去、音信不聞、 令我懸望、」 「既逢信義人結交、甚

<p>「利害を説て吾を經久に」<sup>(注18)</sup>  「吾を大城の外に」<sup>(注19)</sup></p>	<p>赤穴  「吾は陽世の人にあらず」<sup>(注17)</sup></p>		<p>氷輪 我のみを照して<sup>(注16)</sup>  △地の文▽</p>	<p>赤穴「吾いま母公の」<sup>(注14)</sup>  「吾近江を遁来りしも」<sup>(注15)</sup></p>	
	<p>范式「吾当尽情訴之、  吾非陽世之人乃陰魂也」</p>	<p>張「若范兄不至、吾誓不  歸」</p>	<p>△地の文▽  足見我之待久</p>		<p>快我心」</p>

<p>「賢弟吾を何ものとかせん<sup>(注20)</sup>」</p>			<p>左門「吾幼なきより<sup>(注21)</sup>」</p>	<p>老母「吾見かしこに<sup>(注22)</sup>」</p>
<p>「賢弟以我為何物」</p>	<p>『吾死之後、且勿下葬 待吾弟張元伯至、』 「一見吾屍」</p>	<p>張の母 「此是吾兒念念在心」</p>	<p>張「吾安不信而不去哉」 「吾去之後、」</p>	<p>張の母「吾見去山陽千里 之遙、」</p>

例  
 以上が「菊花の約」と「死生交」の「吾・我」の全用である。こうして比べてみると、「菊花の約」は二例

	<p>「吾、今信義を重んじて」        「吾、汝をすゝむれども」        「吾、ために教を遺せ」        「吾、孝ぶ所について」</p>	
<p>張「欲把昆吾鰐」        「吾志已決」</p>	<p>范式的妻「对妾日、」        失却元伯之大信、        （略）吾寧死、（略）        待元伯来见我屍、</p>	<p>張「勿令吾憂。」</p>

を除いて全「吾」で統一している事に気づく。一方の  
 「死生交」は「吾・我」が混在しており、しかもはつき  
 りとした基準の許での使い分けがなされているのかは、  
 分からない。ただ、「菊花の約」でわざわざ「我」を  
 「吾」に変化させている点に注意しておきたい。だが  
 逆に地の文の「我」のみ「」の場合には「死生交」の「我」が  
 そのまま用いられていることも気づかされる。この部  
 分の「我」は「菊花の約」の中では唯一地の文での表現  
 であつて、特異な感拭えない。また「死生交」にはな  
 い「我孤独」という表現があることに注意したい。  
 で統一しようとする除けば「菊花の約」は一人称を「吾」  
 また「菊花の約」が「雨月物語」の「吾」の全用例二  
 十七例「内菊の約」が「雨月物語」の「蛇性の姪」が七例  
 の内ほとんど言つてよい程を占めていゝ、という事で  
 あろう。

「吾」	「朕」	「余」	「我」	
	一例	二例	十例	『英草紙』
二例			三十六例	『西山物語』

但し、「死生交」も三対一の割合で「吾」の用例が多いという点も言えよう。

『雨月物語』での「吾」の用例は「菊花の約」を除くと非常に少ないことは述べたが、先行の『英草紙』と『西山物語』ではどの様になっているかというところ、

か 認 め ら れ な っ た 。 こ の こ と か ら 両 物 語 共 、 「 我 」 が  
 庄 倒 的 に 多 く 用 い ら れ て い る こ と が わ か る の で あ る 。  
 殊 な 感 が ぬ ぐ え な い 。 で は 「 吾 」 の 多 用 が 特  
 印 象 は 、 と い う と 、 原 拠 が 中 国 白 話 小 説 で あ る こ と 、 さ  
 ら に は 、 全 体 を 通 し て 漢 語 調 で あ る と い う こ と 、 な ど が  
 挙 げ ら れ る 。  
 意 だ が 基 本 的 に 「 吾 」 も 「 我 」 も 同 じ 意 味 で あ り 、 特 に  
 ら れ た と お り で あ る 。 意 味 は 違 わ な い が 、 受 け る 印 象 は  
 異 な っ て い る 。 先 述 し た 通 り 中 国 白 話 小 説 の 存 在 が 前 面  
 に 押 し 出 さ れ て く る の で あ る 。  
 考 え た 。 他 の 用 例 の 様 に 漢 字 の 使 用 基 準 を 求 め る こ と は  
 で き な か っ た が 、 秋 成 が 『 雨 月 物 語 』 を 書 く 上 で 漢 字 表

記において細かい配慮をしていたことが確認できたであ  
ろ。次には「白峯」を中心に「讐」の表記の意味を明  
らかにしていきたい。



注  
26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6

同 同

39 38 38 38 37 36 35 34 34 34 30 28 27 27 27 27 26 26 25 25  
頁  
9 10 7 3 4 12 1 12 7 2 10 2 11 8 6 4 4 7 4 11 5  
行 行

「怨敵」	「敵」	「讐」	
1	3	3	白峯
			吉備津
		1	蛇性
	1		貧福論
1	4	4	計

この節では、「白峯」を中心とした「あた」の表記  
 第三節「白峯」を  
 たい。あたは『雨物語』の中に全部で十二例が  
 使われている。しかし、一編に用例が集中して用いら  
 てゐる為、その使い分けに秋成独自の規定が存在し  
 るのではないかと考えられる。  
 まず「あた」の訓を与えられた漢字は、五種類ある。  
 それは「讐」「敵」「仇」「怨敵」「讐敵」である。

『雨月物語』の中の「あた」を全用例挙げておく。

「讐」

「白峯」

「蛇性の姪」

「讐敵」―あたども―

「白峯」

一、旧<sup>ふる</sup>き讐<sup>あは</sup>をわすれ玉<sup>たま</sup>ひて<sup>(注一)</sup>  
 二、今は旧<sup>ふる</sup>しき讐<sup>あは</sup>なるかな<sup>(注二)</sup>  
 三、信<sup>のぶ</sup>頼<sup>より</sup>義<sup>ぎ</sup>朝<sup>とも</sup>が讐<sup>あは</sup>となせしかば<sup>(注三)</sup>  
 四、君何の讐<sup>あは</sup>に我<sup>われ</sup>を捉<sup>とら</sup>へんとて<sup>(注四)</sup>  
 五、かの讐<sup>あは</sup>敵<sup>どい</sup>ことごとく<sup>(注五)</sup>  
 此前の海に盡<sup>つく</sup>すべしと<sup>(注五)</sup>

「仇」	「讐敵」	
	1	白峯
1		吉備津
1		蛇性
		貧福論
2	1	計

句の以上、全十二例が認められるのだが、まずこれらの語	「蛇性の姪」 十二、此後も仇をもて報ひ玉はば <small>(注12)</small>	「吉備津の釜」 十一、かの赤縄 <small>(注11)</small> に繋ぎては、仇あ	「仇」 十、きのふは忽 <small>(注10)</small> 怨敵となりて <small>(注10)</small>	「怨敵」 九、千人の敵 <small>(注9)</small> には逆ふべからず <small>(注9)</small>	「貧福論」 八、義朝 <small>(注8)</small> こそ悪き敵 <small>(注8)</small> なれ <small>(注8)</small>	七、兄弟敵 <small>(注7)</small> となりし例は <small>(注7)</small>	六、末の世に神孫を奪ふて罪なし	「敵」 「白峯」
----------------------------	--	--	---	---	--	--	-----------------	-------------

## 『大漢和辞典』

「讐」

「敵」

一、こたへる。二、むくいる。三、あたる。  
 四、しるしがある。五、もちひる。  
 六、ともがら。七、たぐへる。八、ひとし  
 ひ。九、あだ。かたき。仇に通ず。十、あ  
 だとする。かたきとする。以下略。  
 「讐怨」うらみ。怨恨。「讐冤」に同じ。  
 「讐仇」かたき。あだ。讐人。仇讐  
 「讐敵」かたき。あだ。仇敵  
 一、あだ。かたき。あだ。二、たぐひ。なかま。  
 三、あい。て。イ、つりあふ者、たぐふ者。  
 ロ、はむかう者、對する者。四、あたる。  
 イ、ひとしい、つりあふ。ロ、むかふ、ぶ  
 つかる。以下略。  
 「敵怨」怨に報いる

「中世の諸文献や、近松など元禄期文学では「あた」			角川古語大辞典』「仇・讐」名詞古く「た」は清音。			「仇」			「敵愾」君主の恨み怒る者に敵対する。 「敵国」①我に仇をなす国。かたきの国。 ②国力の相等しい国。対等の諸侯の国。互			一、あた。かたき。うらみ。一説文「仇、 讐也。二、あたする。かたきとする。うら む。にくむ。三、つれあふ。四、おごり高ぶるさ ひ。とも。つれあふ。四、おごり高ぶるさ ま。			「仇怨」うらみ。怨恨。 「仇家」怨のある家。又、かたき。 「仇恨」あだ。うらみ。		
--------------------------	--	--	--------------------------	--	--	-----	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--

一、自分に害をなすもの、攻めくるもの、自分が倒  
 さねばならない相手、敵、「かたき」と似た概念だ  
 が、「かたき」は、本来相匹敵するものであり、乙  
 が、甲のかたきならば、同時に甲は乙のかたきとし  
 考えることができ、相互にかたき同士などという。  
 「中略」このように「かたき」は、本来は甲乙対立  
 の観点にたち、外部から把握した概念であつたのに  
 対し、「あた」は、甲を基準とする価値意識におい  
 てのみ、乙は甲にとつての「あた」として把握され  
 る。その逆は、同時に成り立たない。「あた」が  
 ②③の意義にわたること、この価値意識を伴うゆ  
 えである。②の有意的に加えられる害悪。危害。またそれをなす  
 もの。③のうらみ。遺恨。また恨みの源であるもの、恨みを  
 生じるものをもいう。

時

④ 近世では、特に「あたをかへす」「あたをむくい  
 る」「など」と熟して、敵討ちをする意に用い、また  
 「君父のあた」「母のあた」「など敵討ちの対象とな  
 遺恨をもいう。近世後期には仇討ち（あだうち）と  
 いう熟語も生じた。  
 代別国語大辞典・上代」  
 あた「敵・賊」①敵。外敵。②遺恨  
 「考」①の第二例「吹き響せる小角の音も敵見たる  
 虎か吼ゆると諸人のおびゆるまでに」「（万一九九）  
 の「敵見」を、動詞アタム（四段）の連用形とする  
 説もある。東大寺本地蔵十輪経原慶点に「嬉戯シ遊  
 行スルニ相猜ミ式マズシテ」とあるほか、新撰字鏡  
 享和本に「快慍也、強也、心不服也、宇良也牟、又  
 アタ牟、又伊太牟」「名義抄に、「謔（こゝろ）・慍  
 阿太牟、又伊太牟」「とあり、動詞アタムの存在は  
 認められるが、意味の上でこことは少しくいちがう



ようである。名義抄では、「敵・仇・賊」の字はす  
 べてアタと訓み、アタムの訓はない。一方、新撰字  
 鏡や名義抄にアタムの訓のある漢字は、またウラム  
 ウレフ・ムクユなどの訓を持っている。

『時代別国語大辞典・室町時代』  
 あた「仇」「讎・冤」  
 冤・寇「一」広本節用「一怨・仇」三省堂節用「讎・  
 一讎・仇」一温故「一①自分に敵対し、危害を加えて  
 くるものとして敵視すべき存在。その人にとって滅  
 ぼすべき相手。敵。②特に、自国に攻め来る者。侵  
 略者。③そのものに好ましくない結果をもたらすも  
 の、害となるもの。また、害となること。↓仇をな  
 す④恨み、遺恨↓仇をば恩にて報ず・仇を結ぶ。  
 「あた」の字義は、辞書的には、以上のようなもので  
 ある。ではここから具体的に『雨月物語』の中の「あ  
 た」を考察したい。まず「白峯」であるが、全十二例の

内八例を含み、しかも複数の種類を使い分けており、細  
 かい考察を要する。『雨月物語評釈』や、『日本古典文学全集』などで、  
 鵜月洋氏、高田衛氏は「あた」をどの様に解釈されてい  
 るのかを調べた所、以下の様にその文脈ごとの訳がつ  
 けられていた。  
 讐 讐 恨み、憎しみ、但し第三例のみ「敵」  
 讐 敵 仇 敵ども  
 敵 敵 賊子  
 怨 敵 仇 敵、敵対者  
 仇 仇 敵  
 は、文脈によつて「恨み」であつたり「敵」であつたり  
 と、意味内容が異なつてゐる。だが、ここまでに秋成が  
 漢字表記に關して、かなり細やかな配慮をしてゐるこ  
 を述べてきたように、この例も秋成の使い分けの基準が

存在していると考えられるのである。  
 「敵」や「讐」がどのような意味で用いられており、  
 こう。「仇」といかなる差異があるのかを考察してい  
 基本としては、『角川古語辞典』の「『あた』は、甲  
 を基準とする価値意識においてのみ、乙は甲にとつての  
 「あた」として把握される。その逆は、同時に成り立  
 たない。「と」「遺恨」「恨み」という概念を置きたい。  
 「恨み」とはいつても、害をなされての恨みであつて、  
 その害も社会的、かつ実害を伴うものであつて、単に相  
 手が自分の信頼に応えてくれない、であるとか、嫉妬に  
 よる怨みではない、恨み、でも押さええておかねばならぬ。  
 そのもそも、恨み、で十分表現出来ないからこそ「讐」  
 の語を用いているのである。  
 では「うらみ」と「あた」の概念の差異がどこにある  
 のかについて述べておきたい。

せ し か ば 「 の 「 讐 」 が 、 どの よう に 恨 み 、 遺 恨 と 結 び つ  
 し て い る と 考 え ら れ る 。 新 院 か ら の 人 間 関 係 の 把 握 を 表 現  
 「 う ら み 」 の 感 情 と 、 新 院 基 本 と し て あ り 、 そ こ に 新 院 の  
 信 西 ら と の 対 立 の 構 図 が 基 本 的 に 対 立 す る 人 間 関 係 の 上 に 生 じ る も  
 「 二 の 「 讐 」 は 新 院 と 朝 廷 側 の 美 福 門 院 、 後 白 河 帝 、  
 「 そ の 視 点 か ら 」 白 峯 「 の 「 讐 」 を 捉 え る よう に 思 わ れ る 。  
 不 可 欠 で あ る と い う 性 質 が 備 わ っ て い る よう に 思 わ れ る 。  
 後 の 第 三 章 で 詳 細 に 述 べ る も の と す る 。 「  
 あ る う 。 「 怨 み 」 と 「 恨 み 」 の 意 味 の 差 異 に つ い て は  
 っ て は そ の 対 立 関 係 に あ る 相 手 ま で も 表 現 し う る 言 葉 で  
 た 「 は 感 情 を 含 ん で の 対 立 関 係 そ の も の を 、 又 場 合 に よ  
 あ る が 、 「 う ら み 」 が 感 情 の 表 現 で あ る の に 対 し 、 「 あ  
 の で あ り 、 そ の 点 で は 「 恨 み 」 怨 み 」 に 近 い の で  
 「 あ た 」 は 基 本 的 に 対 立 す る 人 間 関 係 の 上 に 生 じ る も

くのかである。そこで「白峯」の典拠である『保元物語』  
 峯「との関連について押さえたい。この二作品と「白  
 峯」保元物語』  
 代なので当然秋成が読んでいたことが想定される。  
 その中でも秋成が『保元物語』から「白峯」に取り入れ  
 た部分を確認しておく。

『保元物語』

後白河院御即位の事

衛院御誕生、同年八月十八日、美福門院の御腹に、近  
 治元年十二月七日、御年三歳にして御位にそなはら  
 せ給ふ。それより後先帝を新院と申、上皇をば一院  
 とぞ申ける。是に依て一院・新院父子御中互に御不  
 快にならせ給ふ。帝もことなる御咎もわたらせ給は  
 ねども、御位を下しまいらせ給けり。是當腹御寵愛

によりて也。<sup>(注13)</sup>

系図を引用しておきたい。『平治物語』の頃の皇位継承  
 けまいらせ給ぞ心うき。<sup>(注14)</sup>  
 法皇にはとかくとり申させ給ひて、四宮を御位につ  
 たもありければ、美福門院、その御恨ふかくして、  
 きゆへに、近衛院かくれさせ給ひぬとさゝやき申か  
 継子にて御座ども、新院・重仁親王の御しゆそふか  
 腹の御兄弟なり。されば女院の御為には、いづれも  
 宮と申は、故待賢門院の御腹なれば、新院と同胞一  
 からひにて、御位につけたてまつらせ給ふ。この四  
 四宮とてうちこめられてましまししを、女院の御は  
 はじと万人おもひあへりしに、後白河の法皇、其時  
 ずとも、御子一のみや重仁親王はよものがれさせ給  
 たまひぬれば、御身こそ今はかへりつかせまされ  
 今度の御位の事、新院させる由緒もなくをろされ

△ 皇位継承略系図 V 数字は第何代かを示す

待賢門院璋子

75 崇徳（顕仁）——重仁親王  
77 後白河（雅仁）——78 二条

72 白河——73 堀河——74 鳥羽

76 近衛（体仁）

美福門院得子

新院御謀反思し召し立たる事  
又新院も内々おほせのありけるは、  
位をうる事、かならずしもちやくそによるべからず  
といへども、且はきりやうのかんふにしたがひ、且  
は外戚の尊卑による事ぞかし。しかるを當腹の寵愛  
をもつて、はるか末弟、近衛院に位をうばはれた  
りしかば、人にたいしてめんぼくをうしなひ、時に  
あたってちじよくを抱く。しかりといへども、事の

よりどころなきによつて、先帝弱年にして崩じぬ。  
是すでに天のうけざる所あきらけし。よつて此時に  
重仁親王嫡々正統なり。もつともその仁にあたると  
ころに、あまつさへ又数のほかの四宮に超越せられ、  
遺恨のいたり、謝するところをしらず。いかゞせま  
し。』とぞおぼしめしける。<sup>(つひ)</sup>  
新院御經沈めのこと、付けたり崩御の事  
今生はしそんじつ。後生菩提の爲にとて、御指の  
さきより血をあやし、三年が間に五部の大乘經を御  
自筆にあそばされたりけるを、かゝる遠嶋に置奉事  
痛しければ、鳥羽・八幡邊にも納奉べきよし、御室  
御所へ申させ給ふ。其御書に云く、(中略)  
御室の法親王是をみ参らせ給て、御涙を流させ給ふ。  
関白殿様々に執申させ給ひ、かども、御手跡計算都へ返し入  
〆御身は配所に留らせ給ひ、御手跡計算都へ返し入  
させ給はんこと、いまいまだ敷覚候。其上いかなる御



願にてか候らん、無覺束。』と申ければ、主上げに  
 もとや思召れけむ、御免れなかりける間、力及ばせ  
 給はず。新院是を聞召れて、『口惜事ござんなれ。』  
 日本我朝にも限らず、天竺・震旦・鬼海・高麗・鷄  
 旦國に至迄、位を争ひ國を競て、兄弟合戦をいたし、  
 叔父甥軍を起例多かりけれ共、昔も今も習ひ有なれ  
 ども、時移事去て、罪を謝し科を宥らるゝ、王道の  
 惠、無邊の情也。いかに況出家入道して菩提の爲に  
 佛經を修讀するをも皆ゆるされてありしが、後世の  
 爲にとて書きたてまつる大乘經の敷地をだにも惜れ  
 んには、後世迄の敵ござんなれ。さらんにをひては、  
 我生ても無益也。』とて、其後は御ぐしをも召され  
 ず、御爪をもはやさせ給はず、生ながら天狗の姿に  
 ならせ給そ浅ましき(まじ)  
 斯て新院御寫經事畢しかば、御前に積置せて、御祈  
 誓有けるは、『吾深罪に行れ、愁鬱淺からず。速此

の功力を以彼科を救はんと思ふ莫太の行業を、併三  
 惡道に抛籠、其力を以、日本國の大魔縁となり、皇  
 を取て民となし、民を皇となさん』とて、御舌のさ  
 きをくいて、流る血を以、大乘經の奥に、御誓狀  
 を書付らる。『願は、上梵天帝釈、下堅牢地神に至  
 迄、此誓約に合力し給や』と海底に入させ給ひける  
 仁安三年の秋の比、西行法師諸國修業しけるが、  
 四國の邊地を巡見の時、讃岐國に渡、白峯の御墓に  
 尋參て拝し奉れば、わづかに方形の構を結置くとい  
 へ共、荒廢の後修造の功もいたさず、  
 (中略)  
 松山の波にながれてこし舟の  
 西行、夢ともなく現ともなく御返事申けり。  
 よしや君昔の玉のゆかとても何にかはせん  
 かゝらん後は何にかはせん

平治物語

かやうに申たりければ、御墓三度迄震動するぞ怖し  
き。(注18)

信頼・信西不快の事

靡程也。かゝる所に信頼・信西二人が中にいかなる

天魔が入替けん、不快に聞えける。信西、信頼をみ

ては、此者に在ば朝家をも傾けまいらせ、國土を

も乱さむずる者也、いかにしてもほろぼさばやと思

ひけれども、打絶たのむべき者なければ、思煩てた

めらひ居たり。また信頼、信西をみては、此者わが

爲に怨を結ばむずる者也、いかにもして失ばやと互

に心を懸たりけり。(注19)

信頼信西を亡ぼさる議の事

左馬頭義朝こそ保元以来平家に世のおぼえをとッ

て恨み深かむなれ、語ばやと思ひ、義朝をよびよせ

憑べき由の給ば、  
 命を捨る事なり共たのまれたて  
 まつるべし。』と深く契りてぞ歸ける。(注)  
 以上に見られるように、「白峯」は「保元物語」と  
 『平治物語』から題材を取っている事は明らかであり、  
 ここにおいて、崇徳院と美福門院、信西、信西と信賴、  
 義朝の対立關係が明示されてゐるのである。  
 信西は崇徳院の改悛の大乘経を拒否させ、また信賴の  
 大臣への昇進をも阻んでゐる。前者の崇徳院はそのこと  
 が契機となつて、経を魔道に回向して、崇徳院の復讐  
 一歴史をも変化させる程の恨みへと展開し西行にも会  
 うのであるが、後者はそのことがきつかけで「平治の乱」  
 を引き起こすのである。そして義朝もまた、信西に恨み  
 があつたのである。これは『愚管抄』に記されてゐるの  
 だが、かつて義朝が信西の子息の是憲を媚にとろうとし  
 たところ、信西の息子であつさり拒否されたのみならず、  
 信西の息子を平清盛の婿にしたのみに止まつたといふ

のである(注21) といつたり、信西と信頼、義朝の間には、単なる権力争い  
 と、いった敵対関係のみならず、信頼、義朝の側には「恨  
 み」も存在していたのかにいたのである。しかもこの事を信西が意  
 識していたのかに。このことは、「保元」平治の物語は  
 言及していない。このことは、「平治」の物語は  
 り得る関係が成立していたといふ根拠になりえるのでは  
 ないだろうか。白峯は「保元物語」から多く形成  
 されていく。しかしながら物語の展開の方法について  
 両者は対照的であるといえる。保元物語は年代を  
 おって歴史を語っているのに、白峯は、その  
 「保元」の最終段「新院御経沈めのこと、付けたり崩御  
 の事」のなかの「西行法師白峯へ参る事」から始まり、  
 新院と西行の対話、論争のうで「保元物語」平治物  
 語に有る事を確認し、さらに予言という形をもとりつ

つゝ、『平家物語』をも読者に想起させる構造がとられて  
 いるのである。この原拠の『保元』『平治』は、前者が  
 帝位をめぐる争い、後者が権力、武士の争いという大きな  
 構造で成立しており、二者の対立構造は共通なのであ  
 る。したがって、信西らと新院との間の「讐」と同質の  
 「讐」が、信西と信賴、義朝の間に見いだされても、一  
 向におかしくはないのである。が新院その人である点も  
 注意しておきたい。その語っているのが新院その人である点も  
 崇徳院からみた対人関係が、信西と信賴、義朝を「讐」  
 と捉えており、その歴史観は『平治物語』と共通してい  
 るのである。『保元物語』に「讐」の用例は認められるのだ  
 ろうか。「白峯」と『保元物語』で「讐」と「恨み」に  
 関わり対応する箇所を挙げてみたい。

「白峯」

四の宮の雅仁まことひとに代よを纂あつはれしは深き怨うらみにあらずや(注22)  
 『保元物語』  
 あまつさへまた数のほかの四宮に超越せられ、遺恨  
 のいたり、謝する所を知らず  
 「白峯」  
 筆の跡だも納玉いんぎょはぬ叡慮みこころこそ、今は旧いにししき讐あてなるか  
 な(注23)  
 『保元物語』  
 後世のためにとて書き奉る大乘經の敷地をだにも惜  
 しまれんには、後世までの敵ごさんなれ  
 以上のように、『保元物語』の中には「讐」の用例は  
 認められなかったのである。角川書店、鑑賞日本古典  
 文学『保元物語・平治物語』  
 といふことは、この「讐」の用字を、秋成が意図的に  
 行つていたと考へられはしないだろうか。  
 つまり「讐」の漢字には、主体が対象を自分に害をな

すものとして捉え、それ故に対象をうらみ、またそのう  
 らみを報いようとする、という意味が与えられているの  
 である。またそのように主体が対象との人間関係を把握  
 している場合に用いられるのである。  
 この「讐」の「報い」が新院の側から語られるという物  
 語構造となっていて、ある。「讐」の人々を失脚させたり  
 として新院が現実世界で、「讐」の魔王となった新  
 院が、「讐」と捉えた人々の運命を、自分の「讐の報い」  
 の故であるという捉え方をしているのである。  
 この「讐」の語の意味と使用基準を正確に把握するこ  
 とによつて、この語と、「白峯」の物語構造の類似性が  
 指摘出来はしないだろうか。(注24)  
 もしもそうだと云えるならば、「白峯」にとって「讐」  
 の語は、物語展開の契機でもあり、物語構造の象徴でも



あるといふ、重要な語句であると考えられるのである。  
 では次に「敵」についてであるが、これはほぼ「害を  
 なすもの、敵対するもの」という概念で問題は無いであ  
 る。  
 六、七の用例は、共に「うらみ」の感情の存在は認め  
 られないし、その点でも「讐」とは厳密に區別すべきで  
 ある。用例もそのように解釈することが可能であるし、  
 お互いが敵対関係に有る事を認識していることは間違い  
 がない。  
 八の、新院と義朝の関係も、新院が義朝の父を召した  
 時、既に義朝は内裏方についており、その対立関係は明  
 らかである。ただし義朝によつて「保元の乱」で新院側  
 は敗北をきつたのであるから、「悪き敵」という表現  
 となつてゐるのである。  
 や「讐敵」の者達である朝廷の面々が対象なので、訓は

「あたども」とし、漢字は讐と敵の両方が当てられたのであろうと思われる。これには、一例しか認められない事もあるが、解釈に頼らざるをえない。多分に推論の域を出ないが、「讐」「敵」との差異について考えた。この部分は引用し、この語は西行が語っているのだが、その部分を引用し、道ならぬみわざをもて代を乱し玉ふ則は。きのふまで君を慕ひしも。けふは忽ち怨敵となりて。本意をも遂にたまはで。いにしへより例なき刑を得玉ひて。かゝる鄙の国の土とならせ玉ふなり。たゞたゞ旧き讐をわすれ玉ふて。浄土にかへらせ玉はんこそ願まほしき勸慮なれと。(注五)ここの西行が語っているのは「昨日まで新院を慕つていた者」が新院の謀反によつて「敵対者」となる、といふことである。つまり始めから敵対関係と捉えている。

「讐」とは異なっているのである。では「敵」との  
 違いはどこに求めたらよいのか。ここには多分、味  
 方につくかどうか。裏切られた、という気持ち  
 が存在して、いると思われ。単に敵対者となつた、  
 うのではなく、新院の側からは裏切り者への「怨  
 生じる為に「敵」ではなく。は「怨敵」の漢字表  
 たと考えるのである。は「敵」の漢字表記の基  
 準について「白峯」に認められた「あた」の漢  
 の「蛇性の姪」の「貧福論」の用例が、「白峯」  
 使用基準と矛盾が生じないか確認しておきたい。  
 「蛇性の姪」の「讐」であるが、これは真女児が  
 に対して語っている。「讐」の場面は蛇性である  
 じようと鞍馬寺の法師を差し向けたが、逆に真  
 されてしまった。後のことであり、豊雄に対して向  
 た語である。

「讐」の語が持つ、「甲を基準とする価値意識においてのみ、乙は甲にとっての『あた』と把握され、その逆はありえない」という関係が、この場面での豊雄と真女児に当てはまる。そして、当然真女児は豊雄に害をなす存在であつて、これらのことから、やはり「讐」の字が用いられるべきであらう。従つて「讐」に関しては全用例を確認して、『雨月物語』全体を通してひとつの基準の下に漢字表記がなされているといえるのである。の「貧福論」の「敵」も確認しよう。ここの解釈は次のようになつてゐる。

一 剣をもつて同時に千人を敵として迎え撃つことはできない、の意<sup>(26)</sup>

ここでは「讐」のような人間関係は設定されていない。むしろ対等な敵対者といった意味が強く、「白峯」の「敵」との齟齬もないといえよう。

最後に「白峯」には用例が認められなかつた「仇」を

とりあげたい。この字は「吉備津の釜」「蛇性の姪」の  
 二作品に各々一例ずつしか見られない。この場合は「白  
 峯」と異なり、戦乱の中で対立を示す「敵」では都合  
 が悪く、作品の解釈に大きく関わるものでもないのだ、  
 俗に用いられていて「讐」「敵」と重ならない「仇」の  
 字を用いたものと思われる。「蛇性の姪」は直前にある  
 「君何の讐に我を捉えんとて人をかたらひ給ふ(注27)」何の  
 をうけている。真女児は豊雄に向かつて問う。「今  
 恨み、讐があるのか」そして豊雄を脅すのである。「今  
 後も自分に危害を与えような敵意をもつて私の気持ち  
 に報いをなすのなら」と。  
 直前の「讐」によつて真女児は豊雄を「敵」とは考え  
 ていないことが、しかし豊雄からすれば真女児は「讐」  
 と把握されること、が読み取れた。「讐」とする豊雄に對して  
 真女児からすれば、自分を「讐」とする豊雄に對して

「自分は豊雄に害をなそうなどとは考えていない。だから、自分は豊雄を『讐』と見るのは不適切である。もしもまだ自分に対して敵対するのであれば、それは『讐』の関係によるものではなく、また『敵』とも自分（真女兒）が把握していないのであるから『敵』でもない。」「ということになりう。

つまり「讐」でも「敵」でもない、新たな「敵対関係」ということを表現することになる。この場合は「仇」は、はつきりと対立するというより、一方にとって理不尽な危害をなされる、その行為を示すものではないだろうか。

「吉備津の釜」の「仇」も、「讐」「敵」といった関係を示すものではない。

結婚の結納をしたからには、たとえば先方が仇敵の間柄の家であつても、また他国の人であつても、約束は変えてはならない、ということを言わんが為の表現であるから、「仇」を用いたのである。



[illegible]



- 注 21 新日本古典文学大系『保元物語 平治物語 承久記』154頁注二
- 注 22 勉誠社文庫『雨月物語』12頁2行
- 注 23 同 17頁2行
- 注 24 ここで意味していることは、新院が人間関係を「讐」と捉えていること  
 とその報いによって歴史が展開していくという物語構造を持つ「白峯」と  
 の合致が言えるのではないかという事である。つまりこの「白峯」の物語  
 世界は、新院の立場からの歴史解釈であって、そのことはすなわち、新院  
 が「讐」と捉えていた者達に、自分の報復をする為それに沿った歴史の見  
 方をしていっているということである。
- 注 25 勉誠社文庫『雨月物語』15頁5行
- 注 26 『雨月物語評釈』六三七頁下注
- 注 27 勉誠社文庫『雨月物語』150頁3行

怨み	表記
1	白峯
3	菊花
	浅茅
3	吉備津
	蛇性
1	貧福論

第三章 第一節 「うらみ」の表記の実態と意味

この節では、『雨月物語』の「うらみ」と「恨み」

いる「恨」と「怨」を取りあげたい。この「うらみ」は

登場人物の行動の契機ともなる感情であり、そこに見

だされる表記の差異は、そのまま「うらみ」の厳密な意

味の差異として捉える事が出来よう。そこでまず用例を

一つずつ検証して、「うらみ」の厳密な意味を明らかに

していくものとする。

では「うらみ」の全用例を挙げてみたい。



恨 咤 一 う ら み か な し む  
 恨 悔 一 う ら み く や む  
 注 一 恨 、 悔 也 。 五 、 も と る 、 恨 。  
 四 、 盡 殺 之 。 荀 子 、 成 相 一 不 知 戒 、 後 必 有 恨  
 而 盡 殺 之 。 至 今 大 恨 一 。 注 一 師 古 日 、 恨 、 悔 也 。  
 る 。 漢 書 、 李 廣 傳 一 廣 日 、 羌 降 者 八 百 餘 人 、 吾 詐  
 かな し む 。 ハ 、 殘 念 に 思 ふ 。 二 、 う ら み 。 三 、 く い  
 む 一 史 記 一 知 愧 公 子 恨 愧 之 復 返 也 。 イ 、 い か り 、 に く  
 極 也 、 本 作 一 說 文 一 愧 、 怨 也 。 「 正 字 通 一 恨 、 怨  
 恨 一 一 、 う ら む 、 も と に 作 る 。 「 正 字 通 一 恨 、 怨  
 怨 讐 一 う ら ん で あ だ と す る 。 又 、 其 の 情  
 怨 怒 一 う ら み い か る 。 又 、  
 ② う ら む 一 の ① ① あ だ 、 か た き 。 「 集 韻 一 怨 、 讎 也 。  
 れ る 。 二 、



□  
時

①心の傷手や満たされないものに拘泥する。自分  
 分が傷手を受けたと思ふ相手に、不満な気持ち、悔し  
 い気持ち、憤りの気持ちなどを持つ。一時的ではなく、  
 持続的な気持ちにいう。②①のような心中を外へ漏らす。不満の意を漏らす。  
 相手にその意を告げる場合にも自分一人で慨嘆する。  
 場合にもいう。③①の心をそのままにせず、思いを  
 晴らそうとする。③①の心をそのままにせず、思いを  
 代別国語大辞典『室町時代  
 うら・む「怨む・恨む」①他から加えられた言動を、  
 不当なものとして憤りながらも晴らすことができない。  
 いで、その人に対して心中に不平・不満の情を抱く。  
 ②人間の力の及ばない事態で、自分の思いどおりにな  
 ならないことに対して、不満を感じ、歎かわしく思  
 う。③憤りや口惜しさを口に出して言う。④恨みを  
 おさえきれないで、報復の行動をとる。

『時代別国語大辞典』上代  
 うらむ「怨・恨」うらむ。  
 心（ウラ）が活用した語であ  
 る。この意義を踏まえて、個  
 々の用例を見ていきたい  
 のだが、これでは「恨み」と  
 「怨み」の使い分けの基準  
 を、それぞれの作品の解釈か  
 ら求めることになり、そこ  
 月物語』を通しての基準が明  
 確になりにくい。そこであ  
 らかじめ仮説をたておきたい。  
 まず「怨み」はこの「怨み」  
 間に生じる。この「怨み」は、  
 相手が自分に對して害を  
 なす行為をしたときや、権利が  
 侵害された時、不当な行  
 為を受けたときなどに生じる。  
 単に害を受けたかという  
 だけで、すぐにはそれが「怨  
 み」へと變化するのかもしれない。  
 と、そうではない。それらの行  
 為に對して憤りつつも、  
 その怒り、不満を訴える方法  
 がなくなっていくのである。  
 ことが出来ない時に「怨み」と  
 なっていくのである。

も ば が み 生 の ん え な へ 向 も  
 あ そ 、 相 ー じ 行 だ ら ー 対 一 け の 従  
 り の ー 手 に る 為 り れ う 照 方 け と っ  
 う た 恨 の 転 。 、 思 す た ら 的 か の れ 定 て  
 る め み 行 じ つ ま い こ 言 み な う ー る 義 こ  
 の 、 ー は ー 為 て ま い と 動 ー 使 い 恨 方 で の  
 で ー 恨 ー によ いく 報 対 し て あ る な も 的 には 、 自 分 に 対 し て 、 他 加  
 あ る み ー の 行 引 き 起 こ さ れ る も の だ ろ う か 。 つ ま り ー 怨 み ー は 多 く 特 定 の 個 人 に 対 し て 生 じ る  
 。 ま た 、 自 己 を そ の 様 な 状 況 に 追 い







が生まれ、帝の地位に即いており、政治的にも  
 特に失敗をしたわけではない。ただ、父である鳥羽院が  
 愛妃美福門院に男子が生まれて、三か月も経たぬうちに  
 その子を皇太子にさせ、わずか三才で帝にしまつた  
 あたりから、父子の間が不仲になつてしまつたであ  
 る。(この事は『保元物語』に詳しく述べられている。  
 ここで注目したいのは、近衛帝が即位したこと、「怨  
 んでいるのでは、美福門院の差がねであること」を「怨  
 んでいる。美福門院より、美福門院に対して怨みが  
 存在している、と思われ。崇徳院の人物設定をみると、  
 儒教の「孝」に重きを置いて、崇徳院の人物設定をみると、  
 常に不服であり、その事が原因で父子関係が悪化したの  
 であつても、存命中は鳥羽院の命に従つて、三才の近衛  
 帝に帝の地位を渡し、更には、納得のいかない四宮への

皇位継承をも、容認せざるを得なかつたのである。そして、  
 「<sup>(注5)</sup>天<sup>あ</sup>が下の事を後<sup>うしろ</sup>宮<sup>みやう</sup>にかたひ玉ふは父帝<sup>みかど</sup>の罪なり」と  
 讐<sup>うそ</sup>はつきりと父の罪を語りつつも、崇徳院の「怨み」と  
 全ては父鳥羽院の死後、保元の乱として反乱をおこし  
 たことに端を發している。しかも、この段階では崇徳院  
 の側に保元の乱を引き起こしたことも、自体への後悔が見受  
 けられない事も確認できるところでなく、美福門院方に向けられ  
 「怨み」は、躊躇するところなく「怨み」は、美福門院へとむけられ  
 ているのである。この「怨み」は、美福門院というこ  
 れ、その内容は、正当な権利の不条理な剥奪というこ  
 が言えるのである。平仮名表記なので漢字表記による  
 細かい意味の違いを指摘するわけではない。ただ、こ  
 で用いられたい「うらみ」は、平仮名表記による  
 のなのか、それともその奏上を受け入れた後白河に向か

うものなのか、両者が対象なのか、曖昧であるし、う  
 ら「が」「怨み」のようにはつきりと特定の人物へとひ  
 たすら向けられるものに変化するの、「恨み」という  
 自らをその状況に置いた全ての要因に対してうらみの氣  
 持を抱くものなのか、決定されていないのである。その  
 為、ここでは漢字を用いず、あえて平仮名を用いたと  
 考えられよう。三の用例に移りたい。一では「怨み」であつたものが  
 「恨み」に変化した。この部分には崇徳院の「魔王」への變化の契  
 機が後白河帝の決定にある事を明らかにし、この變化の契  
 至るまでの「恨み」を晴らすのだと言つてゐる。だが、  
 崇徳院は保元の乱を引き起した事を一度は後悔してゐ  
 る。そのことは「悪心懺悔」の爲の寫経であつたことを  
 述べている事からも理解できると後白河帝の態度に  
 対して語つていくうちに、はつきりと後白河帝の態度に

魔 王 ま 崇 こ は に が も あ を 慮 徳 に 対  
 的 も っ 徳 と 不 は 始 後 し だ 有 は 院 対  
 な 出 た 院 で い の ま っ 白 も が っ 院 し  
 も え 家 方 復 の っ 河 こ こ だ が っ と  
 の な な が 讐 は の て の こ こ だ が っ の  
 に い さ が 再 讐 で の の 歴 用 こ で 注  
 変 の され、 び 果 は 史 に い 意  
 化 であ、 権 た 不 向 け ら すべき  
 す 皇 力 だ ろ う か 変 え せ る の が  
 る 位 取 の である。 する 漢  
 こ 継 戻 あり。 たり 後 魔 王 の 力 必 要  
 と 承 が 語 こと 現 白 河 帝 の 命 奪  
 で 崇 崇 徳 徳 筋 に 戻 事 決 し  
 う 徳 徳 院 筋 に 戻 事 決 し  
 ら 院 筋 に 戻 事 決 し  
 み 院 筋 に 戻 事 決 し  
 「 意 識 的 に 自 分 が

るのである。ここでいう「恨み」は、自分が今置かれて  
 いるこの状況を、対象が特定の個人ではなく、  
 後悔を含み、且対象が特定の個人ではなく、それらを含  
 めた世の中といった広範囲なものである。こ  
 が平入道であつて、その対象は後白河法皇な  
 の「うらみ」は、「白峯」の中であまり詳しく語られて  
 いない。従つて仮名表記とされてゐるのではないだ  
 か。

こので、「白峯」の原拠である『保元物語』の「恨み」  
 の表記を押さえておきたい。引用しておく。

「後白河院御即位の事」  
 新院・重仁親王の御しゆそふかきゆへに、近衛院か  
 くれさせ給ひぬとさゝやき申かたもありければ、美  
 福門院、その御恨みふかくして、法皇にはとかく(注)

院にまず、西行「いか計かは都も恋しく思召れ、御怨念も留ま  
 改められてゐる。このことから次のごとが考えられる。  
 まず「白峯」では、新院が近衛帝を呪咀したなどという  
 記述はなされてゐない。従つて、美福門院が新院に対し  
 て「恨み」を生じたという『保元物語』の言葉をそのま  
 用ゐるには、根拠がなさすぎ、適切ではないのである。  
 「新院御謀反思し召し立たるる事」  
 あまつさへ又数のほかの四宮に超越せられ、遺恨の  
 いたり、謝するところをしらず。<sup>(注リ)</sup>  
 「新院御謀反並びに調伏の事付けたり内府意見の事」  
 まぢかくは平城の天子、嵯峨の天皇に位をこされ、  
 御うらみのあまりにむほんをおこし給ひしが<sup>(注リ)</sup>  
 「新院御経沈めの事付けたり崩御の事」  
 西行「いか計かは都も恋しく思召れ、御怨念も留ま  
 らせ御坐けん。<sup>(注リ)</sup>  
 院にまず、第一の例では、『保元物語』では美福門院の新



第四例は新院の「怨念」が白峯の地に留まっていると  
 を企てるという共通性が見受けられる。うらみが謀反  
 帝位の順当な継承からは直接「白峯」とは関連はないが、こ  
 こは表記という点では直接「白峯」とは関連はないが、こ  
 第三例は平城帝の謀反のことを語った部分である。こ  
 の獨自性の一つといえよう。  
 はここで「怨み」を用いている。このことも「雨月物語」  
 いる。「保元物語」では「遺恨」となっているが、秋成  
 こでは新院の、後白河帝即位に關しての思いが示されて  
 門院の新院に對する感情表現であつたのとは異なり、こ  
 第二の例であるが、「保元物語」の先程の例が、美福  
 語を変えて用いたといふことが言えないだらうか。  
 物語構造がなされるのであるから、秋成が意識的にこの  
 権利の侵害により「怨み」を生じるといふ「白峯」の  
 出口によつて「代を奪われ」てしまひ、當然得るはずの  
 そして、新院にとつてみれば、思いがけぬ美福門院の差

するが、表記の差異については基本的に同じ基準の下でな  
 るが、「白峯」との差異は動詞として用いられている事であ  
 る。もし来るには言なからんものを(注1)  
 三、伯氏ちし赤穴あかが約ちやくにたがふを怨うらるとならば明日あすなん  
 ば。経久けいく怨うらめる色いろありて。丹治たんじに令めいし。(注2)  
 二、賢弟が菊花の約ちやくあることをかたりて去さんとすれ  
 とも何をか怨うらべき。(注10)  
 一、帰かへりくる信まことだにあらば。空くうは時雨ときりにうつりゆく  
 は三例の「菊花の約」の用例を考へたい。「菊花の約」で  
 が推測されるのである。がなされてゐる可能性が高い事  
 は独自の基準で使い分けがなされてゐる可能性が高い事  
 が取捨選択された結果であらう。  
 なされるが、「雨月物語」の「白峯」にはその様な表記は  
 されたい。これも秋成が「白峯」を翻案する上で

一と三は共に左門が、赤穴宗右衛門が帰ってくる約を違  
 えた場合に「怨み」を持つ事を危惧しての左門の母の言  
 葉である。行為の主体である左門の心情表現で用いられ  
 ているのではないけれども「怨む」対象は明らかに赤  
 穴宗右衛門個人であることが言えるのである。この  
 一「怨む」は発露の方向性がはっきりしている、とい  
 使用の基準が存在している可能性を示しているのである。  
 衛門が自らの意に添わないことと抱いた感情表現である。  
 此の場合、方向の明示という点において、「怨む」の用  
 字がなされていくといえるのである。  
 一では「菊花の約束」の原拠「范巨卿雞黍死生交」では  
 一うらみ」は認められるのだからか。  
 風吹落月夜三更千里幽魂叙旧盟

只恨世人多負約、故將一死見平生。  
 每日蚤起程、恨不得身兩翼。  
 この二例の「恨」が認められるが、「怨」の用字は認められなかつた。第一の例は「世の人の約に背くことの多い事を恨む」という漢詩の一部であるし、第二例は旅の途上、日に夜を継いで急ぐのに、羽が生えて一気に飛んでいけない事を嘆く様に用いられてゐるのであつて、  
 「菊花の約」のよに母の言葉の中に張劭が范式を「怨む」ような記述はないのである。つまり張劭にあたる左門が范式にあたる宗右衛門を「うらむ」という発想は、  
 「菊花の約」独得のものということになり、ここにおいて「怨」の用字が秋成によつて意識的になされてゐたことを考えることが可能になる。  
 そして、左門が宗右衛門を「怨む」可能性の示唆は、宗右衛門に対して約束の厳守を、左門が求める権利を有してゐる事を、端的に示してはいないだらうか。約束と

いう行為の主体者は宗右衛門であり、左門は其の行為の  
 受動者にすぎない。いや、左門も『待つ』行為の中には  
 菊と酒等を準備する、というものを含んでいるが、やは  
 り再会が約束の主体であるからには、左門は受動的立場  
 でしかない。その行為の不履行が「うらみ」に結びつく  
 という構図は、すぐ次に置かれた「浅茅が宿」に繼承さ  
 れていると思われる。

では次に「浅茅が宿」の「うらみ」の用例を見てみた  
 い。再会の約束「菊花の約」と共に大きな主  
 題でもある「浅茅が宿」では、「菊花の約」と異なり、  
 「怨み」ではなく「恨み」が用いられている。そこでこ  
 こでは「浅茅が宿」の「恨み」を確認したい。

一、秋にもなりしかど風の便りもあらねば。世々も  
 に憑<sup>たの</sup>みなき人心かなと。恨<sup>うら</sup>みかなしみおもひくづお  
 れて(注13)

二、狐<sup>きつね</sup>ふくろうを友として今日までは過しぬ。今は長

三、き恨みもはればれとなりぬる事の喜しく侍り。(注14)  
 三、逢を待間に恋死なんは人しらぬ恨みなるべしと。  
 四、必烈婦の魂の来り給ひて。旧しき恨みを聞え玉ふ  
 なるべし。(注16)  
 この対象は、秋の帰宅の約束を違えた夫、勝四郎のみに向  
 けられてゐるのだからか。「菊花の約束」では、約束をし  
 た赤穴宗右衛門に左門の怨みは向けられるものであつた。  
 「浅茅が宿」も同様に、約束が重要なモチーフとして取  
 りあげられており、待つ身の宮木が「うらみ」を生じて  
 いる。だが「菊花の約束」では約束を守れなかつた宗右衛  
 門に向けられていたものでは「浅茅が宿」では異なつてい  
 るように思われる。では一例ずつ確認していきたい。  
 一の例では以下のようには口釈がなされてゐる。世の  
 秋になつたが、夫からは風の便りもないので、

中の動きと同じように、頼りないのは人の心である  
 と、(夫の薄情を)恨み、(わが身を)悲しみ、が  
 っくりと気落ちして、(泣く)  
 この宮木は、夫の薄情を「うらん」ではいるもの  
 の、こうなった原因は夫の薄情だけにあるのではなく、  
 「戦乱の世」にもある事が明示されている。この宮木の  
 うらみは、現在自分が置かれている状況において発露し  
 ているとは言えないだろうか。夫勝四郎はそういった状  
 況を作り出した第一要因ではあるが、宮木のうらみはそ  
 の勝四郎だけを責めるものではないのである。ここに表  
 された「恨み」は、その様な状況に陥ってしまつて、抜  
 けだそうにも手だての無い自分に對する自己反省と、そ  
 れを招いた他者への批判とが絡んだ複雑な感情であると  
 考えられるのである。  
 二と三の用例であるが、ここでは宮木の死は伏せられ  
 ており、ただ再会出来た事で「恨み」が晴れたことを述

べてゐるのである。そして「逢を待間に恋死」ぬことは  
 相手に自分の心がわかつてもらえないという事で、それ  
 が自分の「恨み」であると言つてゐるのである。  
 だが實際は宮木は既に死んでいて、「恨み」のみが残  
 され、そうであるからこそ宮木は死霊となつても勝四郎  
 の帰りを待ち続けていたのである。だが、ここでこのう  
 らみが勝四郎だけに集中してゐるのだとすれば、宮木の  
 霊は「怨み」を晴らす為に報復手段を講じたかもしれな  
 い。しかしここで語られた「恨み」は、まず第一に夫の  
 薄情さ、そして戦乱の世の中、待ち続けた日々、そうす  
 るしかなかつた自分、待ち続けたのだという事を勝四郎  
 が知らないままに、自分が命をかけてまで守り抜いた約  
 束が風化してしまふことなどを訴えてゐるのである。  
 四の例はどうであらうか。ここでは勝四郎の留守の間  
 の事が、漆間の翁によつて初めて明らかにされてゐる。  
 この宮木の「恨み」は、先述と同じ内容である。



へ 自 ひ す り あ ん そ 乱 貞 の て 続 し は こ  
 回 分 た と る 、 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 帰 の の す そ の 行 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 し と ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 て っ 自 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 ま 分 の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 う ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 こ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 と ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 も ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 起 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 き ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 う ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 る ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 の ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 で ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 あ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 る ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 。 ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 だ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 が ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 そ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 れ ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー  
 は ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー



磯良は宮木と異なり「うらむ」対象が正太郎に限られて  
 いる。それとて、磯良は妻としても嫁としても常  
 に望ましい人物であつて、正太郎の軽率な行為と、手酷  
 い裏切りを受ける起因など彼女にはなかつたのである。  
 本来受けるべき夫からの愛情を、袖という遊女に奪われ、  
 猶「信」を尽くしたにも関わらず、正太郎はさらに磯良  
 を軽んじ、磯良から去つてしまふのである。その怒りと  
 悔しさは「生き霊」となつて袖を取り殺す程のものであ  
 った。だがここで述べたい事は感情の強さではなく、そ  
 の方向である。袖の死によつても正太郎は磯良のもとへ  
 戻つてくるわけではなかつた。むしろ、袖の死に磯良を  
 想起し、ますます故郷を遠く感じさせたのである。そし  
 てその事がさらに磯良の「怨み」を深め、「怨み」はひ  
 たすら正太郎へと向けられるのである。従つてここでの  
 うらみは「恨み」ではなく「怨み」が用いられてしかる  
 べきである。

つまり、この「怨み」は、相手の行為に主眼がおかれ、その行為をなした人物に「怨み」の感情の方向が向けられていく。特定の個人に対しての「うらみ」であるといえよう。

引き続き「蛇性の姪」の「うらみ」をあげていく。

一、只あひあふ事の遅<sup>おそ</sup>きの「うらみ」をあげる。(注21)

二、都の人も見ぬを恨<sup>うら</sup>みに聞え侍るを。(注22)

三、強<sup>あやう</sup>に遠ざけ玉はんにほ。恨<sup>うら</sup>み報<sup>む</sup>ひなん。(注23)

紀路<sup>きろ</sup>の山々さばかり高くとも。君が血をもて峯より

谷に灌<sup>くわ</sup>ぎくださん。(注24)

一はようやく豊雄と真女児が夫婦となった時に用いられており、この場合再会の日が遅かったことを残念がる様を描写していることから、特定方向（個人）に向けられた「怨み」ではなく「恨み」が使われている。二の「恨み」の主体は「都の人」という不特定の集団であつて、意味的にも「見ないのは残念だ」という方向

の曖昧な「うらみ」である為にこちらの表記を選んだの  
 であらう。三は一見「怨み」が用いられた方が妥当に見られる。  
 特にここでは豊雄に對し真女児が「夫婦の盟約」に背い  
 たことを責めているのであるから、対象は豊雄という事  
 になる。だが「恨み」の表記が用いられているといふ事  
 は、どのよう解釈すればよいのであらうか。仮説では  
 「恨み」は自らの行為に對しての相手のしうちによつて  
 生じ、相手の行為自体というより、自分の行為に主眼が  
 置かれてゐるとした。豊雄を慕う気持ち「を豊雄がわか  
 つてくれないこと、わざわざ石榴市にまで追いかけて、夫  
 婦になつた自分を忘れ、自分を遠ざけようとすることに  
 「恨み」を生じているのである。もしもこの「恨み」  
 を自己の悔恨と解釈するならば、自らの「蛇性」故に豊  
 雄が受け入れてくれないとも言ふ事が可能であるかも知し

れな  
 紀路の山々さばかり高くとも。君が血をもて峯より  
 谷に灌ぎださん。(注25)  
 と、いう表現との不統一感がぬぐえない。この真女兒の  
 「恨み」は「浅茅が宿」の宮木の「恨み」とは異なつて  
 「報い」が相手の「死」によつてあがなわれるのである。  
 このことから、この場合の「恨み」は、自己に向いた後  
 悔という特徴は見いだし難く、自己の行為に対して相手  
 が報いてくれない、そのような報われない自分の気持ち  
 が「恨み」に転じて、いったと考へられるのである。  
 最後に「貧福論」の「うらみ」を見ても、  
 まじはり絶れて。其怨をうつたふる方さへなく。(注26)  
 この場面は「主君には忠実で、父母には孝廉、しかし貧  
 し」といふ人は、兄弟親族から交際を絶たれ、その怒  
 りを訴えていくところもない、といふ部分である。ここ  
 にも「怨み」が用いられて、これは相手の行為、

つまり交際を絶つ、という行為に對して生じたうらみで  
 あり、方向としては、その他者に向かうものであるとい  
 えよう。従つて「恨み」を用いるよりも、こちらの「怨  
 み」が使われたと考へられるのである。「の全用例であ  
 る。以上が『雨月物語』における「うらみ」の全用例であ  
 る。私は今回、仮説として  
 「怨み」は直接相手の行為によつて生じ、「恨み」  
 の方向は特定の個人に向ける。行為の相手は、自己の  
 「恨み」はそれに対して、相手に對しての相手の行為な  
 行爲に主眼がおかれ、それに對しての相手の行為な  
 いし、不認知が「恨み」を生じさせる。従つて「怨  
 み」では見受けられなかつた自己へ向けられていく  
 「恨み」は「定義を仮定してみた。当初は「怨み」は同じだ  
 といふ定義を仮定してみた。この場合生じてくる。同じだ  
 と「恨み」をその対照に位置付け、内と外という「恨  
 が、と  
 「の感情の発露の方向のみによつて區別しようとした

が、それでは「白峯」や「蛇性の姪」で「恨み」を晴ら  
 した。り、報いたりする必然性が無い。確かに、  
 そういった側面は有しているのだが、それだけでは割り  
 切れない。複雑な感情として「恨み」と「恨み」は把握されべきで  
 ある。自己に向かう「恨み」として「恨み」が顕著に現れ  
 ている。この「浅茅が宿」の宮木の「恨み」であると言え  
 よう。この「恨み」と「怨み」の表現で考察を加えたい。  
 述べた。次にその「怨み」の表現が、何によるものなのか  
 かについて考えていきたい。





前節では「怨む」「怨む」と「怨ず」の関連性を有している。そのように定義された「このかにはその「怨む」は何によって」とそのように定義された「このかにはその「怨む」は何によって」とその「為に藤原浩史氏の『漢語サ変動詞「怨ず」の意味」と表現価値「（「国語学研究」第二十八号）を引用した。

## 要旨

「怨ず」は平安和文に出現する漢語サ変動詞である。が、類義の和語動詞との差異は明確とは言えない。その意味は従来「うらむ、うらみ、言う」と考えられてきたが、これは不適当である。ここでは、和語動詞「ウラム」との比較を通して、意味と表現性を考察した結果、「怨ず」の意味は「相手の行為をとがめ、不服を表す」という意味は人間関係を客観的に把握する。そして、この意味は人間関係を客観的に把握する。

ることによつて発現することがわかつた。漢語サ変  
 動詞としての表現価値は、具体的な動作を表すので  
 はなく、それを概括する抽象的な概念を表す点に存  
 することとを述べた。  
 「動作主体の差異」  
 「怨ず」には一人称、二人称が発現していないこと  
 が挙げられる。が「怨ず」のすべての用例は三人称を動作主体として  
 いる。  
 一方、「ウラム」は、和歌に偏る傾向が強いが、一、  
 二人称の動作主体をとることができ。  
 「動作対象」  
 「怨ず」の対象は、常に特定の個人である。  
 ただし、動作主体自身はその中には含まれない。  
 一方、「ウラム」の場合は、特定の個人を対象とする  
 例も多いのであるが、自分自身を対象とするもの、

同じく自分の心などがあり、さらに個人を超えて「世へ男女関係へ」おほやけ」を対象とするものがある。そして人間の範疇を超えて、「仏」「風」なども対象とすることができ。このような例は「怨ず」にはない。

この状況から、「ウラム」は、対象がどのようなものであつても、動作主体が何か不満を抱けば、その心理を表すことができる語であると考えられる。しかし、「怨ず」は動作主体以外の特定個人のみを対象とするので、人間関係に起因する不満・不服だけを表現する語と認められよう。そこには、動作主体の恣意によらない、何等かの条件が存在すると推測される。

「怨ず」の発現条件と動作対象の間には、おたがいの立場

を認め合うような関係がある。(少なくとも動作主  
 体は、そう思っている。)  
 二、動作対象は、動作主体の立場をないがしろにす  
 るような行動をとる。  
 三、動作主体は、動作対象の行動に対して反感を持  
 ち、それを表明する。  
 「怨ず」の意味  
 これらの実際の動作は『名義抄』和訓にある「イ  
 カル、ムツカル、ハラダツ」と類似する例が多いよ  
 うである。「ウラム」のように、心の中に満たされ  
 ない思いを抱いているような例は少なく、行動とし  
 て表に出す場合が多いのである。  
 「怨ず」の動作の特徴は、自分をないがしろにす  
 る行為に対して反発する点にある。その反発は、現  
 象として見ると、怒ったり、不服を述べたり、また

前に示したように、沈黙したり、崇りをなしたり、と多岐に渡る。しかし、それは、「相手の行為をとがめる」ことでは共通する。従って、これが「怨ず」の意味の中核と考えられる。

その自分をないがしろにする行為をした相手をとがめ、ただし、それには、相手が自分の立場を認め、それを尊重してくれ、という期待があることが、前提として必要であろう。

以上は、平安中期の物語に見られるサ変動詞「怨ず」の意味について、論文であるが、これは『源氏物語』や『宇津保物語』といったものに用例があり、『雨月物語』『英草紙』『西山物語』などに「怨ず」の表記は認められない。ここに述べた「怨ず」がそのまま『雨月物語』

の「怨む」になるといえるのかどうか、確認していき  
 い。そうする事によつて、前節で「怨み」は特定の個人  
 を対象とする時のみに用いられる、という説をたてたが、  
 それがないかただ単に秋成の独自の創作ではないと言  
 ではないかと考えるのである。  
 つまり、「怨み」と「恨み」という表現の、その使  
 分けは、秋成が独自に考え、規定したとは考えにくい。  
 だが、その基準はなんらかの形で存在したのではないか、  
 そしてそれは秋成が『雨月物語』を書く上で原拠とした  
 多くの作品の中に見いだせるのではないか、と思われる  
 のである。  
 それがこの「怨ず」であるが、藤原氏の指摘されてい  
 る「怨ず」の発現条件のうち、二と三については、『雨  
 月物語』の「恨み」にも、また『源氏物語』の「うらむ」  
 にも共通しているもので、決定的な差異というのは、一  
 条件であると考えられるのである。

月物語』の「怨み」と共通するものである、まさに『雨  
 具体的に『雨月物語』の「怨み」を、この「怨ず」の  
 発現条件に照らして考えてみたい。  
 まづ「白峯」であるが、  
 美福門院が妬みにさへられて。四の宮の雅仁に代を  
 篡はれしは深き怨にあらざや。(注27)  
 これは新院から美福門院への怨みであるが、両者の関  
 係は親族関係にある。  
 美福門院と新院との関係は、「あた」でも述べたように、  
 鳥羽院の妃と、第一の親王という関係である。しかも新  
 院は近衛帝が即位するまでは、帝位についており、父院  
 の寵妃といえど、新院を全く無視するわけにはいかな  
 いのである。しかも、新院には重仁親王という第一皇子が  
 いることも、またそのことは当然皇位継承の際には考慮



されべきであつたことも押さええておかねばならない。  
 を外して第二条件であるが、皇位継承から新院方  
 でもないのに、帝位を三才の弟宮に譲らざるを得なかつた事  
 だけでも十分「立場をないがしろ」にされてゐるのであ  
 る。それでも父院の命に従ひ、退位したのであつた。  
 ところが、その近衛帝が早世して、次に帝に即けられた  
 のは、予想に違い四宮の雅仁であつた。  
 この決定に美福門院が深く関わつてゐることは、「白  
 峯」にも記述があるが、原拠の『保元物語』にも明らか  
 である。ただ「白峯」の大きな差異は、『保元物語』  
 では美福門院が新院に対し、近衛帝の呪咀を疑つてゐる  
 点である。つまり近衛帝が夭折したのは、帝位を奪われ  
 た新院が、近衛帝を呪い殺した為であるといふのである。  
 だが、「白峯」ではそういった記述は認められず、ただ

美福門院の妬みによるとして、新院に対する美福門院、  
 鳥羽院の行為がなされたように、物語構造となっている。  
 こうすることによって、「怨ず」の第二条件が読者には  
 より際だつて明示され、第三条件である反感と不満の表明  
 は『雨月物語』では、単に不満の表明ではすまされない。  
 「白峯」の新院の場合、「保元の乱」という形で表され、  
 ひいてはその後の大乱へと新院の「うらみ」を引き起こ  
 す契機となつて物語を展開させるのである。  
 「白峯」の「怨み」はこの一例に限られる。では「恨  
 み」と表記されたものは、この「怨ず」の条件と一致し  
 ないものであろうか。それに、「保元の乱」の謀反の罪で讃岐  
 に遠流になつていた。既に「保元の乱」の謀反の罪で讃岐  
 を犯した新院と、後白河帝の關係は以前とは異なつて、  
 お互いに認めあう立場とはいえない。それでも新院は帝

の親族は罪が減じられる、という令を求めている。だが、  
 その減罪の処置がなされないことは、後白河帝方からは、  
 既に新院という立場を認めていないとれる。  
 とこの時点で「怨ず」の発現の第一条件が成立しないこ  
 とが確認される。  
 次に「菊花の約」の「怨み」であるが、ここでは三例  
 共この表現で統一されている。ただ注意したい事は、三  
 例のうち二例は、「怨み」の行為が伴っていない。どう  
 いうことかという段階で、「怨み」の感情が他者によつて想  
 起されるところという段階で、当事者の感情は「怨み」に至ら  
 ずに物語は別の方向へ展開していくからである。  
 当事者とは左門であり、「怨み」が向けられる相手は  
 赤穴宗右衛門であった。そして左門の「怨み」を想起す  
 るのは左門の母である。  
 では「怨ず」の発現条件に照らしてみたい。まず  
 赤穴宗右衛門と左門の關係は「義兄弟」となっている。

これは「怨ず」の第一条件、（男女関係であれば、夫婦  
 或はそれに準ずる固定的な関係、ついで親子、兄弟、姻  
 戚関係）に相当する。約束の不履行という行動がそれに当  
 たる。再会の期日を守れない事は、母にしてみれば仕方  
 のないことであつた。だが、左門にとつて約束は赤穴宗  
 右衛門の信義に關わるものであつた。従つて母が左門を  
 諫める場面では、左門の感情を「怨む」と表現してゐる  
 のである。しかし、左門の感情を「怨む」と表現してゐる  
 だし、物語の展開で約束は成就されるのであるから、左  
 門の「怨み」は発露されないものである。

経久の「怨み」であるが、これは赤穴宗右衛門に対する  
 武士であつた。それが密使として近江に出かけてゐる間  
 に、城主の尼子経久が城を乗つたのに、赤穴宗右衛門の  
 佐々木氏綱は出雲の盟主であつたのに、赤穴宗右衛門の

勸める。尼子経久責めをせず、逆に近江に留めようとした。  
 赤穴が出雲国に回歸しようとする行為は、佐々木を主君  
 とはしないという意志でもあったのである。左門に別れ  
 ての赤穴宗右衛門は、従兄弟の丹治の説得で経久に対面  
 する。この段階で、赤穴宗右衛門が経久を君主たるに相  
 応しいと判断すれば、主従関係が結ばれるところである。  
 う。実際、  
 國人<sup>くにじん</sup>大<sup>だい</sup>かた経久が勢<sup>いき</sup>ひに服<sup>ふく</sup>て。塩治<sup>しんぢ</sup>の恩<sup>おん</sup>を顧<sup>かへり</sup>みるもの  
 なし。<sup>(注28)</sup>  
 と、  
 主君としての状況の中で、経久が赤穴宗右衛門も丹治と同様  
 り、ここでも第一条件はなんとか満たされるところである。つま  
 り、その宗右衛門が「菊花の約」を理由に富田城を出よう  
 とした、その行為を経久は怨み、幽閉という手段を取っ  
 たのである。  
 次の「吉備津の釜」の磯良と正太郎の關係に移りたい。

冒頭部の死、<sup>い</sup>て<sup>ず</sup>鱗<sup>うろこ</sup>となり。或は霹靂<sup>はたらき</sup>を震<sup>ふる</sup>ふて怨<sup>うらみ</sup>を報<sup>むか</sup>ふ類<sup>たぐひ</sup>は。<sup>(注29)</sup>

の主語は嫉妬深い女である。従つて「怨ず」の発現条件の一に  
 とは、その夫である。従つて「怨ず」の発現条件の一に  
 該当するといえよう。  
 該第二例であるが、ここは磯良が正太郎の浮気によつて  
 家を空けて帰つてこないことを「怨む」のであるが、こ  
 こまでの間、作者は磯良がいかに嫁として、妻として非  
 のうちどころが無いかを述べている。この例も「怨ず」  
 の発現条件が満たされて「性<sup>むね</sup>をはかりて。心を尽<sup>つく</sup>して仕<sup>つか</sup>へ<sup>(注30)</sup>て  
 磯良は、夫に對し「性<sup>むね</sup>をはかりて。心を尽<sup>つく</sup>して仕<sup>つか</sup>へ<sup>(注30)</sup>て  
 いたからである。  
 「怨ず」の発現条件の二に關してはどうであらうか。  
 これは正太郎の浮気であるといえよう。その正太郎の行  
 為に磯良は反感を持つ第三条件の「だが、その表明は  
 正太郎に對して、舅姑の忿りや自分の気持ちに訴えたり、

夫の浮気な心を直接訴えたりしてなされている。  
 第三例も第一条件は第二例と同様に満たされている。  
 磯良の「怨み」は正太郎の死によつてしか鎮めることが  
 出来ないものであるが、「怨ず」の条件は全て揃っている  
 と判断される。  
 最後「貧福論」の「怨み」であるが、これも第一条  
 件は、「怨む」動作主体と動作対象は、親戚関係にある  
 ことから、満たされていといえる。  
 以上で全ての「怨み」の発現条件の確認を終えるが、  
 いずれも漢語サ変動詞「怨ず」の発現条件との一致が認  
 められる。このことから『雨月物語』での「怨み」と  
 「恨み」の使い分けの基準の一つが、「怨ず」の発現条  
 件と重なる事がいえよう。  
 つまり平安中期には「怨ず」と「うらむ」(漢字表記  
 を含む)で使い分けをされていた語が、時代が下るにつ  
 れて、漢語表現であつた「怨ず」が消滅し、「うらみ」

の和語に吸収されていった。そしてそれを秋成が再び  
 漢字表記の差異という区別によつて細かい意味の違い  
 を表現する為の手法として用いたと考へられるのである。  
 ったのは、秋成がそのまゝ「怨ず」という漢語を用いなか  
 漢語と和語の融合（振り漢字のようない手法）を秋成も又  
 意識していたからではな「いだらうか。」「怨・恨」  
 の使い分けがなされてお「り、その基準が「怨ず」に求め  
 られるとすれば、このことは秋成独自の方法とは言えな  
 い。  
 ところで『英草紙』『西山物語』における「うらみ」の  
 表現を押さえ、この「怨み」と「恨み」の違いが、  
 雨月物語『英草紙』の「怨みのか確認しておきたい。」  
 一まず『英草紙』の「志怠り給ひ、馬場殿を建てて逸遊度





楠 <sup>い</sup> 三 彈 <sup>だん</sup> 人 正 <sup>しょう</sup> の 左 <sup>ひだり</sup> 妓 <sup>ぎ</sup> 衛 <sup>ゑ</sup> 女 <sup>にょ</sup> 門 <sup>もん</sup> 趣 <sup>きう</sup> 不 <sup>ふ</sup> 戦 <sup>せん</sup> しに てし 敵 <sup>てき</sup> を を各 <sup>かく</sup> 制 <sup>せい</sup> 名 <sup>な</sup> する成 <sup>な</sup> 話 <sup>わ</sup> す 話 <sup>わ</sup>	紀 <sup>き</sup> 任 <sup>にん</sup> 重 <sup>じゅう</sup> 第 <sup>だい</sup> 四 <sup>し</sup> 陰 <sup>いん</sup> 司 <sup>し</sup> 卷 <sup>くわん</sup> に 至 <sup>いた</sup> り 滞 <sup>たい</sup> 獄 <sup>ごく</sup> を 断 <sup>た</sup> く る 話 <sup>わ</sup>	黒 <sup>くろ</sup> 豊 <sup>とよ</sup> 川 <sup>がは</sup> 原 <sup>はら</sup> 源 <sup>げん</sup> 兼 <sup>けん</sup> 第 <sup>だい</sup> 太 <sup>たい</sup> 秋 <sup>あき</sup> 主 <sup>しゅ</sup> 音 <sup>おん</sup> 卷 <sup>くわん</sup> 山 <sup>やま</sup> を に聴 <sup>き</sup> 入 <sup>い</sup> ッ て 国 <sup>くに</sup> の 盛 <sup>さか</sup> 衰 <sup>し</sup> を 知 <sup>し</sup> る 話 <sup>わ</sup>	馬 <sup>うま</sup> 後 <sup>ご</sup> 場 <sup>ば</sup> 醒 <sup>せい</sup> 求 <sup>もと</sup> 酬 <sup>ちゆう</sup> 第 <sup>だい</sup> 馬 <sup>うま</sup> の 妻 <sup>さい</sup> 帝 <sup>てい</sup> 卷 <sup>くわん</sup> を三 沈 <sup>しん</sup> た め び 藤 <sup>ふじ</sup> 樋 <sup>ひ</sup> 房 <sup>ぶどう</sup> 口 <sup>くち</sup> の が諫 <sup>いん</sup> 媚 <sup>めい</sup> を と折 <sup>し</sup> 成 <sup>なり</sup> く る話 <sup>わ</sup>	に そ の 前 に 、 各 卷 の 表 題 を 挙 げ て お く 。 に て い る の で 、 な さ れ て い る の か を 考 え たい 。 『英草紙』も『雨月物語』同様五卷九編の形式をとつて、編ごとく 使 い 分 け が な さ れ て い る の か を 考 え たい 。 『英草紙』も『雨月物語』同様五卷九編の形式をとつて、編ごとく わ れ て い る 。 
⑦ ⑥	⑤	④ ③	② ①	

冤 魂	冤	恨 む	怨 む	
			二	①
		四		②
		一		③
				④
二	二	七	一	⑤
		二	一	⑥
				⑦
				⑧
				⑨
二	二	十 四	四	合 計

表  
に 高 白  
す 武 水  
る 蔵 翁 第  
際 守 が 五  
は 婢 売 卷  
表 を ト  
題 出 直  
の だ 言  
下 し 奇  
の て を  
番 媒 示  
号 を す  
を な 話  
用 す  
い 話  
る  
も  
の  
と  
す  
る  
。

⑨ ⑧

右の三例であるが、いずれも右の訓は「ゑんこん」とあり、振り仮名が漢字の左右に付けられているものが三例ある。

「冤魂」(ゑんこん)の「ゑん」の表現は多様である。

「怨恨」(ゑんこん)の「ゑん」の表現は多様である。

「冤屈」(ゑんこん)の「ゑん」の表現は多様である。

かな	冤屈	怨恨	冤恨
	一		一
一			
二			
一		一	
四	一	一	一

されており、左の和訓が意味を示している。  
 今回は『雨月物語』の「怨む」と「恨む」を主に考察  
 している。こので、用例を挙げるに止めておくが、第三番目  
 に「怨恨」として両方の漢字を重ねて用いていることに  
 注意しておきたい。このことから「怨恨」が混同されつ  
 つあったのではないかと思われ、のである。が混同されつ  
 確認して「恨み」十四例のうちいくつかを具体的に挙げて  
 一 お幸と馬場求馬妻を門風の悪きを恨み、とにかく一  
 二 日も早く(注35)免じて、恨を散ずべし。「樋口が妻室  
 三 賢罵る本心、夫婦を卑賤を恨み、あらねば(注36)失ふに  
 豊原兼秋音を聴きて、国盛衰を知る話(注37)にいたる。

賢弟に相見する事、恨むらくは甚だ遅くして、別るる  
 事何ぞ太早きや、<sup>(注38)</sup>  
 遂に文治五年四月晦日、衣獄を断くる話⑤  
 百年以来此の恨を報ぜず、衣河館に自害して  
 一筋なる女心に深く恨み憤りて<sup>(注40)</sup>  
 この「恨み」に關しては「紀任重陰司に至り滞獄を断  
 が、六種類のもの「うらみ」と、さらに「怨氣」  
 のいき「怨詞」<sup>(一)</sup>「うらみ」と、かなり困難であると考え、  
 使い分けの基準を求め、事は、かなり困難であると考え、  
 なられる。た、冤罪の「冤」と他の「恨」とは区別が  
 なされてゐる事、指摘しておきたい。また「怨」の方  
 怒り、憤りの感情が強く感じられる。また「恨」の使  
 だ、<sup>(一)</sup>「雨月物語」で指摘したような「怨」「恨」の使  
 分けの基準は当てはまらないと言えらる。『英草紙』で

は表現の多様性が主に感じられたが、秋成はそれをその  
 まま活かすことはせず、むしろ二種類の「うらみ」だけ  
 を用いる事で、表現における厳密な意味の差異を求めた  
 のではないだろうか。  
 逆にいえば、『英草紙』は「怨ず」の使用条件の下に  
 「怨む」の字を使つてはいないという事が明らかである  
 と判断し得るのである。  
 では次に『西山物語』の「うらみ」をみておこう。こ  
 こでは「うらみ」の平仮名が六例と漢字の「恨み」が一  
 例用いられている。  
 太刀あはせにもやさしみを得、はたうらみのひとた  
 ちをもむくひざりしが、我(われ)にしてはあねが恨みを、  
 八郎にむくひずばあらじ(ぢや)  
 この『西山物語』では「怨」の漢字自体の用例が認め  
 られないので、「怨ず」が使用基準であるかどうか、ま  
 た「怨ず」が「怨む」に活かされているのかについて

考 察 上 が、雨月物語の先行作品であり、秋成が少な  
 くとも『雨月物語』執筆の際に既に読んでいたと考え  
 られる作品においての『漢字表記に関する使用  
 い分けの有無の確認であるが、結論としてはこの二作  
 品においては、確か『漢字表記での厳密な使い分  
 けは見いだせなかつた。』よつてこの事は秋成独自の物  
 語創作上の細かな配慮によつてなされた表現法である  
 と言へるのではないだらうか。』  
 終えたが、ここでは『雨月物語』の「怨み」が平安中  
 期に多く用いられた「怨み」の意味内容を継承して  
 いる。と、先行作品に既にそのように細かい配慮が表現  
 されているのかを『英草紙』『西山物語』の用例に  
 当る事で確認した。次の節では、「恨み」に焦点を絞つ



て、  
「浅茅が宿」を題材としてその性質を詳しく考察し  
て、  
きたい。

茅が宿「との関連を確認しつつ、『恨み』の有無と性質  
 に関して詳しく見ていくこととしたい。  
 ると思われ。そこでこの節では『浅茅が宿』の『恨み』が  
 あげようとする。「浅茅が宿」の報復の無い「恨み」が  
 性の姪「のよう」に「報復」する「恨み」とこれからとり  
 対する悔恨という性質が混在しているように「白峯」や「蛇  
 くれないことに対して生じるという性質と自らの行為に  
 も当たってはまると言えよう。  
 ることについては、『雨月物語』のどの用例に照らして  
 ひたすらその方向へ向けて発せられる感情を表現してい  
 事にについて対象が特定の人物にのみ限られるものではな  
 異なり、対象が特定の人物にのみ限られるものではないは  
 「浅茅が宿」の「吉備津の釜」のそれとは  
 第三節「浅茅が宿」の「恨み」について

戦乱の有無	その間の妻	夫の首尾	妻の判断	別離の契機	主人公	作品名	きたい。	るが、作品構造について対比させその事を再確認してお	ることは既に『雨月物語評釈』を始めとして言われてい	おく。これは『剪燈新話』の「愛卿伝」を典拠としてい	の差異について考察していくこととしたい。
有り	姑を病で失う	手蔓を失う	吏部尚書が病で免職	に勧める	姑の心配は無用と夫	吏部尚書のとりたて	もと名妓のち趙家の妻	羅愛愛	「愛卿伝」 <sup>(注42)</sup>	「浅茅が宿」	
有り		山賊に襲われる	交易は成功するが	る	やめさせようとす	家の再興	勝四郎の妻	宮木			

その確認をする。

転生を語る。

十日後羅愛愛が現れ、

靈を呼ぼうとする。

留守の間の様子を知る

もとの老僕に会い

母も妻も行方知れず

三年後

自殺

薄絹

望 万 戸 に よ る 危 機

手児女を語る。

漆間の翁、真間の

会  
う  
。

捜す。漆間の翁に

様子を知る人を

再会する。

七年後

病  
死

家に籠ってしま

誘惑される

特定個人ではない

通点が指摘される。また亡霊となつた妻が夫の前に姿を  
 表すという重要なモチーフも「愛卿伝」によると考えられ  
 る。だが人物の性格設定などは比較を要すると思われ  
 る。では「浅茅が宿」の宮木の性格はいかに表現されてい  
 るのであろうか。本文での表現を挙げておきたい。  
 一、心ばへも愚<sup>あほう</sup>ならずありけり。(注43)  
 二、いづちへも遁<sup>ひが</sup>れんものをと思ひしかど。此秋を待<sup>まち</sup>  
 と聞えし夫<sup>むと</sup>の言<sup>ことば</sup>を頼みつゝも。安からぬ心に日をか  
 ぞへて暮しける。秋にもなりしかど風の便りもあら  
 ねば。世とともに憑<sup>たより</sup>みなき人心かなと。恨みかなし  
 みおもひくづをれて。憑<sup>たより</sup>みなき人心かなと。恨みかなし  
 身のうさは人しも告<sup>つ</sup>げあふ坂の(注44)  
 三、三貞<sup>てい</sup>の賢<sup>かしこ</sup>き操<sup>みさほ</sup>を守りてつらくもてなし。後は戸を  
 閉<sup>たて</sup>て見えざりけり。(注45)

四、かく寡<sup>せう</sup>となりしを便<sup>たよ</sup>りよしとや。言<sup>ことば</sup>を巧<sup>た</sup>みていざ。  
 なへども玉と碎<sup>くだ</sup>ても瓦<sup>がら</sup>の全<sup>た</sup>きにはならはじものをと。  
 幾たびか辛<sup>から</sup>苦<sup>く</sup>を忍<sup>しの</sup>びぬる。<sup>(注46)</sup>  
 五、今は長き恨みもはれぬなりぬる事の喜<sup>うれ</sup>しく侍<sup>は</sup>り。  
 し。逢<sup>あ</sup>を待<sup>まち</sup>間に恋ひ死なんは。人しらぬ恨みなるべし。<sup>(注47)</sup>  
 六、末期<sup>いまは</sup>の心を哀れにも展<sup>ひ</sup>たり。  
 さりとともと思ふ心にはかられて  
 七、只烈<sup>い</sup>婦<sup>め</sup>のみ。主<sup>か</sup>が秋を約<sup>ちか</sup>ひ給ふを守りて。家を出<sup>(注48)</sup>  
 給はず。<sup>(注49)</sup>  
 八、一旦<sup>ひとたび</sup>樹<sup>こ</sup>神<sup>かみ</sup>などいふおそろしき鬼<sup>おに</sup>の栖<sup>すみ</sup>所となりたり  
 しを。稚<sup>わか</sup>き女子<sup>こなん</sup>の矢<sup>や</sup>武<sup>ぶ</sup>に。おはするぞ。老が物見たる  
 中。のあはれなりし。<sup>(注50)</sup>  
 九、旧<sup>かき</sup>しき恨みを聞え給ふなるべし。<sup>(注51)</sup>  
 今の物がたりを聞に。必<sup>かならず</sup>烈<sup>い</sup>婦<sup>め</sup>の魂<sup>たま</sup>の来り給ひて。

十、此亡<sup>な</sup>人の心は昔の手<sup>て</sup>兒<sup>な</sup>女<sup>が</sup>をさなき心に幾らをか  
 まさりて悲しかりけんと。<sup>(52)</sup>  
 本文からは、以上のような宮木の人物造形が伺えるが、  
 ここからは宮木の「恨み」が浮かび上がってくる。この  
 点は『剪燈新話』の羅愛愛と大きく異なっている。  
 羅愛愛は宮木と同様、戦乱によつて夫との別離を余儀  
 なくされた。だが、彼女によつて亡霊となつて現れるので  
 死を選<sup>ひ</sup>し、夫の嘆きによつて亡霊となつて現れるので  
 ある。宮木との違いは、宮木は自殺しなかつたことと、  
 夫、勝四郎が真間の郷に戻つた時に、自らが亡霊である  
 事を隠して再会を果たすこと。また勝四郎に対して恨み  
 の感情を訴えている点である。宮木に「恨み」があつた  
 ことは漆間の翁が語つてゐる通りであり、この「恨み」の  
 きな意味を持つものと考えられる。この「恨み」の有無  
 にいては、真間の手兒女像とも一致が見られない。手  
 兒女にしても入水という手段をとつていて、宮木とは一

見、一致しないのであるが、秋成は、漆間の翁をわざわざ  
 ざ登場させ、真間の手児女伝承を語らせるのである。こ  
 れらの疑問点が、宮木像を考える上で、の指針になっ  
 ても、ものと思われ。宮木が、羅愛愛と異なり  
 自殺という手段を講じて語られる宮木が、何によるもので  
 あろう。羅愛愛は身分設定が元遊女となっており、その  
 彼女がいかに貞節に生き、また殉じて死を選択した  
 のかを「愛卿伝」が語ろうとして、自我を描くのではな  
 が宿「は宮木の貞女としてみ、哀しみを抱きつつ  
 女、烈婦ではありながら、恨みや哀しみを抱きつつ  
 待つ事しか出来なかつたことを語っている。この為、宮  
 木は自害ではなく病死という最期を迎えた。又約束とい  
 う「愛卿伝」にはないモチーフも宮木が自害を選択しな  
 かつた要因となつて、いるものと思われ。言葉や、漆間  
 勝四郎の言い置いた「この秋を待て」との言葉や、漆間



の翁の言う「主<sup>め</sup>が秋を約<sup>ひか</sup>ひ」に示される約束により、宮  
 木は戦乱の世になつても、家から一步も出ずひたすら夫  
 の帰りを待つしか取るべき道がなかつたからに相違ない。  
 命を絶つと羅愛愛のようになつて、貞操の危機にあたれば、自ら  
 自害を宮木に選<sup>え</sup>択<sup>え</sup>させてい<sup>い</sup>ない。基本的には宮木も語<sup>つ</sup>  
 ているように「玉と砕<sup>くだ</sup>けても瓦<sup>がら</sup>の全<sup>ぜん</sup>きにはならはじものを<sup>(注3)</sup>  
 であつて、宮木が自らに課<sup>か</sup>していたこの生き方と、「命  
 だにとは思ふものの、明<sup>あき</sup>を<sup>(注4)</sup>たのまれぬ世のことわりは、  
 武<sup>ぶ</sup>き御<sup>お</sup>心にもあはれみ給<sup>たま</sup>へ<sup>(注5)</sup>とい<sup>い</sup>う心もとなさが、宮木  
 の「烈婦」<sup>(注6)</sup>とだけでは言<sup>い</sup>切<sup>き</sup>れない、弱さ、哀れさを表  
 現<sup>げん</sup>している<sup>(注7)</sup>と考<sup>く</sup>え<sup>え</sup>られるのである。  
 従<sup>したが</sup>つて、宮木の死は意識的な自害という方法<sup>(注8)</sup>はとられ  
 ず、病<sup>び</sup>死<sup>し</sup>とい<sup>い</sup>う物語<sup>(注9)</sup>展開<sup>(注10)</sup>がなされるのであるが、このこ  
 とが逆に宮木の「恨<sup>み</sup>」をより強<sup>つよ</sup>固<sup>こ</sup>なものに変<sup>へ</sup>えていくこ  
 と考<sup>く</sup>え<sup>え</sup>られる。自殺<sup>(注11)</sup>という手段<sup>(注12)</sup>を取<sup>と</sup>るというこ<sup>こ</sup>とは、

「菊花の約」の宗右衛門のそれが、相手に對する信義の表明であつたように、彼女はある面で自己完結をなす。羅愛愛もしかりであつて、彼女の嘆きと願ひによつて亡霊となつて表れたのである。夫の嘆きと願ひによつて、靈となつて出たが夫に一目会いたいと希望は持ち続けていた。このことが、夫が羅愛愛を銀杏の木の下から掘り起こした時に、まるで生きているが如くであつたという記述、そして羅愛愛自らの言葉からも読み取れるのである。勝四郎には宮木の死は知られないまま、再会の喜びが与えられてゐる。宮木の「恨み」は、再会の成就によつて癒されるのである。言葉に頼みに待ち続ける病に倒れ、それでも尚且夫の言葉を頼みに待ち続ける、それは勝四郎に逢い、訴える事によつての、鎮められるのだらうか。こ

れについて、は後ほど考察を加えたい。  
 舞台を次に「伽婢子」であるが、これは「剪燈新話」の  
 茅が宿「の原拠とされるのは「藤井清六遊女宮城野を娶  
 事」である。「愛卿伝」との差異は登場人物の名前など  
 で、物語の展開としては大きく異なっている。だが  
 部分的に改変されているところもある。そこは、夫の出  
 立の理由が叔父の臨終を母と叔父の希望により看取る為  
 といふ点である。そして夫はそれについて案ずるのだが、  
 宮木野は「老母の思ひ給ふところ、此たび京にのぼら  
 ずは、ひとつにはみずから心とまりて叔父の事をわ  
 すれたりといはん。ふたつには母の心にそむく不孝の名  
 をうけ給はん。たゞのぼり給へ。<sup>(注5)</sup>」といつて諫めている  
 点である。  
 「遊女宮木野」はその題に「遊女」とついて、いるよう  
 に元遊女であった女性がいかに貞節を重んじ、その為に

死んでいったか、主題に据えており、「恨み」は表現さ  
 れていない。この点は「愛卿伝」と同じである。これら  
 の作品は宮木の貞女としての人物設定に大きく関与して  
 いるとはいつても、「恨み」に關しては重ならないよう  
 に思われる。『浅茅が宿』の原拠の中で「恨み」が存在して  
 いる作品はないのだろうか。ここで注目せねばならない  
 のが、謡曲「砧」である。「砧」の梗概は次の通りで  
 ある。九州蘆屋何某は自訴の事があつて三年前に上京したが  
 侍女の夕霧を国に歸して、この秋には必ず歸ると言い送  
 った。国許の妻は夫を恋慕い、砧をうつて寂しい心を  
 慰めていたが、この暮にも帰れないとの便りが来たので  
 妻は夫が心変わりしたものと恨んで、狂い死にしておしま  
 った。夫は帰国して妻の死を憐れみ、梓弓にかけて亡霊  
 を引き寄せると、妻の亡霊が現れ出て、夫の不実を恨ん

だが、法華読誦の効力によつて成仏した。  
 この作品には夫の不実を疑つて夫を待ち続けて恨み、  
 狂つてしまつた女が描かれており、待つ事の悲しさやそ  
 の「恨み」の程は、先の「愛卿伝」などよりも、より強  
 く感じられると思われ。だが、「恨み」は「浅茅が宿」  
 と共通していても、その表れ方は同質とは言ひ難い。ま  
 ず個々の表現の関連について見てみたい。

「砧」

人目も草も枯れ枯れの。契りも絶え果てぬ何を頼ま  
 ん身の行方(注56)

「浅茅が宿」

かくてはたのみなき女心の、野にも山にも惑まどふばか  
 り(注57)

「砧」

古里の。軒端の松も心せよ(注58)

「浅茅が宿」

軒端の松にかひなき宿に(注59)  
 「砧」  
 梓の弓の末弭に(注60)  
 怨みは葛の葉の、かへりかねて執心の(注61)  
 「浅茅が宿」  
 梓弓末のたづきの心ぼそきにも(注62)  
 葛のうら葉のかへるは此秋なるべし(注63)  
 などという表現の一致が見られる。また、夫を待ちつ  
 つ病に死んで行くモチーフと、亡霊となつて夫の前に現  
 れ、「恨み」を訴える点が、共通している。  
 また、約束の提示とその反古という点では、他の原拠  
 には見られない程、それを恨み、訴えていることに注目  
 しておきたい。夫の頼りがいのなさについて、以下  
 「人こそ変わり果て給ふとも」(注64)「恨めしやせめては年  
 暮をこそ偽りながら待ちつるに。さてははや真に変わ  
 り果て給ふぞや」(注65)などから伺えよう。

いるでは「恨み」の質は「浅茅が宿」とどの様に異な  
 っているか。このことについては『雨月物語評釈』に  
 「砧」と「浅茅」は、妻女の亡霊の出現の動機に、  
 そのあわれさとともに、女の執念や業を併在させて  
 いたという意味で共通しており、  
 （注66）  
 現の動機こそが「砧」の場合夫への「恨み」ではない  
 だろうか。またその「恨み」にとられてしまった妻の  
 その鎮魂は法華読誦によつてなされてお、その点も  
 「浅茅が宿」とは異なっている。  
 さらに「砧」には、ともすれば普遍的な女性の性と  
 して「恨み」とそれに連なる執念を描いているのに対し  
 「浅茅が宿」の宮木像には、羅愛愛や手児女といった女  
 性像が余にも強く重ねられて、  
 見いだしにくいところから、  
 待ち続けた事によつて「恨み」が生じ、その「恨み」

ゆえに勝四郎の前に姿を現す宮木には、確かに女性一般  
 の性質が「執念」であれば、それを読み取る事は容易で  
 あり、またその側面も有していると言えよう。しかし、  
 それでもなお宮木の「恨み」は「砧」の「恨み」とは一  
 線を画していると考えられるのである。  
 この宮木の「恨み」は、既に夫だけに向けられてはいない。  
 このことは前節で述べたが、むしろ自己に、自己の行為  
 への「報い」による無さによって生じ、なんらかの形で  
 「報い」によつて鎮められる。当然鎮魂の為に夫に対  
 して「待ち続けた事」「自らの貞節」を明らかにする事  
 が第一条件となるのだが、それだけでは十分ではない。  
 そこで例の「真間の手児女」伝承が必要となつてくると  
 考えられるのである。  
 「この場合を夫に訴えていない。再会自体によつて成仏が阻まれて  
 成立しない。物語は突如読誦による



妻の成仏を語るのみである。は「では次に秋成自身（注67）が書いた浮世草紙に移りたい。これ入「二度の勤は定めなき世の蜷川の淵瀬」の二編からなる作品である。まずはその梗概を述べておこう。大阪郊外の桜塚の百姓の才太郎は米相場に手を出して、田畑家蔵全て失い、親類から縁を切られる。才太郎には身請けしていた女郎藤野がいたが、財産を失ったの  
で親元に帰るよう言う。しかし藤野は才太郎の恩愛に応え、才太郎さえ得心なら、再度岸屋に奉公に出て、再起の資金を調達したいと申し出る。それで得た五十両で、生来の大掴みな氣持ちから、ひと儲けしようとして江戸にでる。同郷の知人は才太郎を諷めて、上方に帰るよう勧めめる。が、落胆するので、八丈絹の交易をする隣家を紹介する。才太郎はこれに同行して、絹を買いつけたが、そ

の 帰 才 太 郎 は 自 害 、 遺 言 は 岸 屋 宛 の 手 紙 に 書 か れ て い た 。 絶 望 し  
 て 才 太 郎 は 一 部 始 終 と 藤 野 が 自 害 、 出 家 な ど せ ん ぬ よ う 言 い  
 そ こ に は 一 部 始 終 と 藤 野 が 自 害 、 出 家 な ど せ ん ぬ よ う 言 い  
 聞 か せ て く れ 藤 野 は 考 え た 末 、 変 わ ら ず 奉 公 す る 事 を 決 め る 。  
 岸 屋 は 四 十 九 日 の 法 要 を さ せ て く れ 、 そ の 後 は 健 気 に 奉  
 公 し 、 名 妓 の 名 を 高 め 、 年 が 明 け る と 才 太 郎 の 追 善 を し  
 こ の 里 の 髪 結 い と し て 一 生 を や も め で 過 ご す 。 性 格 を 「 浅 茅  
 が 宿 〱 の 勝 四 郎 の 性 格 に 活 か し て い る 。 性 格 を 「 浅 茅  
 「 世 間 妾 形 氣 〱 で は 「 生 れ 付 た る 大 搦 み 。 心 の 矢 猛 は  
 る ば る と 「 〱 と さ れ て い る の が 「 浅 茅 が 宿 〱 で は 「 生 長 〱  
 物 に か か は ら ぬ 性 〱 よ り 「 〱 と な っ て お り 、 さ ら に 親 戚 連 中  
 が 才 太 郎 を 「 〱 物 が た き 在 所 の 一 家 は 人 外 と 覚 へ て よ せ つ  
 け ず 「 〱 と し 、 一 方 の 勝 四 郎 は 「 〱 さ る ほ ど に 親 族 お ほ く こ  
 も 疎 じ ら れ け る を 「 〱 と い う 扱 い に で る 。 い ず れ も そ の こ

とを口惜しく思い、才太郎は藤野が再度奉公に出る金で  
 「おのれ人並成るべきか。しばしの憂目は凌ぐとも。親  
 の恩より義理の恩。金さへあらば報ずる物と。生れ付た  
 る大掴み。心の矢猛はるばると(まがり)江戸へ出てしまふ。  
 勝四郎もまた「朽くをしきとに思ひしみて、いかにもし  
 て家を興きしなな。ものをとて左ひだり右みぎにはかりける。(まがり)のであ  
 る。どちらも彼の代になつて身代を潰してしまい、また  
 本来百姓であるのに、その農業を真面目にするのではな  
 く、交易などで一氣に取り戻そうという氣質が共通して  
 いる。さらには、方や海賊、方や山賊に交易の品物を奪われ  
 るという不運にあい、それによつて才太郎は自害、勝四  
 郎はその上、戦乱の為に帰郷が叶わなくなるのである。  
 従つて『世間妾形氣』からは、夫の人物設定の継承も伺  
 え、るのである。人物造形や「恨み」についてはどのような

関連があるのだろうか。藤野からは「恨み」も「待つ女」  
 のイメージもなく、女性像として宮木に継承されている  
 ものは貞女、夫に対しての「誠」などであった。宮木が  
 藤野のモチーフを発展させたものであることは、既に論  
 じられてはいるが、「恨み」に焦点を絞った場合には藤野  
 と宮木には一致が見られないと考えられるのである。  
 再度「浅茅が宿」そのものに立ち返って宮木の「恨み」  
 と人物像を確認しよう。まず問題としなくてはならない  
 のは「真間の手見女」である。この手見女像が宮木の人  
 物設定に深く関わっていることは、漆間の翁の手見女伝  
 承の語りからも察せられよう。それではここで例に出さ  
 れている真間の手見女とは一体、どのような人物であろ  
 うか。これは「万葉集」に見られる「真間の手見女」伝  
 承によっているのだが、その部分を引用しよう。

過勝鹿真間娘子墓時山部宿祢赤人作歌一首  
 『万葉集』卷第三

四三一	いにしへにありけむ人の倭文機の帯解き交え	てふせやたて妻問しけむ葛飾の真間の手児	名の奥つ城をこことは聞けどま木の葉やし	げりたるらむ松が根や遠く久しき言のみも名	のみも吾は忘らえなくに	四三二 反歌	吾も見つ人に告げむ葛飾の真間の手児名の	奥つ城處	四三三	葛飾の真間の入江に打靡く玉藻刈りけむ手	児名し思ほゆ <small>(注74)</small>	万葉集 卷第九	詠勝鹿真間娘子歌一首 高橋虫麻呂	一八〇七	鶏が鳴くあづまの國に古にありける事と今
-----	----------------------	---------------------	---------------------	----------------------	-------------	--------	---------------------	------	-----	---------------------	-----------------------------	---------	------------------	------	---------------------

までに絶えず言ひくる葛飾の真間の手児名が  
 麻衣に青衿着けひたさ麻を裳には織り着て髪  
 だにもかきは梳らず履をだにはかず行けども  
 錦綾の中につつめる齋ひ兒も妹にしめや  
 望月のたれる面輪に花の如く笑みて立てれば  
 夏蟲の火に入るが如みなと入りに船こぐ如く  
 ゆきかぐれ人の言ふ時いくばくも生けらじもの  
 を何すとか身をたな知りて浪の音のさわく湊の  
 奥つ城に妹が臥せる遠き世にありける事を  
 昨日しも見けむがごとく思ほゆるかも  
 一八〇八反歌  
 葛飾の真間の井を見れば立ちならし水汲まし  
 けむ手児名し思ほゆ(注)  
 この『万葉集』に歌われた真間の手児女も、宮木の人物造形に重ねられてゐるのである。だがこの手児女像は宮木の烈婦のイメージとそのまま一致するものではない。

「真間の手児女」は『万葉集』に歌われた段階で既に  
 「伝説、伝承」の存在であった。つまり万葉の時代に既  
 に「古」の存在であった手児女像を宮木に重ねることは、  
 宮木自身を伝承化することであると思われる。だが手児  
 女には宮木に見られる「恨み」は見受けられないのであ  
 る。ここで秋成が晩年に執筆した『金砂』にある秋成自  
 身の『万葉集』の解釈書の中で示された真間の手児女に  
 対する解釈を参考に、手児女像で秋成が示したかったも  
 のを明らかにしたい。  
 かたちのみならず心もさかしくてありしかば、常な  
 き世のこわりをさへふかうおぼしりて、人々の  
 志を身一つにはいかせん、さりとてもほとほうら  
 みおひなん、罪をやかさぬらんをとて、入江の波に  
 沈みつるは、あはれめしき身のはて也けり(注76)  
 ここでは表されて、いるのは手児女の「あはれ」であり、  
 また他にとるべき方法を知らなかつた「をさなさ」であ

ったろう。手児女像は『万葉集』においても、後世の歌  
 人によつて作り出された「あはれな」女性像であつた。  
 手児女自身の感情、思いは封じ込められて、全ては  
 過去のものとなり、ただあはれさと哀しみが、残され  
 過者の心に残るのである。この手児女を出すことによつ  
 た者の心に残るのである。この手児女を出すことによつ  
 て宮木へのあはれさと哀しみが強く読者に印象付けられ  
 るのである。  
 れ以上の「浅茅が宿」の原拠となる諸作品の女性像とそ  
 果、宮木という羅愛愛、宮木野、真間の手児女らの人物  
 像によつて補完された人物は、彼女たちには見いだせな  
 い。「恨み」を抱いていることが確認できた。  
 考では次にはその「恨み」がどのようなものであるかを  
 考えたい。  
 ない。その宮木の恨みは、対象を勝四郎に限つたのでは  
 ない。そのことは「菊花の約」で約束を果たさなかつた



場合、左門が宗右衛門に對して「怨み」を持つという  
 のと、比較してみても読み取れよう。相前後した「菊花  
 の約」と「浅茅が宿」で、同じように秋の再会を物語の  
 中心に据え、前者は期日に亡霊となつても再会を果たし  
 て、その信義を明らかにしたのに對し、後者は秋を過ぎ、  
 七年を経てようやく「弔う」つもりで戻ってくる。左門  
 は帰つてこない宗右衛門その人に「怨み」が向かうので  
 あり、宮木は、歸つてこない勝四郎に對して、というよ  
 りも、むしろ「待つていた」ことを知られぬままに死ん  
 でいく事を「恨み」、「待ち続ける」しかない自分を「恨む」  
 のである。  
 編で生ける者と死せる者として再会を果たす構造の二  
 義を見せたのに、菊花の約「では宗右衛門が死によつて信  
 勝四郎が「信なき己が心」を悔いて歸ってくるのを「待  
 つ」のである。

報をばとのら初「岐よ葉設れ  
 「ひ報「が行みめ恨にっ「で定ば宮  
 恨ないた言為「のて恨に「吉表であいの木  
 み「し「る対性「う「は「備津の「恨  
 「と「の思て格「ら「は「み鎮め釜「ろみ  
 宮言「蛇院の報わ特が「報「は「め「う  
 木の「性「の「わ報定個消「い「は「ら「か  
 の「の「の「る「ない人失「「ど「た「の「抱  
 言「の「姪「み「いへ向ける「が「の「の「く  
 葉「代「は「雨「事「け「る「要「う「に「対「し「ま  
 に「償「は「月「で「生「ら「の「で「鎮「め「こ「の「待  
 よ「は「豊「大「物「語「る「「怨「み「「が「「分  
 れ「は「雄「乱「を「生「じ「る「「恨「み「「と「宮  
 ば「豊「を「脅「迫「した「時「に「恨「み「「矢  
 「今「の「命「であ「った「恨「み「「武  
 は「長「き「恨「み「も「は「れ「う  
 言

ばれとなりぬる事となつており、その報いは unnecessary  
 もののよう受け取る。だが七年も、その歳月をひたすら  
 夫を待ち続けた宮木の霊の「恨み」は、再会だけで消去、  
 されるものであらうか。宮木の自己の行為への後悔は、  
 この場合夫勝四郎を行かせてしまつたことか、あてにな  
 らない夫を待ち続けたことなのか。いづくにしてもそれ  
 は勝四郎に向けられる報いが必要とせず、勝四郎に求め  
 られた行為は「宮木の行為を知る」ことのみにあつた。  
 「浅茅が宿」の宮木の「恨み」はその面でもひたすら自  
 己へと向かい、報復を欠いたものであると言えよう。異  
 なつて「浅茅が宿」の独自の「雨月物語」の「恨み」とは異  
 つまり、自己に向かうといふ「恨み」の性質が最も純粹  
 に表現されていく一編であるとも考えられる。「真間の手児  
 そして「報い」の代わりには置かれたものである。「真間の手  
 女伝承であつたかと思へられ、その「砧」では法

華経の読誦により、仏の力で執念が断ち切られたが、秋  
 成はここに『万葉集』を据えたのである。その  
 独自性の確認を終えたが、原拠とされる諸作品と比  
 して、宮木の人物造型に關しても羅愛愛、宮木野、藤野  
 砧の妻、真間の手兒女といつた複数の女性像から成  
 ており、前三者からは「をさなき心」が見  
 は「恨み」が、真間の手兒女からは「をさなき心」が  
 いだされた。また「恨み」に關しては、前三者には恨  
 は見受けられず、唯一「砧」から引き出せるのだが、  
 「砧」のそれは夫の心変わりをも恨んでおり、待つこと  
 を知らぬままに死んでいくことこそ恨みであると言つ  
 た宮木のそれとは性質を異にし、この恨みであつた。また  
 「報い」の欠如を真間の手兒女伝承によつて補完してい  
 ると考へ、この突如語られないかを考えた。  
 そこに求め、このことが出来ないかを考えた。

は宮「でもあ「つをり「に「れる「  
 ない木の恨み「雨「源氏物語「お「現「報「う  
 こそれが「浅茅が宿「物語「り「し「雨「が「怨「ら  
 とを「と「り「の「語「「「「月「な「「「み  
 を述「特「わ「の「は「「「物「語「「「と「  
 べて「例「強「宮「多「「「「「「「「「  
 、第三「調「木の「の「「「「「「「  
 節「例「さ「の「「「「「「「「「  
 を「外「て「恨「う「「「「「「「  
 終「的「いた「み「ら「「「「「「  
 える「な「たと「「「「「「「「  
 こ「使「考「は「自「己「へ「と「向「け「  
 と「方「え「己「「「「「「「「  
 と「い「れ「と「向「か「う「中「  
 したい「わ「だ「が「  
 。「で「

[illegible]



「謡曲大観」	「謡曲大観」	「謡曲大観」	「伽婢子」	「東洋文庫」	46	56	62	61	61	60	58	56	56	48	47	同	「中国古典文学全集」	「日本古典文学全集」
「雨月物語」	「雨月物語」	「雨月物語」	「東洋文庫」	「東洋文庫」	頁10	頁4	頁9	頁8	頁1	頁11	頁7	頁9	頁3	頁4	頁7	「雨月物語」	「中国古典文学大系」	「日本古典文学大系」
826	823	829	168														「西山物語」	「西山物語」
頁5	頁56	頁4	頁46	頁12												46	「剪燈新話」	「剪燈新話」
行	行7	行8	行	行												頁4	「を参考にした。」	「を参考にした。」





結  
び

あり、  
 ーち  
 ーの  
 か場  
 ー合  
 のは  
 場合  
 は主  
 赤体  
 穴は  
 宗赤  
 右穴  
 衛宗  
 門右  
 個衛  
 人が  
 行丈  
 為部  
 の左  
 主門  
 で。

ーち  
 ーの  
 か場  
 ー合  
 のは  
 場合  
 は主  
 赤体  
 穴は  
 宗赤  
 右穴  
 衛宗  
 門右  
 個衛  
 人が  
 行丈  
 為部  
 の左  
 主門  
 で。

行爲  
 為主  
 體が  
 誰な  
 のか  
 が表  
 現さ  
 れて  
 いた  
 事を  
 確認  
 した。

成立  
 する  
 とい  
 う性  
 質か  
 ら訓  
 を区  
 別す  
 るこ  
 とに  
 よつ  
 て、

東を  
 示し  
 なが  
 らも  
 、約  
 束と  
 いふ  
 もの  
 が二  
 人の  
 人間  
 の間  
 で

られて  
 いた  
 。ー  
 約の  
 字は  
 ー九  
 月九  
 日の  
 再会  
 ーと  
 いう  
 約

花の  
 ーに  
 多用  
 され  
 ーち  
 かひ  
 ーと  
 ーち  
 ぎり  
 ーの  
 訓が  
 付け

まず  
 取り  
 あげ  
 たの  
 はー  
 約の  
 字で  
 ある  
 が、  
 これ  
 はー

あげ、  
 訓の  
 差の  
 基準  
 を求  
 めた。

つの  
 漢字  
 に對  
 して  
 二通  
 りの  
 訓が  
 付け  
 られ  
 てい  
 る語  
 を取  
 り

成した  
 のか  
 につ  
 いて  
 考察  
 を行  
 った。

て、秋  
 成がい  
 かに細  
 やかな  
 配慮  
 をして

本稿は『雨月物語』における漢字表現と訓を題材にし

体者であつた。さらには「ちかひ」を訓とすること、  
 その約束が赤穴にとつては「誓い」程の重要性があつた、  
 ことをも同時に表現し得ていたと考えられるのである。  
 次に扱つたものは「鬼」であつたが、これについて、  
 中国で「鬼」が示すものと、日本でのそれはかなり異な  
 つてゐることは、以前から言われていた通りであるが、  
 『雨月物語』では「おに」と表現する場合と「もの」と  
 表現する場合で、差異が存在するとすれば一体何なのか  
 を考えた。すると「もの」ないし「もののけ」という場  
 合、『源氏物語』に代表される生き霊を連想し、「おに」  
 の場合は『伊勢物語』や『今昔物語』の「鬼」を連想す  
 るのではないかと考えた。本文では言及しなかつたが、  
 「いきすだま」では「窮鬼」が漢字にあてられてゐるが、  
 通常「生霊・怨霊」を意味している点から「鬼」に「魂」  
 の意味を含ませているとも解釈出来るのではないだろう。

動の「いたはでとがえ「基一取  
 と場「た「「同「意「な「心「準「番「り「第  
 、合「か「「庄「慮「さ「た「が「用「あ「二  
 そ「は「へ「「「に「の「れ「す「で「求「例「げ「章  
 の「「る「「「の「「「と「は「め「が「た「では  
 人「帰「も「「庄「主「は「へ「「「意「情「「「が「  
 が「と「漢「「庄「は「「「「「「「「  
 あ「「字「「庄「「「「「「「「  
 る「「の「「主「「「「「「「「  
 べ「「使「「は「「「「「「「「  
 き「「い「「「「「「「「  
 場「「分「「「「「「「「  
 所「「け「「「「「「「「  
 、「「が「「「「「「「「  
 地「な「「「「「「「「  
 位「さ「「「「「「「「  
 へ「れ「「「「「「「「  
 の「て「「「「「「「「  
 回「単「「「「「「「「  
 帰「に「「「「「「「「  
 を「場「「「「「「「「  
 意「所「「「「「「「「  
 味「的「「「「「「「「  
 す「な「「「「「「「「  
 る「移「こ「「「「「「「「

とい  
 う基  
 準が  
 伺え  
 た。  
 読み  
 取れ  
 た漢  
 字と  
 、厳  
 密な  
 差異  
 を断  
 言し  
 えな  
 かつ  
 た漢  
 字が  
 あつ  
 た。  
 「奇  
 」「異  
 」「の  
 あや  
 しに  
 関し  
 ては  
 、「怪  
 」と  
 は明  
 確に  
 区別  
 され  
 たが  
 、両  
 者間  
 の違  
 いは  
 、そ  
 のも  
 のを  
 見  
 てあ  
 やし  
 むの  
 か、  
 正体  
 不明  
 なも  
 のを  
 あや  
 しむ  
 のか  
 とい  
 つ  
 た、  
 位相  
 の異  
 なる  
 基準  
 しか  
 求め  
 得な  
 かつ  
 た。  
 この  
 点が  
 、今  
 後の  
 課題  
 とな  
 るで  
 あろ  
 う。  
 第二  
 節で  
 は「菊  
 花の  
 約」「  
 吾」  
 の漢  
 字の  
 多用  
 につ  
 い  
 て考  
 えた  
 が、  
 原拠  
 の中  
 国白  
 話小  
 説の  
 影響  
 が明  
 らか  
 であ  
 り  
 むし  
 ろ「菊  
 花の  
 約」  
 の方  
 がよ  
 り統  
 一的  
 に用  
 い  
 ら  
 れ  
 て  
 い  
 た  
 と  
 い  
 うこ  
 とが  
 指摘  
 で  
 き  
 よ  
 う。  
 最  
 後  
 に「  
 あた  
 」「  
 を取  
 りあ  
 げ  
 た  
 が、  
 「白  
 峯」  
 の新  
 院の  
 譬  
 と恨  
 み  
 に焦  
 点を  
 あて  
 て、  
 漢字  
 の「  
 譬」  
 「敵  
 」の  
 意味  
 の差  
 異を  
 明  
 ら  
 か  
 に  
 する  
 事  
 が  
 出  
 来  
 た  
 と  
 思  
 わ  
 れ  
 る。  
 この  
 は「  
 譬」  
 を抱  
 い  
 て  
 い  
 る  
 者  
 と、  
 「  
 譬」  
 と  
 さ  
 れ  
 る  
 人  
 間  
 と  
 の  
 関  
 係  
 の  
 把  
 握

認 識 の 違 い か ら 用 い ら れ て お り 、 「 敵 」 は 客 観 的 に も 敵  
 対 関 係 に あ る と き に 用 い ら れ て い た 。 「 敵 」 は 客 観 的 に も 敵  
 直 接 個 人 に 向 け ら れ る 性 質 の も の で あ り 、 「 恨 」 で 抱 く は  
 感 情 は 、 他 者 の 行 為 だ け に 起 因 す る も の で は な く 、 自 己  
 の 報 わ れ な い 行 為 に よ っ て 生 じ 、 時 に は ひ た す ら 自 己 へ  
 向 け ら れ る と い う 性 質 が あ る 。  
 れ た 「 怨 」 に つ い て は 、 そ の 性 質 が 平 安 中 期 物 語 で 用 い ら  
 て も 述 べ た 。 「 怨 」 は う ら み を 抱 く 者 と 抱 か れ る 者 の 間  
 に 固 定 し た 人 間 関 係 が な け れ ば な ら ない の で あ っ た 。  
 と 「 恨 み 」 を 抱 い た 宮 木 の 人 物 像 に つ い て 考 察 し た 。 「 恨 み  
 「 怨 」 は 相 手 を 死 に 至 ら し め る よ う な 報 復 が 「 白 峯 」 で  
 も 「 吉 備 津 の 釜 」 で も 展 開 さ れ た 。 ま た 「 恨 み 」 に し て  
 も 「 白 峯 」 「 蛇 性 の 姪 」 の 用 例 で は 報 復 が 表 さ れ て お り

単に後悔、悔恨といつた意味で用いられているのではない  
 いと思われた。そこで宮木の人物像を探りつつ、その恨  
 みの意味について考察した。人物像があるが、漢字表現の  
 の以上が本稿で考察した事柄であるが、使い分けに關して  
 厳密な基準を提示しえないもの、あくまでも他との違い  
 を述べられたに過ぎない。今後の課題として、  
 「奇」「異」の違

参考文献目録

上田秋成

『雨月物語』影印本

勉誠社

昭和五十一年三月三十日

鈴木丹士郎編

『雨月物語本文及び総索引』

武蔵野書院

平成二年五月三十一日

重友毅

『雨月物語の研究』

大八洲出版

昭和二十一年十一月五日

重友毅

『雨月物語評釈』（増訂版）

明治書院

昭和三十二年十月十日

澤瀉久孝

『万葉集注釈』

中央公論社

昭和三十三年十月十五日

永積安明

島田勇雄校注『保元物語 平治物語』

岩波書店

昭和三十六年七月五日

佐成謙太郎

『謡曲大観』第二卷

明治書院

昭和三十九年一月十日

高田衛

『秋成年譜考説』

明善堂書店

昭和三十九年十一月三十日

鵜月洋

『雨月物語評釈』

角川書店

昭和四十四年三月十日

飯塚朗 内田道夫

『剪燈新話・余話 西湖佳話 棠陰比事』

平凡社

昭和四十四年十一月五日

駒田信二 訳

『源氏物語』日本古典文学全集

小学館

昭和四十五年十一月

阿部秋生 秋山虔

『源氏物語』日本古典文学全集

小学館

昭和四十五年十一月

今井源衛

『源氏物語』日本古典文学全集

小学館

二十五日



馬場あき子

『鬼の研究』

三一書房

昭和四十六年六月三十日

大輪靖宏

『上田秋成文学の研究』

笠間書院

昭和五十一年一月三十日

谷川健一

『魔の系譜』

講談社

昭和五十九年十一月十日

浅野三平

『上田秋成の研究』

桜楓社

昭和六十年二月二十五日

江本裕

『伽婢子』

平凡社

昭和六十二年九月十日

中村幸彦編

『上田秋成全集』

中央公論社

平成二年八月二十五日

栃木孝惟 日下力

『保元物語 平治物語 承久記』

益田宗 久保田淳校注

新日本古典文学大系

岩波書店

平成四年七月三十日

中村幸彦 高田衛

『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』

中村博保校注

新編日本古典文学全集

小学館

平成七年十一月十日

辞書

谷川士清編

『和訓栞』

名著刊行会

昭和四十八年五月四日

中村幸彦 岡見正雄

『角川古語大辞典』

角川書店

昭和五十七年六月十日

阪倉篤義

「国歌大観」編集委員会『新編国歌大観』第一卷

角川書店

昭和五十八年二月八日

中田祝夫 和田利政 『古語大辞典』

小学館

昭和五十八年十二月十日

北原保雄

諸橋轍次

『大漢和辞典』

大修館書店

昭和五十九年八月二十日

土井忠生 代表

『時代別国語大辞典』室町時代編一／三

三省堂

平成三年三月三十一日

澤瀉久孝 代表

『時代別国語大辞典』上代編

三省堂

平成六年十月一日

上田英代 他

『源氏物語語彙用例総索引』

勉誠社

平成六年十二月二十五日

雑誌掲載論文

山崎芙紗子『雨月物語』語彙攷 その二 京都学園 大学論集 第十七卷第四号 平成元年三月

二川清 『雨月物語』各話の主題と全話の配列との関連について 都大論究 二八号 平成三年三月

藁科勝之 『雨月物語』のチカヒとチギリ

文経論叢 人文学科編

弘前大学人文学部 27(3) 平成四年

藁科勝之 『雨月物語』のことばと表記 日本文学 33(5)

田中康二 月夜の怪異 日本文学 42(10) 平成五年十月

長島弘明 男性文学としての『雨月物語』 日本文学 42(10) 平成五年十月

藁科勝之 『雨月物語』におけるかなの自立と漢字の機能 日本文学 42(10) 平成五年十月

藤原浩史 漢語サ変動詞「怨ず」の意味と表現価値 国語学研究 第二十八号 東北大学文学部

森田喜郎 秋成小説の展開 文学研究 70

森頭治 雨月物語「菊花の約」考 立正大学国語国文第十七号

森頭治 『雨月物語』の構成に関する一試論 立正大学国語国文第二十四号